

令和5・6・7年度 福岡県重点課題研究指定・委嘱事業

最終報告会研究要録

課題 「生徒指導提要(改訂版)」の内容を踏まえた教育活動

川崎町研究主題

児童生徒が社会的自立を目指し安全・安心に
学べる学校づくり

～川崎町児童生徒支援システムづくりを通して～

川崎中学校研究主題

生徒にとって「安全・安心」な居場所づくり・絆づくりの
充実を目指す学校づくり

～川崎中 OSR を位置づけた教育活動を通して～



令和7年11月5日(水)

川崎町教育委員会

川崎町立 川崎中学校

川崎町立 川崎小学校 川崎東小学校 真崎小学校 池尻小学校

はじめに

川崎町では、令和2年度に「R e B o r n ! 川崎町 人を育み、町を創る。10年先も住み続けたい町へ」を将来像とし、「第6次川崎町総合計画」を策定して、「人を育む」「暮らしを育む」「つながりを育む」を3本柱にまちづくりを推進しています。

川崎町教育委員会では、この目標の具現化をめざし、令和2年度に行われた川崎町立中学校の再編と併せ、町内全ての学校においてコミュニティ・スクールによる地域とともにある学校づくりを推進しています。

このような中、令和5年度より福岡県教育委員会の重点課題『「生徒指導提要（改訂版）」の内容を踏まえた教育活動』の研究指定・委嘱を受け、町内全小・中学校で研究を進めてきました。

「生徒指導提要（改訂版）」の内容を踏まえた教育活動は、「居場所づくり・絆づくり」を大切にしたい新たな不登校を生まない安全・安心な学校づくりにおいて極めて重要な意義を持つものだと考えています。

不登校児童生徒数は全国的に増加傾向にあり、川崎町も不登校児童生徒数は多く町として大きな教育課題です。

川崎町教育委員会が研究指定を受けたことで、町内のすべての学校が各学校の特色を活かし、共通理解を図りながら組織的に発達支持的生徒指導を基盤とした教育活動を展開することができています。この取組は、川崎町の教育課題の改善に大きな影響を与えるものだと確信しているところです。

昨年度2年目の中間報告会では、川崎小学校において公開授業及び川崎小学校の研究・取組を中心に報告しました。本年度は川崎中学校において最終報告会を実施します。

本日御参会の皆様には、新たな不登校を生まない安全・安心な学校づくりの今後の充実に向け、忌憚のない御意見をいただきますようお願いいたします。

結びに、本事業の推進にあたり、御指導・御支援をいただきました福岡教育大学教授 友清 由希子 様、福岡県教育庁教育振興部義務教育課、福岡県教育庁筑豊教育事務所をはじめ関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

令和7年11月5日

川崎町教育委員会教育長 森 秀 二

も く じ

○ はじめに	1
○ もくじ	2
○ 日程	3
○ 校舎配置図	4
○ Welcome 合唱	5
Ⅰ. 研究構想	
Ⅰ 川崎町研究構想	6
Ⅱ 川崎中学校研究構想	10
2. 研究の実際	
Ⅰ 実態把握と支援づくり	14
Ⅱ 組織体制づくり	22
Ⅲ 発達支持的生徒指導の取組づくり	
Ⅰ 川崎中学校	31
2 川崎東小学校 3 真崎小学校	39
4 川崎小学校 5 池尻小学校	47
3. 研究の総括	55
4. 学習指導案	59
5. 資料	78
6. 全体会	
○全体会Ⅰ	86
開会行事	
川崎町・川崎中学校研究の概要	
○全体会Ⅱ	88
質疑・応答	
研究のまとめ	
7. 分科会	
A 分科会【川崎中学校】	90
B 分科会【川崎東小学校・真崎小学校】	91
C 分科会【川崎小学校・池尻小学校】	92
○ 研究同人	93

日 程

12:35		13:00		13:10		13:45		13:55		14:45		15:00		15:45		16:00		16:35	
受付	歓迎合唱	全 体 会 I		移動	公 開 授 業	移動	分 科 会				移動	全 体 会 II							
		(1)開会行事					A 分科会(中学校) B 分科会(小学校Ⅰ) C 分科会(小学校Ⅱ)					(1)研究のまとめ							
		(2)研究の概要説明										(2)閉会行事							

○ 全体会Ⅰ【川崎中学校体育館】13:10～13:45

(1) 開会行事・あいさつ	福岡県教育委員会	義務教育課長	矢野 勝也
	川崎町立川崎中学校	校長	安部 博智
(2) 研究の概要説明	川崎町教育委員会	指導主事	金高 智典
	川崎町立川崎中学校	教諭	平林 大

○ 公開授業 13:55～14:45

学年・組	教科等	単元・題材名等	授業者	授業会場
1年1組	数 学	4章 比例と反比例 「比例と反比例の利用」	大谷洋介	1年1組教室
1年2組	社 会	3章 世界の諸地域 「アフリカ州」	江口悦正	1年2組教室
1年3組	外国語	Unit7 「An Online Tour of the U.K.」	藤川梨紗	1年3組教室
2年1組	数 学	4章 平行と合同 「平行線と角」	佐藤貴子	2年1組教室
2年2組	道 徳	B-(6) 思いやり、感謝 「夜のくだもの屋」	上田苑加	2年2組教室
2年3組	学 活	学級活動(3)-ウ 「私のキャリアプラン」	井上 誠	2年3組教室
3年1組	国 語	いにしえの心を受け継ぐ 「君待つと」一万葉・古今・新古今	犬丸成美	3年1組教室
3年2組	学 活	学級活動(3)-ウ 「主体的な進路の選択と将来設計」	高水間 聡	3年2組教室
3年3組	家 庭	消費生活・環境 「購入・支払いと生活情報」	渡邊雅美	3年3組教室

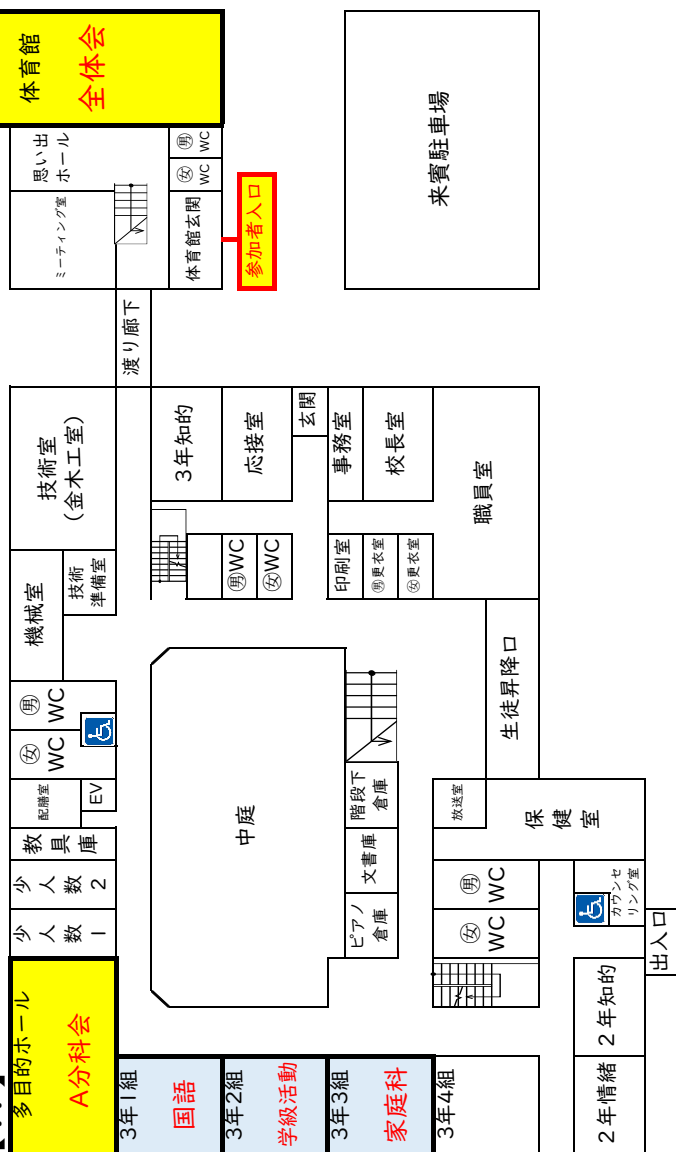
○ 分科会(各部報告・質疑応答) 15:00～15:45

- A 分科会(川崎中学校の取組)…………… 1階多目的ホール
【生徒が主語になる川崎中 OSR 及び新たな不登校を生まないグリーン会議の取組】
- B 分科会(川崎東小学校・真崎小学校の取組)… 2階多目的ホール
【児童が主体的に学ぶ自己選択を取り入れた授業改善の取組】
- C 分科会(川崎小学校・池尻小学校の取組)…… 3階多目的ホール
【児童が主体的学びの質を高める諸活動の取組】

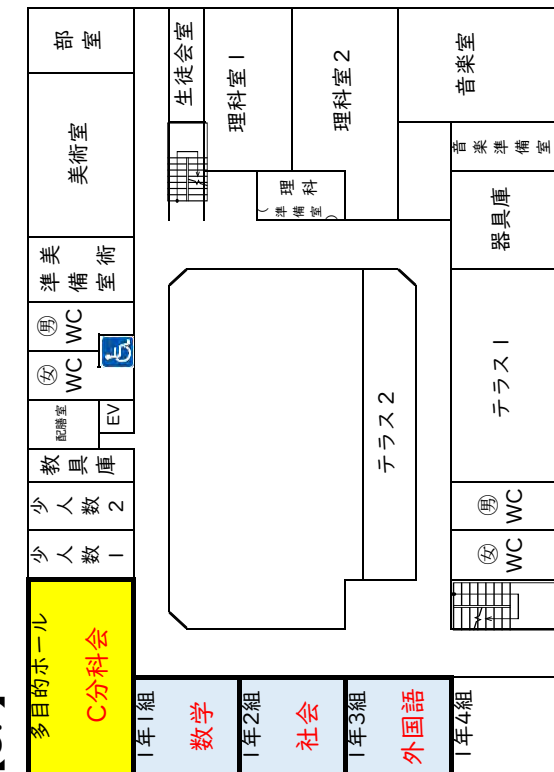
○ 全体会Ⅱ【川崎中学校体育館】16:00～16:35

(1) 質疑・応答			
(2) 研究のまとめ	福岡教育大学	教授	友清由希子
(3) 閉会行事 あいさつ	川崎町教育委員会	教育長	森 秀二

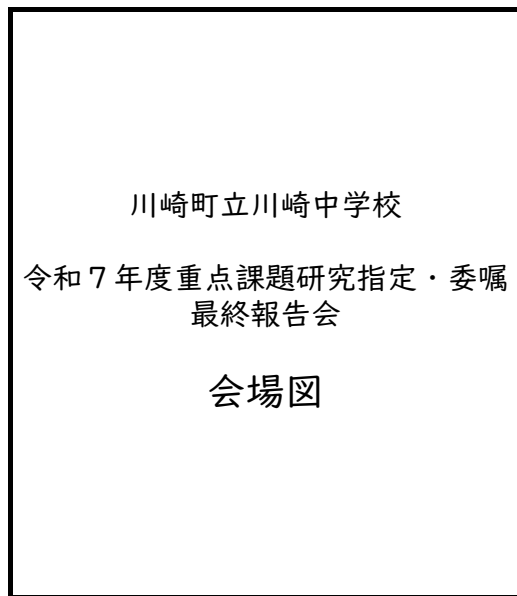
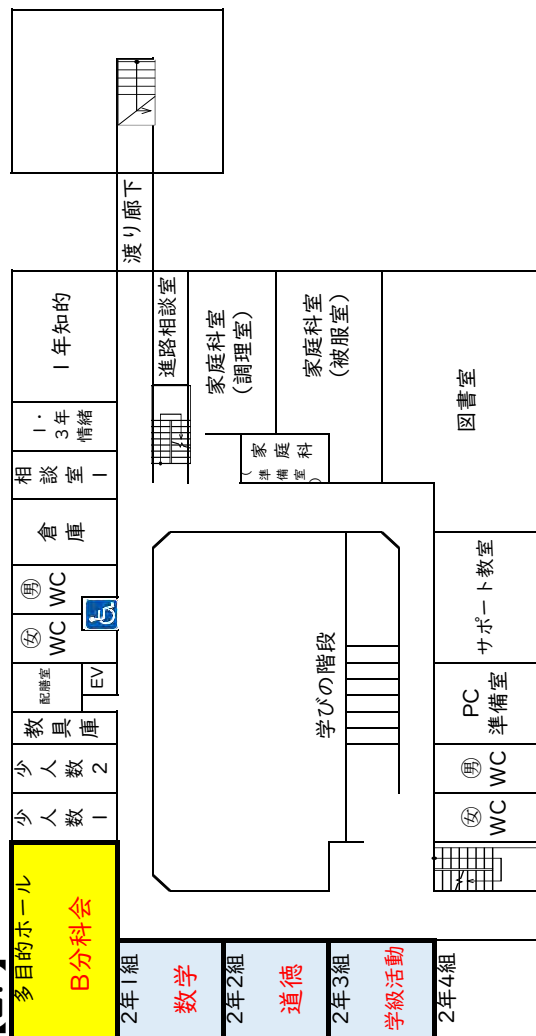
【1F】



【3F】



【2F】

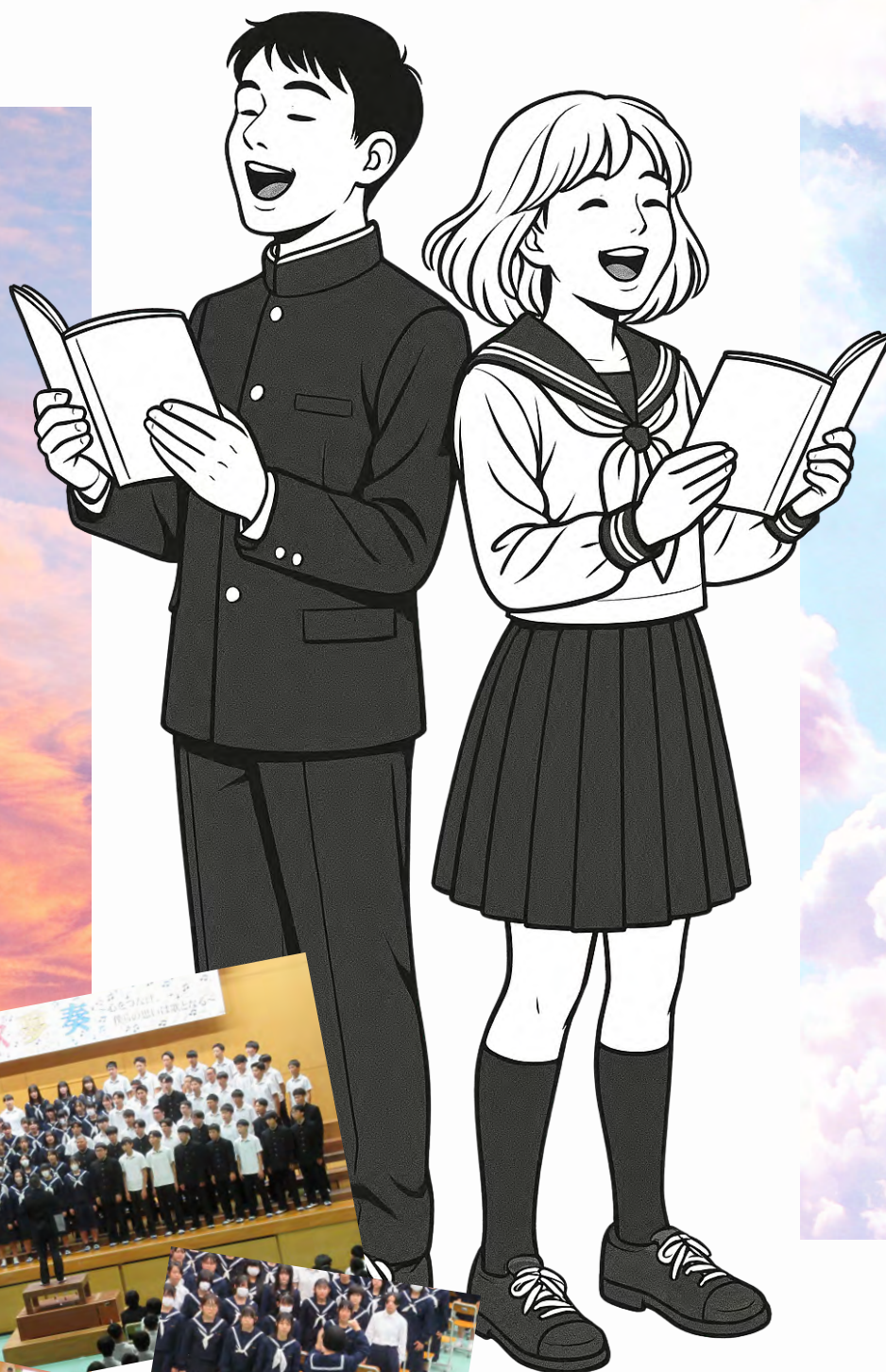


Kawasaki Junior High School

WELCOME 合唱

生徒が主役となり、
磨き上げた合唱です

生徒一人ひとりの表情を御覧ください



11.5 WED

川崎中学校 3年生

I. 研究構想

I 川崎町研究構想

II 川崎中学校構想

「安全・安心な学校」
とは・・・
「社会的に自立する子ども」
とは・・・
子どもの未来を創る
学校の在り方とは・・・

川崎町の子どもの育ちを支援する体制をどのように考え、どのように具現化しようとしたか、研究の全体像をお示します。

I 川崎町研究構想

1 川崎町研究主題

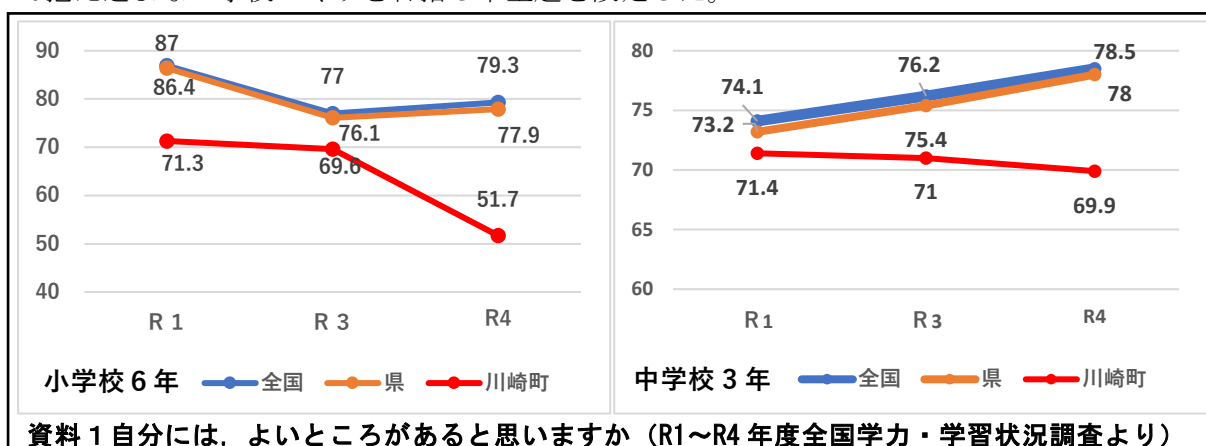
児童生徒が社会的自立を目指し安全・安心に学べる学校づくり ～川崎町児童生徒支援体制づくりを通して～

2 主題設定の理由

近年、児童生徒を取り巻く環境が急速に多様化・複雑化する中で、全国的に不登校や学校生活への不適応など、様々な困難を抱える子どもたちが増加している。本町においても、長期欠席や不登校の状態にある児童生徒が依然として一定数存在し、その多くが自己肯定感の低さや将来への見通しを持てないことなど、共通した課題を抱えている（資料1）。

生徒指導提要の改訂に伴い、新たな不登校を生まない安全・安心な学校づくりと、それを担う教師の意識の変革が強く求められている。これまでの「問題行動への対応」から、「子ども一人ひとりの理解と支援」へと、生徒指導の在り方が大きく転換する中、本町においても、発達支持的生徒指導の視点を教育活動全体に位置付け、学校・家庭・地域が連携しながら、予防的かつ包括的な支援体制の構築を進めてきた。

本研究において川崎町では、児童生徒一人ひとりが自分のよさを見つけ、他者と協力しながら将来の社会的自立を目指すための必要な力を育むこと、そして、誰もが安全・安心に学べる教育環境を整えることを目標としている。そのために、学力面と生活面を一体的に捉え、教育委員会と各学校・関係機関が連携しながら、児童生徒への支援体制づくりとともに教師が一人で抱え込まない学校づくりを目指し本主題を設定した。



3 主題の意味

【社会的自立を目指し安全・安心に学べる学校づくりとは】

社会的自立を目指し安全・安心に学べる学校づくりとは、発達支持的生徒指導を基盤に児童生徒が、自らのよさを認識し、他者と繋がり、社会的自立に向けてよりよい生き方を選択できる能力を獲得するための環境づくりである。具体的には、発達段階に応じた支援、いじめや不登校の未然防止・早期発見・継続的支援の取組、相談体制の充実、ICTの活用等、学校における生活環境、学習環境を向上させるための児童生徒一人ひとりに寄り添った支援体制や児童生徒を取り巻く社会とのつながりを意識させる体験活動などの諸活動を組織的に整えることである。

これらの相互作用によって、児童生徒が身体的・心理的・社会的に安心して学べる学校づくりを推進していく。

【川崎町児童生徒支援体制づくりとは】

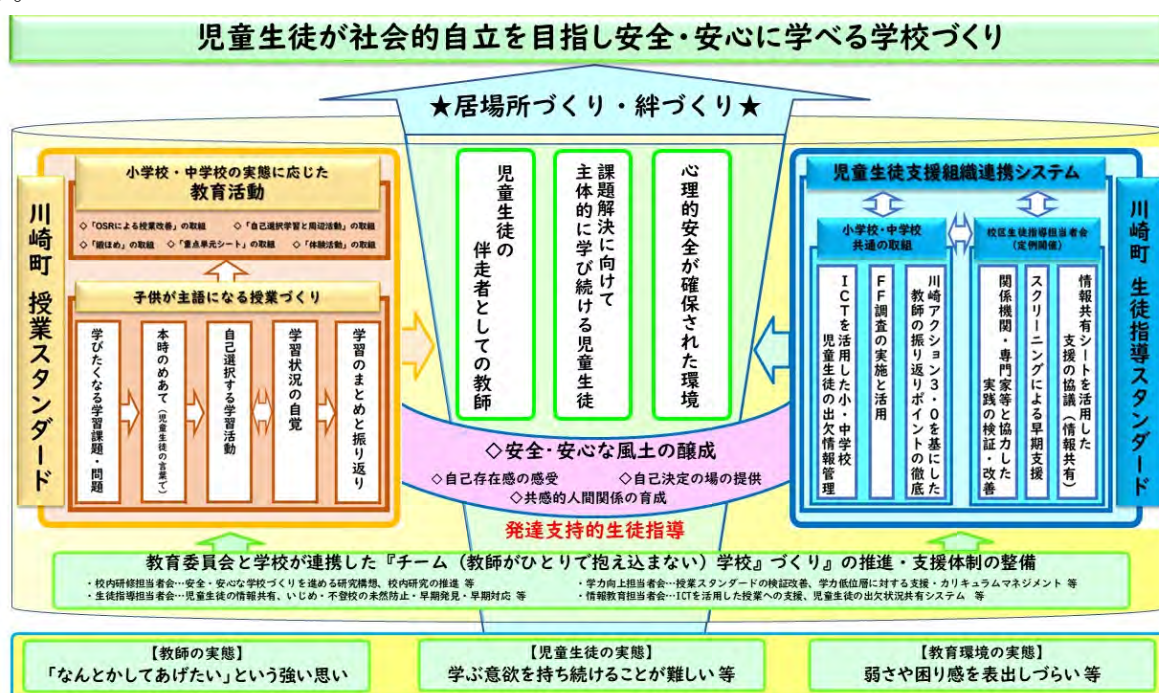
川崎町児童生徒支援体制づくりとは、学習指導・生徒指導を一体的にとらえ、各校の実態に応じて児童生徒の社会的自立を目指す小・中学校の実践を教育委員会が支援する組織及びしくみのグランドデザインのことである。このため本町では、「学力向上」・「生徒指導」・「校内研修」・「情報教育」の4つの担当者会を設置し教育委員会と各学校の担当者が情報共有・相互連携できるようにしている。

また、学習指導の基盤として、子どもが主語になる授業づくりを通して生徒指導の機能を生かした安心して学べる授業づくりを行うこと、学校行事や様々な体験活動を通してお互いの個性や多様性を認め合い、安心して学びに向かう風土を醸成する環境整備を行う等を含めた、本町の学習デザインである授業スタンダード（資料3）を位置付けている。

さらに、生徒指導の基盤として、児童生徒が安心して通える魅力ある学校を推進するため学校・行政・諸関係機関が一丸となって児童生徒を見守り、支援することができるよう生徒指導スタンダード（資料3）を位置付けている。本町において学校で起きる諸課題の要因は、児童生徒の特性（発達等）や家庭環境など、要因は多岐にわたる。そのため支援にあたっては、児童生徒についての情報を教育委員会と共有し、担任等が問題を抱え込まず、チームとして連携して取り組むことが重要である（資料2）。これは、いじめ・不登校などの未然防止のみならず、学力向上や生徒の自己肯定感の育成にもつながる重要な視点である。そこで、学校・教育委員会が一体となり子ども達の成長・発達に向けて学習課題・生活課題を一体的にとらえ包括的に支援していくことが重要であると考え、児童生徒の発達を支援する「川崎町児童生徒支援体制」の構築を目指している。



資料2 SSWSV研修会



資料3 「川崎町重点研究構想図」

4 川崎町としての研究の内容と方法（学校への支援体制と組織連携システムづくり）

福岡県の重点課題の研究の内容として、以下の3点が示されている。

〔視点1〕安全・安心な風土の醸成（居場所づくりと絆づくり）

〔視点2〕ICTやFF調査等を活用した個々の状況把握とその状況に応じた支援

〔視点3〕「発達支持的生徒指導」を推進する生徒指導体制の構築

そこで、本町の実態を踏まえ、次のように取組を推進していく。

(1) 視点1について

○ 安全・安心な風土の醸成（居場所づくりと絆づくり）のために以下の実践を行う。

- | |
|--|
| <p>① 授業において児童生徒が見通しを持って学び、「分かる・できる喜び」、「考える楽しさ」を感受し、自己有用感や自己が他者から尊重されていることを実感できる自己決定の場のある授業づくりと学びに向かう力を育む体験活動の実施</p> <p>② 福岡アクション3を参考に作成した「川崎アクション3.0」（※1）の実施</p> |
|--|

※1 川崎アクション3.0とは（P78 資料4 参照）

川崎アクション3.0とは、町内全ての学校において、共通して実践すべき取組を明確化し、きめ細やかな取組の充実を図り、「新たな不登校を生まない安全・安心な学校」を目指す指針であり児童生徒と関わる様々な場面における教師の基本的な姿勢についてまとめたものである。これは福岡アクション3が示すように不登校対策の「3つの視点」（日常の支援、早期発見・早期対応、きめ細やかで継続的な支援）を参考に、今回の生徒指導提要の改訂に示す重層的支援構造の生徒指導の4層（第1層「発達支持的生徒指導」と第2層「課題予防的生徒指導：課題未然防止教育」、第3層「課題予防的生徒指導：課題早期発見対応」、第4層「困難課題対応的生徒指導」）から各学校で実践されている取組を4つのステージに整理し、各ステージに「3つのアクション」を設定しています。また、これらのアクションは福岡アクション3と同様、1「すぐできる」（具体的で、即実行できる）2「必ずできる」（負担感が少なく、誰でも必ずできる）3「みんなでできる」（組織的・計画的・継続的にできる）の3つの特徴を備えている。

(2) 視点2について

○ ICTやFF調査等を活用した個々の状況把握とその状況に応じた支援のために、以下の実践を行う。

- | |
|---|
| <p>① 児童生徒の出席状況のデータ化による不登校の未然防止、早期発見・対応の取組</p> <p>② 児童生徒情報共有シート（※2）の作成と、学校・行政・関係諸機関の情報共有</p> |
|---|

※2 児童生徒情報共有シートとは（P79 資料5 参照）

児童生徒情報共有シートとは、どことも、誰ともつながっていない子ども0（ゼロ）を目指して川崎町生徒指導担当者会において不登校や不登校兆候にある児童生徒の出欠の状況をはじめ、不登校の要因、マンツーマン対応教員や学校外の関係機関との連携の様子など、校内はもとより教育委員会、子育て支援課など、関係機関が児童生徒の状況を把握するためのものである。

このシートを各学校、教育委員会がICTを活用して共有し、関係機関が連携して支援を行うことができる。

(3) 視点3について

○ 「発達支持的生徒指導」を推進する生徒指導体制の構築のために、以下の実践を行う。

- ① 児童生徒同士の自発的・主体的な発達を教師が支援する、多面的な視点に立った教師の姿勢や態度の在り方の整理（教師の振り返りポイント）※3
- ② 児童生徒が主体的に企画・運営・参加できる教育活動の工夫

※3 教師の振り返りポイントとは（P80 資料6参照）

教師の振り返りポイントとは、川崎アクション3.0と連動して、1日の学校生活を通して教師がどのように児童生徒と関わっているかを振り返ることができるように学校生活の全般と「朝」、「授業中」、「帰り」の場面に応じてセルフチェックを行うものである。

生徒指導の視点「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」に係るチェックポイントを教師自身が意識することで教師自身が意識改革（マインドチェンジ）を促すことができる。

5 研究の目標

「生徒指導提要（改訂版）」の内容を踏まえた教育活動に関する実践的研究を通して、「居場所づくりと絆づくり」を大切にしない不登校を生まない学校づくりの在り方を究明するとともに不登校の「未然防止」「早期発見」「早期対応」に向けた川崎町児童生徒支援システムの構築を通して児童生徒が社会的自立を目指す安全・安心な学校づくりを推進する。

6 研究仮説

川崎町全体の児童生徒支援体制づくりを行うことで学校、関係機関が児童生徒の状況を共通理解し、生徒指導の機能を生かした教育活動を展開することで、安全・安心な風土のもと、新たな不登校を生まない、児童生徒が社会的自立を目指す教育活動が展開できるであろう。

Ⅱ 川崎中学校構想

1 研究主題

生徒にとって「安全・安心」な居場所づくり・絆づくりの充実を目指す学校づくり

～川崎中 OSR を位置づけた教育活動を通して～

2 主題設定の理由

近年、子どもたちを取り巻く環境は、少子化、核家族化、デジタル化、グローバル化、価値観の多様化など、昨今の社会的背景によって大きく変化してきている。中でも、いじめの重大事態や不登校、虐待、自殺者数の増加などは極めて憂慮すべき事態である。さらに、生徒指導上の課題も複雑化・深刻化してきており、子どもたちの不安や悩みが従来とは異なる形で現れたり、一人で抱え込んだりしているケースも多い。加えて、「いじめ防止対策推進法」や「義務教育の段階における普通教育に相当する機会の確保等に関する法律」の成立等、関連法規や組織体制の在り方など、生徒指導をめぐる状況は大きく変化している。こうした状況を踏まえ、生徒指導の基本的な考え方や取組の方向性等を再整理するとともに、今日的な課題に対応していくため、「生徒指導提要」が令和4年12月に改訂された。

現在、子どもたちの多様化が進み、様々な困難や課題を抱える児童生徒が増える中、学校教育では、子どもの発達や教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を最大限伸ばしていく教育が求められている。令和5年3月には、文部科学省より誰一人取り残されない学びの保障を社会全体で実現するために「COCOLO プラン」が提示された。この中で、①不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思ったときに学べる環境を整える、②心の小さな SOS を見逃さず、「チーム学校」で支援する、③学校の風土の「見える化」を通じて、学校を「みんなが安心して学べる」場所にするものの3つの柱で整理されており、これらを推進していくことが求められている。つまり、学校関係者が一丸となって、すべての子どもたちに対して、安全・安心で、楽しく通える魅力ある教育環境をつくっていく必要がある。そこで、児童生徒の「個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」ように働きかけ、児童生徒が「自発的・主体的に自らを発達させていく過程を支える」発達支持的生徒指導を、組織的・体系的にすすめる、教職員のマインドチェンジや同僚性を高めていく必要がある。

福岡県内小・中学校の不登校児童生徒数は毎年増加し、令和5年度は17,859人とこの5年間で約2.5倍となっており、不登校児童生徒への支援は喫緊の課題となっている。「福岡県不登校児童生徒支援グランドデザイン（第1版）」では、不登校を生まない学校づくりとして、「生徒指導の機能を生かした授業づくり」、「絆づくりと居場所づくり」「豊かな人間関係の醸成」の教育活動を推進することが挙げられている。また、不登校の早期発見・早期対応の取組として、

『福岡アクション3』の推進」「不登校予防診断チェックリスト（FF 調査）の活用」「校内教育支援センター等における支援」、不登校児童生徒に応じた支援として「チームサポート（マンツーマン）対応」「SC・SSW の活用」「教育支援センター等との連携」などが示されている。このように「居場所づくり」と「絆づくり」の一体的な取組をすすめることや、定期的な取組の検証、専門家によるアセスメント、関係機関との連携による適切な支援は、新たな長期欠席を生

まない安全・安心な魅力ある学校づくりにつながる。

本校においては、国や県と比較して、不登校出現率が高い状況が長年続いている。生徒が「学校に行くのが楽しい」と思える学校づくりをすすめるためには、国や県の施策を踏まえながらも本校独自の取組である「川崎中 OSR」を全教育活動に位置付けて、PDCA サイクルを活用して組織的かつ計画的に行っていくことが効果的であると考え。さらに、FF調査やグレーゾーン会議（不登校兆候が見られる生徒の把握等）を行い、生徒が社会的自立を目指すために適切な支援を講じていくことで、新たな長期欠席を生まない学校づくりができると考える。

このような理由から、本町が掲げる生徒が社会的自立を目指すために、主題を『生徒にとって「安全・安心」な居場所づくり・絆づくりの充実を目指す学校づくり』と設定した。

3 主題・副主題の意味

(1) 生徒にとって「安全・安心」とは

本校において、生徒にとっての「安全・安心」は、身体的危険から守られることだけでなく、心理的な安心感をもち学習や生活ができる環境と捉える。具体的には、いじめや暴力、事故などから守られること、さらに、自分の意見や感情を安心して表現できる場が提供されている状態のことである。しかし、安全な環境が整えば生徒の安心感を醸成していける訳ではない。生徒の安心感を醸成していくためには、社会的欲求を満たしていくことが大切であり、生徒が互いにつながり合うことで集団を形成する過程において、その集団に所属感を抱き、承認されている・認められていると実感できる必要がある。生徒のつながる力を育むために、教師は意図的に生徒の非認知能力の育成を支える必要があり、PDCA サイクルを活用して組織的かつ計画的に教育活動を進めていくことが大切である。

(2) 居場所づくり・絆づくりの充実を目指す学校づくりとは

居場所づくりとは、学校や学級を全ての生徒にとって落ち着ける場所にすることである。そのために、「生徒が安心でき、自己存在感や充実感を感じられる場所を提供する」ことを教師主導で行うことが大切である。絆づくりとは、生徒が主体的に取り組む活動を通し、自らが絆を感じ取り紡いでいくことである。これら2つの一体的な充実を図るために、①共通した授業づくりの実践（わかる・できる喜びを感じ、達成感や満足感を味わう）、②共通した集団づくりの実践（活動を通して認め合い、所属意識と自己有用感をもつ）、③校内生徒支援の実践（諸調査に基づいた分析と適切な支援等）をする必要があり、PDCA サイクルを活用して組織的かつ計画的に行うことが生徒にとって魅力ある学校づくりへとつながる。

(3) 川崎中 OSR を位置付けた教育活動とは

生徒が学校生活における多様な他者との関わりや学び合いの経験を通して、学ぶこと、生きること、働くことなどの価値や課題を見いだす過程において、Outlook（見通しをもつ）、Support（支援を求める）、Reflection（振り返る）の3視点を持って教師が生徒を支援する教育活動のことである。

川崎中 OSR を「川崎中学校授業スタンダード」による授業づくりの実践及び集団づくりの実践、校内生徒支援の実践に位置付ける。

授業づくりについては、導入段階に O、展開段階に S、終末段階に R の3視点に応じた手立てを打っていく。具体的には、導入段階では前時学習とのつながりを意識して、意欲をもって取

り組むことができるように手立てを打つ。展開段階では、学習課題を達成するために自分が取り組む学習形態や学習方法の自己選択ができる場面や自分の考えを付加、修正、深化するための交流活動を位置付ける。終末段階では、生徒自身が考えの変容や課題に対する学び方を自覚することができるように振り返りの場を設定する。

集団づくりについては、特別活動を中心とした朝学習や縦割り活動、生徒会活動等において、取り組みの目的や課題をもつ 0、実践中の S、実践後の R の 3 視点を教師がもつことで、生徒が主体的に取り組むことができるようにする。

校内生徒支援の実践については、FF 調査と関連付けたグリーゾーン生徒の抽出による支援を「川崎アクション 3.0」を活用して、実態・要因把握の 0、実践中の S、評価・改善の R の 3 視点を教師がもって取組を行う。

以上のことは、安全・安心な風土の醸成や生徒の自己指導能力の獲得に繋がり、社会的自立に向かう姿が期待できる。

4 研究の内容・方法

【川崎中 OSR を推進するための組織と具体的な取組】

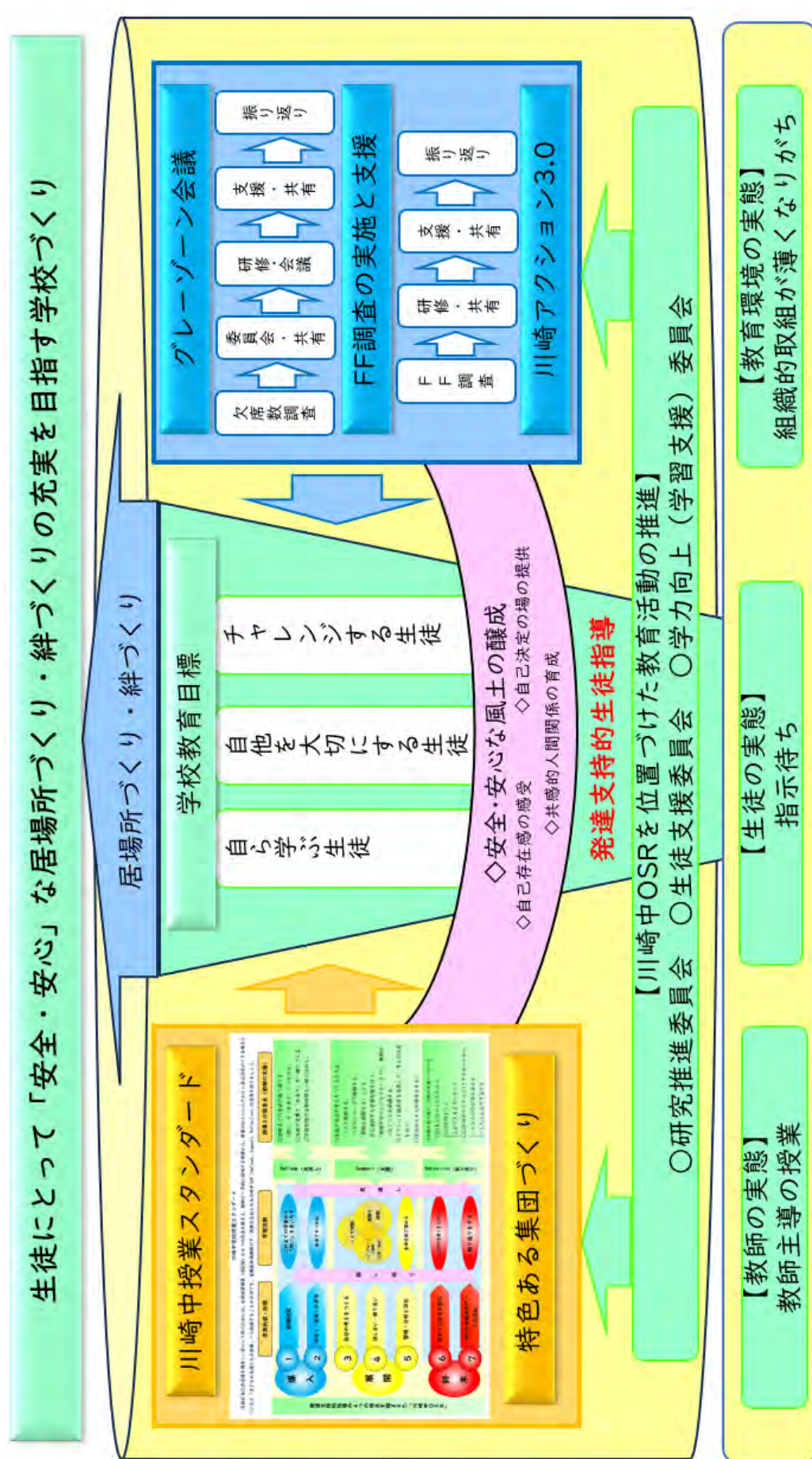
各部会	具体的な取組
学力向上 (支援) 委員会	・ 川崎中学校スタンダードの作成・実践 ・ 交流のスキルの作成・実践 ・ ICT 機器を活用した学習支援 ・ 朝学習（朝数学，朝学活）の実施
生徒支援委員会	・ グリーゾーン会議の実施 ・ 生徒支援共有シートの作成・活用 ・ FF 調査に基づく支援 ・ 川崎アクション 3.0 の活用
研究推進委員会	・ データ収集・分析（FF 調査，出席調査，授業アンケート，学テ） ・ 教師の振り返りポイントの活用 ・ Building Relationships 研修（B 研）の実施 ・ 川崎中 OSR に基づく教育活動を推進する理論研修の実施 ・ 研修の企画，立案

5 研究の目標

本町が掲げる「生徒が社会的自立を目指し安全・安心に学べる学校づくり」の在り方を究明するために、本校では、生徒の実態に応じた「新たな不登校を生まない取組」を明確にし、全教育活動を通して川崎中 OSR を展開していくことで、生徒にとって「安全・安心」な居場所づくり・絆づくりを充実させ、安全・安心な風土を醸成し、不登校の未然防止及び不登校・不登校兆候生徒の減少を図る。

6 研究仮説

生徒にとって「安全・安心」な居場所づくり・絆づくりの充実を目指す学校づくりにおいて「川崎中 OSR を位置付けた教育活動」を研究の内容に沿って講ずれば、安全・安心な風土が醸成され、生徒は自己指導能力を獲得し、社会的自立を目指すことができるであろう。



資料7 川崎中学校構想図

2. 研究の 実際

I 実態把握と支援づくり

子どもの不登校・長欠につながる要因は？

FF調査を中心にした多面的な調査・実態把握と結果の共通理解の重要性

その調査データをすべての教育活動に生かすには・・・

II 組織体制づくり

担任（教科担任）など一部の教師に任せることなく、すべての教職員が生徒指導の視点を持って、組織的・機能的にマネジメントを行うにはどうすればよいのか・・・

III 発達支持的生徒指導の取組づくり

教師の意識変革による発達支持的生徒指導の推進、

そしてそこから生まれる新たな意識の変容、児童・生徒、教師すべてが安全・安心に通える学校づくりの事例を紹介します。

研究の実際 I 実態把握と支援づくり

新たな**長期欠席**をうまない

安全・安心な**居場所づくり・絆づくり**のためのポイント

Q 1 “どのよう**な**” 生徒の実態を把握すべきか

Q 2 “どのよう**に**” 生徒の実態を把握すべきか

Q 3 実態把握したデータをどのように**共有・活用**すべきか

全国的な課題である，年々増加する長期欠席数
学校として，教師として，
生徒の内面にある長期欠席の要因を
どのように見とり，どのような支援を行っていくのか
実態の把握，そのデータを共有・活用する
具体的方法を究明していく

Q1 “どのような”生徒の実態を把握すべきか

Q2 “どのように”生徒の実態を把握すべきか

1 欠席数から見る生徒の実態把握

(1) 本町の児童生徒の実態把握に向けて

本町では、児童生徒の実態を把握する際に「不登校数」ではなく「長期欠席数」に注目している。不登校を指標とすることも可能であるが、長期欠席を基盤に捉えることでより幅広い生徒の状況を把握し、早期に支援へとつなげることができる。また、長期欠席数の減少は学校全体の安定した教育活動にも直結するため、本研究では長期欠席数の推移に着目し、その改善を目指す。

- 長期欠席数・・・欠席理由を問わず年間30日以上休んだ生徒の数
- 不登校数・・・(長期欠席数)－(病気や経済的な理由などで学校を休んだ数)

(2) 本校生徒の欠席数の推移から

本校では、本研究以前から長期欠席生徒の割合が福岡県全体と比較しても非常に高い状態が継続している（資料8・9）。数値としてはおおよそ福岡県の約2倍の生徒が長期欠席であり、現在すでに長期欠席生徒への対応と同時に、新たな長期欠席をうまない取組を早急に進めていく必要がある。

長期欠席者の割合	R4	R5	R6
本校の長期欠席者数 ／ 本校の在籍生徒数	84人／371人 22.6%	68人／343人 19.8%	78人／347人 22.5%
福岡県の中学校の長期欠席者数 ／ 福岡県の中学校の生徒数	11,921/132,232人 9.0%	13,379/132,430人 10.1%	

資料8「本校と福岡県の長期欠席者に関するデータの比較」

年度	R4	R5	R6
本校の長期欠席数内訳	※	継続 50人 新規 18人	継続 65人 新規 13人

※コロナ禍により発熱等の欠席者を出席停止としていたため、有効的な数値が計測できなかった。

資料9「本校の不登校に関するデータ」

また、本校生徒の欠席傾向として、以下のような点が挙げられる。

- 連絡なしの欠席が多い
- 行事（取組）前後の欠席が多い
- 学期移行時（特に1学期から2学期）に切り替わるタイミングで欠席数が増加する

この実態を受け研究推進委員会では、「**すべての生徒が長期欠席になる要因を内面に抱えているのではないか**」という視点に立ち、実態調査の方法を吟味、調査の実施、結果の分析、データの共有、支援の具体策を立案する場を設定することを決定した。

2 FF 調査を基にした生徒の実情の把握

(1) 調査方法

○ FF 調査（不登校予防診断チェックリスト）

本町では、全小中学校で FF 調査を実施し、すべての児童生徒を適切な支援に繋げるために、児童生徒の不登校問題の背景にある要因を多様な側面から把握することを試みた。

FF 調査とは

多様な側面（※）から児童生徒の不登校の兆候を発見・分析することができる。

※ 6 つの側面

他者理解スキル・・・他者の感情を理解する能力の習得状況

自己理解スキル・・・自分の感情を理解する能力の習得状況

友人関係・・・友人との関係に対して抱いている魅力の程度

学校魅力・・・教職員や学校での学習等に対して感じる魅力の程度

学校規範・・・学校の規則や、学びに対する価値の意識の程度

家庭生活・・・規則正しい生活や人間関係の程度

(2) 調査時期、実施方法

○ 調査時期・・・4月・7月・12月・3月（年度当初，学期末に実施）

○ 実施方法・・・オンラインアンケート作成ソフトを活用し，基礎データを収集 その基礎データを県作成の情報共有ソフトに書き出し自動分析

○ それぞれの時期に調査をする意義

4月・・・本校の欠席の傾向として，学期（学年）移行時に欠席数が増加する傾向にある。その原因となり得る学年移行による対人関係の不安や，生活リズムの乱れを早期に把握し，年度当初の欠席数を増加させないために実施する。

7月・・・1学期の学習や行事を通じた友人関係・適応状況を確認し，夏季休業中や2学期序盤での生活支援につなげる。

12月・・・2学期の学習や行事を通じた友人関係・適応状況を確認し，年度末への見通しを立てる。

3月・・・1年間のまとめとして生徒の変化や課題を整理し，次年度の支援につなげる。

A 生徒指導提要の趣旨を踏まえた「実態把握」の在り方

○ すべての生徒が長期欠席になる要因を内面に抱えているかもしれないという認識をもつ。

○ FF 調査を年度当初や学期末に定期的実施し，児童生徒の不登校の背景にある要因を多様な側面から把握し，早期支援につなげる。

Q3 実態把握したデータをどのように共有・活用すべきか

3 実態把握したデータの共有・活用

(1) FF 調査を基にした支援づくり

FF 調査では「自分」「他者（友人、教師）」「学校」など人や環境への適応感を図り、長期欠席の兆候をデータに基づき把握することができる。

調査を重ねる中で項目ごとの要支援生徒の推移を整理した。資料10の数値は、支援を必要とする生徒数を示しており、数値が高いほど該当項目に課題を抱える生徒が多いことを意味している。

現1年生(111名)	R6.12月	R7.4月	R7.7月
対人理解スキル		6	10
自己理解スキル		6	15
友人関係		12	12
学校魅力		13	19
学校規範		13	18
家庭生活		29	27

現3年生(102名)	R6.12月	R7.4月	R7.7月
対人理解スキル	5	14	15
自己理解スキル	15	13	10
友人関係	7	9	12
学校魅力	26	6	18
学校規範	25	11	20
家庭生活	28	15	21

現2年生(120名)	R6.12月	R7.4月	R7.7月
対人理解スキル	19	12	6
自己理解スキル	18	10	8
友人関係	25	12	13
学校魅力	39	15	26
学校規範	39	22	34
家庭生活	28	24	16

学校全体(333名)	R6.12月	R7.4月	R7.7月
対人理解スキル	24	32	31
自己理解スキル	33	29	33
友人関係	32	33	37
学校魅力	65	34	63
学校規範	64	46	72
家庭生活	56	68	64

資料10 FF 調査における要支援生徒数

FF 調査の結果から、本校では「学校魅力」「学校規範」「家庭生活」の項目において課題が見られることが分かった。

- 学校魅力・・・教職員や学校での学習等に対して感じる魅力の程度
- 学校規範・・・学校の規則や、学びに対する価値の意識の程度
- 家庭生活・・・規則正しい生活や人間関係の程度

この視点を踏まえ、川崎中 OSRを軸としたすべての教育活動でこれらの課題にアプローチしていった。

さらに、FF 調査の個人結果にも注目し、生徒支援委員会による校内研修において学年ごとに情報を交流した。その際、「具体的な支援方法シート」を作成し、川崎アクション 3.0 の考え方をもとに、個々のもつ課題に応じた具体的な支援を協議・決定し、日々の生徒支援につなげている（資料11）。

対象生徒名	(When)いつ！	(Who)誰が！	(What)何を！*どんな手立てで*誰と連携して
1	登校時・放課後	学年職員	「承認・称賛・励まし」の声かけを
2	授業中・休み時間	学年職員	笑顔で出迎え、顔を見ながら言葉かけ
3	休み時間・放課後	担任・副任	子どもとの話は「受容・共感・傾聴」で
4			

資料11 具体的な支援方法シート

(2) 欠席日数を基にした長期欠席生徒への支援

本校では、長期欠席生徒への支援をより効果的に行うため、生徒支援委員会において「生徒支援共有シート」を情報共有ソフトで作成し、全教職員で活用している（資料12）。

共有シートには、下記の項目を設け、リアルタイムで情報を更新している。これにより、各生徒の状況を全教職員が迅速かつ的確に把握でき、個々の生徒の支援について具体的に話し合うことが可能になった。

生徒支援共有シートの項目

①欠席の合計数、②今週の出席・遅刻・早退数、③今週の生徒の様子、④来週の生徒に対する手立て、⑤マンツーマン対応教員、⑥関係機関との関わり、⑦最終安否確認 等

また、長期欠席に至っていないものの「気になる生徒」のピックアップや今週の生徒指導案件についても併せて共有することで、未然防止，早期発見対応，困難課題対応の全体的な生徒指導の充実につなげている。

3	所属学級	氏 名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	学校外関係機関	
			10	9	12	9	4								31日		
			今 様 週 子 の	欠席	遅刻	早退											
	不登校・不登校兆候の要因	現在の状況		3	0	0	木曜日に登校しており、金曜日もカウンセリングがあるため登校に意欲的である。								最終更新日	7月10日(木)	
	無気力・不安	改善傾向										その他の情報（補足等）					
	マンツーマン対応教員	最終安否確認	今 対 後 の	主な対応・内容		修学旅行参加を長期目標に、長期欠席が続かないようにすることを短期目標にし家庭訪問で計画を立てている。								毎週金曜日にSCと面談			
		2025/7/3		家庭訪問													

資料 12 生徒支援共有シート

(3) 欠席日数を基にした新たな長期欠席をうまないための生徒への支援

① 福岡県立大学の研究から

福岡県立大学の松浦賢長教授の研究によれば、長期欠席に至る児童生徒の傾向は、6月末時点における欠席日数をもとにある程度予測可能であるという。本校においてもこの研究結果を踏まえ、早期段階での支援が重要であるという認識のもと、6月末までの欠席状況に注視し、長期欠席のリスクが懸念される「グレーゾーン(※)」の生徒を早期に抽出し、校内へ共有する体制を整えている（資料13）。

※グレーゾーンの定義

- ・ 6月時点で欠席日数が9日以上29日以下の生徒
- ・ 10月時点で欠席日数が17日以上29日以下の生徒

	R4	R5	R6	R7
6月末までの 長期欠席予測	78人／371人 21.0%	66人／343人 19.2%	67人／347人 19.3%	66人／333人 19.8%
年度末の 長期欠席数	84人／371人 22.6%	68人／343人 19.8%	78人／347人 22.5%	

資料 13 「本校の長期欠席者数と長期欠席者予測数に関するデータ」

② グレーゾーン生徒への対応シートの活用

本校では、長期欠席の未然防止を図るため、福岡県立大学の研究結果を踏まえ「グレーゾーン」に該当する生徒を早期に抽出し、継続的に支援できる体制を整えている。抽出ルールは以下のとおりである。

- 年度当初
 - ・ 昨年度（R6 年度）の欠席数が、20 日以上 40 日以下の生徒
- 5 月から 6 月
 - ・ 明らかな病欠の生徒を除いた、欠席数が月 2 日以上 4 日以下の生徒
- 7 月以降
 - ・ 6 月末時点で、欠席数が 9 日以上 29 日以下の生徒
- 2 学期開始時
 - ・ 2 学期最初の 2 週間で、欠席数が 3 日以上 5 日以下の生徒
- 11 月以降
 - ・ 10 月末時点で欠席数が、17 日以上 29 日以下の生徒
 - ・ 欠席数が月に 3 日以上 5 日以下の生徒

これらの抽出基準に基づき、「グレーゾーン生徒への対応シート」（P20 資料 14）を作成し、次の情報を整理・共有している。

- R5、R6 の年間欠席数
- 毎月の欠席数の推移
- 4 月・7 月・12 月・3 月に実施する FF 調査の結果
- いつ、だれが、どの観点で（川崎アクション 3.0 に基づき）対応するのか
- 前月の欠席が 2 日未満、かつ直近 2 か月で 4 日未満の生徒は抽出対象から外す

これらのデータを情報共有ソフトに入力・共有することで、全職員が常に最新の情報を把握できる体制を整えている。特に「川崎アクション 3.0」の観点をもとに、生徒一人ひとりに応じた支援方法を検討・実践している。こうした仕組みにより、長期欠席リスクが顕在化する前の段階で具体的かつ常態的に支援できるようにした。

A 生徒指導提要の趣旨を踏まえた「データの共有・活用」の在り方

- FF 調査の結果を校内研修等で共有し、学校全体の課題、個々のもつ課題に双方に川崎アクション 3.0 に基づく具体的支援を実践する。
- 長期欠席生徒の情報を共有シートで可視化し、多職種で協働して支援する。
- グレーゾーン生徒を抽出し、川崎アクション 3.0 の観点で具体的かつ常態的に支援する。

3年1組		欠席数												FF調査												いつ・だれが	川崎アクション3.0	(What)何を！＊どんな手立てで＊誰と連携して			
														4月				7月				12月									
番号	対象生徒名	R5	R6	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	他	自己	友人	学校	学校	学校	学校	学校	学校				学校	学校	学校
																															(When) 他者との繋がりが強く特定の生徒としか接さないため、班活動を意図的に増やし交流する機会を提供する。また、毎週の漢字テストに意欲を見せているため、満点を取るように声掛け、達成時には褒めることを毎週継続する。
		23	99	7	4	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	16	50	55	52	47	53	47	50	52	45	42	37	42			(Who) 一人ひとりの成長やいいところを伝えて担任、教科担任
																															(When) 安全安心な居場所づくりのアクション 選手コンクールの取り組み (Who) 「承認・称賛・励まし」の声をかけを担任、副任A、B
		133	184	4	5	9	3	0	0	0	0	0	0	0	0	21	50	57	16	39	10	12	41	49	52	58	59	50			(When) 安全安心な居場所づくりのアクション 「承認・称賛・励まし」の声をかけを担任、副任A、B
																															(When) 自分から積極的に話しかけない傾向にあるので、職員で積極的に声掛けを行う。(日常会話程度からてよい)
		76	93	2	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7	50	52	45	53	43	43	47	52	45	48	41	46			(When) 早期発見・早期対応のアクション いつでもSOSをキャッチできる手立てを担任
																															(When) 欠席時は家庭連絡を入れる。次の日登校したら声掛けを行い、変化がないか確認する。
		128	134	1	1	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	9	38	23	45	42	20	4	21	24	32	29	23	22			(When) 早期発見・早期対応のアクション いつでもSOSをキャッチできる手立てを担任、副任C
																															(When) 他者との関係に不安を抱えているので、交流する場面ではグループづくりの支援を行う。 [redacted]などが世話を焼いてくれる)→そのほかの場面でも教室に行き渡る状況があるので、その場合は話を聞く。今後が続くようであればサポート教室も視野に入れる。
		5	13	0	2	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	7	59	31	38	53	30	16	53	33	28	48	30	22			(Who) 早期発見・早期対応のアクション いつでもSOSをキャッチできる手立てを担任、SC (When) 早期発見・早期対応のアクション いつでもSOSをキャッチできる手立てを担任
																0															(Who)

資料 14 グレーゾーン生徒への対応シート

MEMO

研究の実際 II 組織体制づくり

新たな**長期欠席**をうまない

安全・安心な**居場所づくり・絆づくり**のためのポイント

Q 1 校内の**組織体制づくり**はどのように進めるべきか

Q 2 校内の組織をどのように**機能**させるべきか

Q 3 教師の**マインドチェンジ**をどのように行うべきか

生徒を支えるための校内組織を

どのように構築し、どのように機能させていくのか

そして、支援の基盤となる教職員の意識を

どのように変容させていくのか

組織づくりとマインドチェンジの

具体的方法を究明していく

研究の実際 I
実態把握と支援づくり

研究の実際 II
組織体制づくり

研究の実際 III
発達支持的生徒指導の
取組づくり

Q1 校内の組織体制づくりはどのように進めるべきか

Q2 校内の組織をどのように機能させるべきか

1 安全・安心な居場所づくりのための校内組織体制づくり

(1) 本校の抱える組織づくりの課題

本校では、日々の授業、職員会議、職員研修、部活動指導、放課後の家庭訪問等、各教職員がそれぞれの役割をもち、業務時間内に全員が参画できる体制づくりが厳しい状態にあった。

また、令和6年度までは、校内の各委員会でそれぞれの取組が行われていたが、各分掌が独立して活動する傾向が強く、十分な連携が取れていなかった（資料15）。そのため、委員会間での情報共有が不十分であり、組織全体としての方向性が弱まり、全教職員が共通理解のもとで行動することが難しい状況であった。

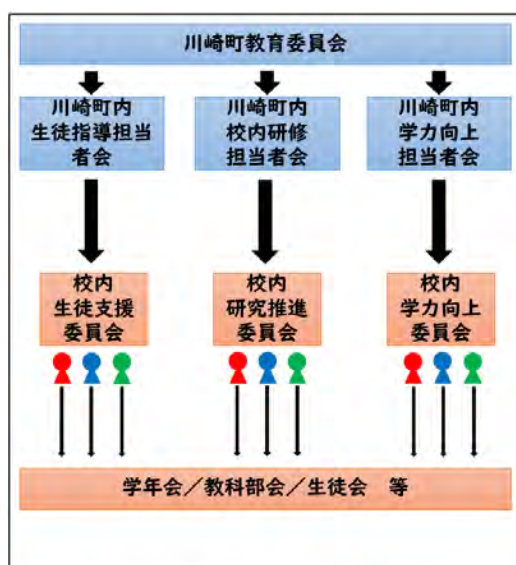
さらに、教職員間のコミュニケーションも一部の人間関係や特定の組織内にとどまっており、それぞれの意見や考えが十分に共有されない状況があった。その結果、相互理解が深まらず、教職員全体で協働して取り組むための基盤が弱いという課題も見られた。

(2) 本校の校内組織体制づくりと機能化

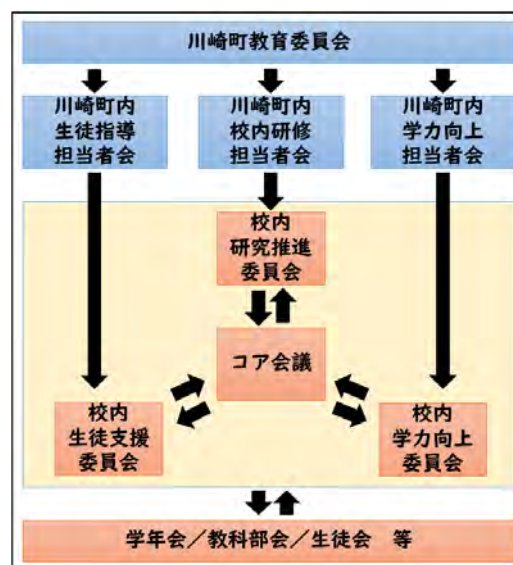
① コア会議の設置

上記の状況を踏まえ、本校では、令和7年度から組織的な教育活動を推進するため、各委員会を統括する「コア会議」を設置した。月に1回程度開催されるこの会議には、管理職、教務主任、各委員会の担当者が参加し、校内研究全体の方向性を確認するとともに、情報の共有を行っている。この取組により、諸活動の連携性を高め、全教職員が共通理解のもとで組織的に行動できることを目指している（資料16）。

さらに、コア会議や各部会で決定された方針は、毎週の学年会議や必要に応じた教科部会を通じて全教職員に伝達される。これにより、共通認識を深めつつ、全員が参画できる組織体制づくりを進めることができた。



資料 15 令和6年度までの校内組織図



資料 16 令和7年度の校内組織図

② 生徒支援委員会による「グレーゾーン会議」の設定

本校では、不登校の早期発見・対応を目的として、生徒支援委員会の枠組みの中に「グレーゾーン会議」を位置付けている。この委員会は以下の複数の立場の教職員で構成されており、多面的な視点から協議ができる体制となっている。

【生徒指導委員会構成員】

校長，教頭，生徒指導主事，各学年の生徒支援係，養護教諭，補導教員，支援加配教員，スクールカウンセラー（SC），スクールソーシャルワーカー（SSW），スクールサポーター（SS），生徒指導充実係

会議は月2回（第1週と第3週）に設定し，第1週では先月の欠席状況からその月の対応生徒を抽出，第3週では第1・第2週の取組を踏まえた修正・検討を行っている。この会議で研究の実際Ⅰで述べた「グレーゾーン対応シート」を活用し，各学年で確認・記入した内容を共有している。

一方，第2週・第4週は，「生徒支援共有シート」を用いて長期欠席生徒・気になる生徒・生徒指導案件の情報を共有している。

生徒支援委員会での協議内容は，再度学年会で伝達・検討され，全教職員による共通理解のもとで具体的な支援体制を機能させている。

③ Building Relationships 研修（B 研）の実施

本校では，教職員間のつながりを広げ，同僚性を高めることを目的として，B 研を導入した。B 研は月に1回，20～30分程度の短時間で実施（その後に一般研修30分程度とセット）され，毎回グループ編成を変えて活動することで，特定の関係に偏らない交流を意識的に図っている。

活動内容はグループエンカウンターを中心としており，職員の同僚性やメンタルヘルス向上に役立つとともに，そのまま学級活動で活用できる授業サンプルの提供にもつながっている。これまでに実施した活動には，ペーパータワー（資料17），先生だらけのマンション，すごろくトーキング，ウインターサバイバル（資料18），人間コピー機などがあり，いずれも協力・対話を促す内容である。



資料 17 ペーパータワーに取り組む姿



資料 18 ウインターサバイバルに取り組む姿

A 生徒指導提要の趣旨を踏まえた「校内組織」の在り方

- 各委員会を統括する「コア会議」を設置し、委員会間の連携性を高めると同時に、情報と方針を一元化する。
- 不登校の未然防止のために、定期的な抽出・確認の場を設定する。
- 校内組織を機能化させるために、教職員間の交流機会を設定する。

Q3 教師のマインドチェンジをどのように行うべきか

2 川崎中学校の進めるマインドチェンジについて

(1) 本校の抱える課題

本校では、発達支持的生徒指導を推進する上で、教職員の意識や価値観の変容、いわゆるマインドチェンジが重要な鍵になると考えている。しかし、これまでに以下のような課題があった。

- 教師の授業力や授業観にばらつきがある。
- 同僚性が十分に高まっていない。
- 教育観の統一ができておらず、マインドチェンジへの主体性が低い。

これらの課題を解決するために、以下の取組を柱として進めている。

(2) 本校のマインドチェンジ

① 川崎中授業スタンダードに沿った授業アンケートの実施

授業に対する教職員と生徒の認識のズレを可視化するため、授業アンケートを実施している。今年度からは、質問項目を「川崎中学校授業スタンダード」に沿った内容へと見直し、授業の質的改善に直結するフィードバックが得られるよう工夫した。さらに、教職員自身も同様のアンケート（資料19）を実施することで、自らの授業の内省を促している。



資料 19 1学期授業アンケート

② 教職員同士の学び合い・研修の実施

授業づくりや生徒理解について教職員同士が学び合う文化を醸成するため、教科横断的な研修や対話の場を設けている。互いの授業実践を共有することで、個々の実践を孤立させず、協働的な授業改善を目指している。特に、若手とベテランのペアワーク（資料20）や小グループでの意見交換の場（資料21）を重視し、経験の共有と支え合いの雰囲気づくりを行っている。



資料 20・21 各自の指導案を交流する教師の姿

③ 「教師の振り返りポイント」に基づく自己評価

生徒が安全・安心に学べる学校づくりを推進するため、川崎アクション 3.0 に基づく「教師の振り返りポイント」（詳細はP80）を活用している。このアンケート結果（資料22）を基に教職員一人ひとりが日常の教育活動を学期ごとに自己評価し、改善点を明確化している。結果は校内研修で共有し、共通課題の把握や改善策の検討につなげることで、全教職員のマインドチェンジを図っている。

【川崎中学校】教師の振り返りポイント		R6.12月		R7.6月
学校生活全般	1 連絡帳 生活ノート作品等に、自己存在感や共感的人間関係につながるコメントを必ず入れていますか。	2.71	↗	3.00
	2 校内や教室を巡回して、落書きや器物損壊がないか確認していますか。	3.00	↗	3.62
	3 児童生徒が遊び仲間を作って遊びに行く様子を観察していますか。	3.22	↘	3.17
	4 教室にいる児童生徒と話したり、気になる児童生徒への声かけをしたりしていますか。	3.42	↗	3.59
	5 「これは遊びです。」という児童生徒の言葉を鵜呑みにしていませんか。	3.43	↘	3.21
	6 児童生徒に任せている場合でも、分担や分配等の方法を把握し、適切な指導・助言をしていますか。	3.29	↗	3.41
	7 常日ごろから、児童生徒と一緒に清掃する機会を持っていますか。	3.42	↗	3.62
	8 清掃中、児童生徒に「頑張っているね」「ありがとう」等の声かけをしていますか。	3.29	↗	3.59
朝	9 教師の側から「おはよう」の声かけをし、児童生徒の心理状態を把握していますか。	3.54	↗	3.69
	10 健康観察で、一人一人を視診するとともに、気になる子への声かけをしていますか。	3.29	↗	3.31
授業中	11 児童生徒の多様な考えが発揮できる場、自己決定できる場を意図的に設けていますか。	3.08	↗	3.11
	12 学習の遅れがちな児童生徒も、学習中に活躍できる場を保障していますか。	2.96	↗	3.04
	13 誤答を大切に学習にしていますか。	3.29	↗	3.32
帰り	14 良かったこと、うれしかったことなどを称賛し合う場を確保していますか。	2.67	↗	2.81
	15 帰りのあいさつをする時、児童生徒の表情を素早く観察し、普段の表情と変化がないか確認していますか。	3.17	↗	3.52
平均ポイント		3.19	↗	3.33

資料 22 教師の振り返りポイントアンケート結果

A 生徒指導提要の趣旨を踏まえた「マインドチェンジ」の在り方

- 授業アンケートで認識のズレを可視化し、自らの授業の内省を促す。
- 教職員同士の学び合いで協働文化を醸成し、主体性を高める。
- 自己評価と共通課題の共有で教育観の統一と意識改革を進める。

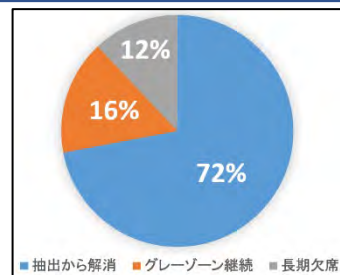
教師への質問内容		生徒への質問内容		質問		平均値
O	課題意識	①		授業導入時に、既習事項や生徒の振り返りから、生徒に「問い」を持たせるような場面を設定した。		2.69
				授業のはじめの方で、今まで習ったことを振り返ったり、「やってみたい（面白そうだ）」「なぜだろう（どうしてだろう）」と感じたりする場面があった。		3.31
				生徒の言葉で「何を、どのように、どうするか」を記しためあてを設定し、黒板に示した。		2.50
	めあて	②		「何を、どのように、どうするか」のような、見通しを持ったための「めあて」を先生と一緒に考えた。		3.23
				個人の考えをつくる際に、学習形態（個人で、少人数で、教師と）を自己選択させた。		2.73
				自分の考えをつくるときに、「一人で」「複数人で」「先生と」を選択する場面があった。		3.34
S	学習方法・内容	④		個人の考えをつくる際に、学習方法や学習内容を自己選択させた。		2.31
				自分の考えをつくるときに、学習する順番や使う道具（考え方）を選択する場面があった。		3.25
				授業中にタブレットを活用して、生徒の考えを共有する場面を設定した。		2.46
	ICT	⑤		授業中にタブレットを活用して、考えをみんなで共有する場面があった。		3.14
				交流のスキルを使って交流する場面を設定した。		2.50
				交流のスキルを使って交流する場面があった。		3.27
R	まとめ	⑦		授業終末時に、まとめを生徒の言葉で書く（共有する）場面を設定した。		2.73
				授業の終わりに「何を学んだのか」をはっきりさせるために、自分の言葉で「まとめ」を書いたり、伝えたりする場面があった。		3.20
				学習の振り返り（わかったこと、わからなかったこと、疑問点）を生徒の言葉で書く場面を設定した。		3.27
	振り返り	⑧		学習を振り返る場面で、①わかったこと（できたこと）、②わからなかったこと（できなかったこと、はきりしなかったこと）、③疑問に思ったことなどを自分の言葉で書く場面があった。		3.22
				授業終末時に、次（今後）の授業の見通しを確認する場面を設定した。		3.19
				学習を振り返る場面で、次（今後）の授業の見通しを確認する場面があった。		3.32

資料 23 1 学期授業アンケート結果

研究の実際Ⅰ 「実態把握と支援づくり」に関して

成果① R7年度の新学期当初グレーゾーンに抽出されていた生徒の欠席数推移

グレーゾーン会議で本校が定めた新たな長期欠席となる可能性の高い前年度の欠席数が20日以上40日以下の生徒の欠席状況を、1学期末段階で検証したところ、対象生徒25名のうち、18名(72%)が「解消」となり、1学期末の抽出対象から外れた。また、欠席数も大幅に減少した(資料24)。特に 中3生では全員が改善し、安定した登校状況を示している。下は実際の生徒の声である。



資料24「グレーゾーン生徒の出席状況」

【中1生徒A [R7 1学期の欠席数がR6の欠席数から30→0に改善]】

「学校にくるのが毎日楽しい。特に部活のときにみんなと一緒に同じ目標に向かって頑張っているときが楽しい。自分で誰と学ぶかを決められる授業も好き。」

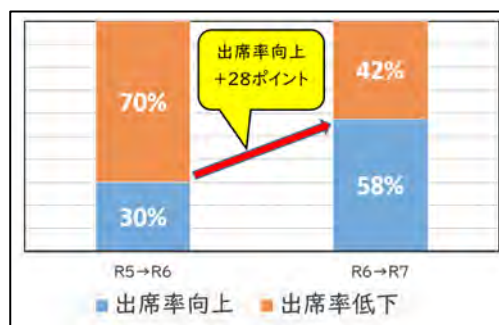
【中3生徒B [R7 1学期の欠席数がR6の欠席数から28→1に改善]】

「4月は受験を意識して頑張ってきていたけど、それに加えて体育会の練習が始まってから、みんなで協力することが楽しくなった。今では、クラスに新しく話せる人も増えてこのクラスになれて良かったと思う。」

このように川崎中 OSR を軸とした授業やその他の教育活動、川崎アクション 3.0 を軸にした取り組みにより、生徒の居場所づくり・絆づくりへとつながった結果、欠席数が大きく減少したと考えられる。これは、本研究の「新たな長期欠席をうまない」という中心的価値を見出すことができた点において大きな成果である。

成果② 前年度に長期欠席だった生徒の次年度の出席数の改善

R5年度からR6年度への1年間では、R5年度に長期欠席だった生徒のうち出席率が向上したのは30%にとどまり、70%の生徒が出席率を下げていた。しかし、R6年度からR7年度1学期にかけての推移では、出席率が向上した生徒は58%となり、28ポイントの大幅な改善が見られた(資料25)。これは、学校全体で行ってきた生徒支援共有シートやグレーゾーン生徒への対応シートを活用した



資料25「前年度からの出席率の推移」

早期支援や、授業・行事等を通じた居場所づくりの取組が、安定した登校へとつながった成果であると考えられる。以下は、実際に出席率が大幅に向上した生徒の声である。

【中3生徒C [R6からR7 1学期の出席率が33.9%→88.0%に改善]】

「漢字コンクールの取組を頑張るために毎日頑張った。クラスのみんなで平均90点を取るために、自分の中でも目標を決めて頑張って93点取れたのが嬉しかったし、周りにも勉強のことで初めて褒められたのが嬉しかった。」

【中3生徒D [R6からR7 1学期の出席率が8.2%→72.0%に改善]】

「出席が増えたのは、体育会の練習からクラスの友達と話せるようになったから。今では普通に話せる人も増えたし、勉強も友達に聞けるからわかるようになってきた。」

課題① 長期欠席生徒や要支援生徒への支援の継続的課題

一方で、出席率の改善が見られなかった生徒や、新たに欠席数が増加した生徒も存在しており、すべての長期欠席・長期欠席兆候生徒に効果が及んでいるわけではない。また、FF調査の結果においても課題を示す生徒が依然として多い。今後も継続的に、支援の方法を検証・改善していく必要がある。

研究の実際Ⅱ 「組織体制づくり」に関して

成果③ 教師のマインドチェンジをきっかけとした、組織体制づくりと機能化

川崎町全体で進めてきた川崎アクション3.0を基に、本校では授業支援や生徒支援でマインドチェンジを図ってきた。その見取りとした「教師の振り返りポイント」アンケートの結果では、R6年12月からR7年の6月にかけて15の項目中13の項目で評価が上昇した。この結果から、安全・安心な居場所づくりや絆づくりのための発達支持的なマインドが教師に定着していると考えられる（資料26）。

	【川崎中学校】教師の振り返りポイント	R6.12月		R7.6月
学校生活全般	1 連絡帳 生活ノート作品等に、自己存在感や共感の人間関係につながるコメントを必ず入力していますか。	2.71	↗	3.00
	2 校内や教室を巡回して、落書きや器物損壊がないか確認していますか。	3.00	↗	3.62
	3 児童生徒が遊び仲間を作って遊びに行く様子を観察していますか。	3.22	↘	3.17
	4 教室にいる児童生徒と話したり、気になる児童生徒への声かけをしたりしていますか。	3.42	↗	3.59
	5 「これは遊びです。」という児童生徒の言葉を鵜呑みにしていませんか。	3.43	↘	3.21
	6 児童生徒に任せている場合でも、分担や分配等の方法を把握し、適切な指導・助言をしていますか。	3.29	↗	3.41
	7 常日ごろから、児童生徒と一緒に清掃する機会を持っていますか。	3.42	↗	3.62
	8 清掃中、児童生徒に「頑張っているね」「ありがとう」等の声かけをしていますか。	3.29	↗	3.59
朝	9 教師の側から「おはよう」の声かけをし、児童生徒の心理状態を把握していますか。	3.54	↗	3.69
	10 健康観察で、一人一人を視診するとともに、気になる子への声かけをしていますか。	3.29	↗	3.31
授業中	11 児童生徒の多様な考えが発揮できる場、自己決定できる場を意図的に設けていますか。	3.08	↗	3.11
	12 学習の遅れがちな児童生徒も、学習中に活躍できる場を保障していますか。	2.96	↗	3.04
	13 誤答を大切に学習にしていますか。	3.29	↗	3.32
帰り	14 良かったこと、うれしかったことなどを称賛し合う場を確保していますか。	2.67	↗	2.81
	15 帰りのあいさつをする時、児童生徒の表情を素早く観察し、普段の表情と変化がないか確認していますか。	3.17	↗	3.52
	平均ポイント	3.19		3.33

資料26 「教師の振り返りポイントアンケート結果」

課題② 授業改善に対する教師自身の自己評価の低さ

研究構想（P11）で述べたように、川崎中 OSR を軸とした「支える」授業の推進により、生徒自身が自己決定する機会が増え、授業アンケートの結果でも肯定的に受け止めている。その反面、教師のアンケート結果からは生徒に比べ全体的に数値が低くなっている。これは、教師自身が授業改善の成果を十分に実感できていないことや、指導に対する自己評価が厳しい傾向を示していると考えられる。

このことは、授業改善の方向性が生徒にとって有効である一方で、教師側においては「成果を可視化し共有する仕組み」や「相互に学び合う校内研修の充実」が必要であることを示している。今後は、生徒アンケートとの比較を通して教師が自らの授業改善を肯定的にとらえられるような仕組みづくりが求められる。

研究の実際Ⅲ 発達支持的生徒指導の取組づくり

新たな**長期欠席**をうまない

発達支持的生徒指導のための**各学校の取組**

- 1 川崎中学校 【授業・集団づくり，生徒支援の実践】
- 2 川崎東小学校 【重点単元シートを活用した教育活動】
- 3 真崎小学校 【鍛ほめを活かした教育活動】
- 4 川崎小学校 【川小型自己選択学習，周辺活動】
- 5 池尻小学校 【体験活動を柱とした教育活動】

川崎中学校

○ 本校の生徒指導上の課題

本校は、川崎町内の3中学校の統廃合により令和2年度に新設された学校である。統合して数年は学習規律をはじめとする様々な生徒指導上の課題を抱えており、生徒指導提要に記載されている困難課題対応的生徒指導や課題予防的生徒指導が日常的に行われていた。そのため教育活動において生徒が主体となり教育活動を進めるのではなく、教師が先頭に立って生徒を導く教育活動が進められていた。また、コロナ禍ということもあり、生徒同士の密な接触を避けるために、教育活動において様々な制限を強いられ、静かな環境の中で単純に知識を教える授業を受けさせる教師主体の授業が展開されていた。そのため生徒指導提要に記載されている発達支持的生徒指導の視点に立った教育活動を組織的・計画的に推進していくことが本校には求められた。

○ 本校における発達支持的生徒指導の捉え

従来の生徒指導では、「生徒の問題行動をなくす」ことに注力していたが、発達支持的生徒指導では、「生徒の可能性を伸ばす」に焦点が当てられている。生徒が安心して自己を表現できる環境をつくり、学級や学校全体をより良い学びの場にする視点で教育活動を推進することが求められる。そのため、本校では川崎中OSR（前述P11）の視点をもって教師が生徒を支援する教育活動の推進を行い、生徒が自立した社会の担い手として成長できるように組織的・計画的に支援する必要があると考えた。

○ 取組の実際

(1) 授業づくりについて

① 川崎中学校授業スタンダードについて

教師主体ではなく、生徒が主語になる授業づくりを組織的に推進するために、川崎中 OSR の視点を取り入れた川崎中学校授業スタンダードの作成を行った。

川崎中 OSR に基づく授業づくりの視点

ア 生徒が、見通しをもつことができるようにする (Outlook)

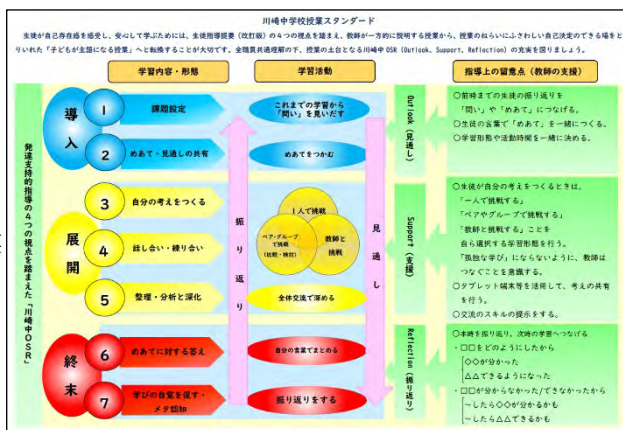
イ 生徒が、めあてを達成するために支援を求めることができるようにする (Support)

ウ 生徒が、学習を振り返ることができるようにする (Reflection)

川崎中学校授業スタンダード(資料27)

を基にした 授業づくりでは、生徒が単元や1時間の授業の見通しをもって、めあてを達成するために、どのように学ぶかを選択し、その過程で課題を解決し、次につなげるために自らの学習を振り返る流れを意識した授業づくりを教師が行うことで、生徒が主語になる授業を展開することを狙っている。実践を通して、生徒が自ら学習方法や内容を選び、めあてを達成する姿を見ることができた。

C・D層の生徒も困ったらすぐに教師に聞きに行く姿を見ることができた。



資料 27 川崎中学校授業スタンダード

② 授業の実践（実践例：2年 社会科）

Outlook（見通し）	Support（支援）	Reflection（振り返り）
①九州地方で何を調べ、何を学ぶのか明確にするために、学習計画を立てる。 ②本時のめあてを生徒が設定するために、学習計画から前時の学習内容を振り返る時間を設定する。 ③本時で何を学習するのか、生徒自らめあてを設定する。 ④学習の見通しを持たせるために、本時の学習でどのような内容を、どのような方法で調べるのか確認する。	①課題解決に向けて主体的に学習に取り組むために、生徒1人で学習に挑戦するのか、ペアやグループで取り組むのか、教師と一緒に取り組むのか学習の形態を選択する。 ②学習中は、教科書や地図帳以外にも、いつでも資料を活用できるように映像資料等をICTで準備する。 ③学習した内容を級友と交流し、自分の考えに付加修正をかける場面を設定する。その際、交流の視点や交流のスキルを提示する。 ④学習のまとめでは、文章フォーマット例を示し、80字以内2文で接続詞を使い、まとめを記述する。	①学習の振り返りでは、学習のまとめと学習の学び方を振り返る場面を設定する。 ②次の学習で何を調べ、何を学ぶのか確認する。

単元の指導計画

次	時間	学習活動	評価の観点	評価規準
一	1	・ウェビングマップを活用し、九州のイメージを連想させ、九州地方の学習に対する関心を高める。 ・九州地方の単元を貫く問いを立て、これからの学習計画を作成する。	主	九州地方の学習を行うための学習計画を主体的に作成している。
		単元の問い：九州の人々の暮らしを豊かにしているものとは何でしょうか？		
	3	・学習計画に沿って、九州地方の自然環境や産業などについて調べ学習をする。（本時2/3）	知技	生徒が設定しためあてに基づき、九州地方の人々の暮らしを豊かにしているものについて人間の営みと関連付けて調べまとめている。
	1	・調べてまとめた学習内容を交流し、考察する。	思判表	これまでの学習プリントを活用し、学習内容に対して付加修正をかけ、考えや理解を深めている。
		交流の視点：「なぜ九州の人々の暮らしが豊かになるのかを説明しあう」		
	1	・大雨や地震など、九州の自然環境の備えについて級友と交流をしながら考える。	思判表	九州で起こりうる自然災害について考え、災害に対し、どのような対策や対応ができるのか考察し、表現している。
	1	・九州地方の単元を貫く問いに対して、これまで学習した内容を基に問いの答えを自分の言葉で説明する。	思判表	これまで取り組んだ九州地方の学習内容から、単元の問いである九州地方の人々の暮らしを豊かにしているものについて、人間の営みと関連付けて表現している。

単元の問い（課題）

九州の人々の暮らしを豊かにしているものとは何でしょうか？

○授業の内容を振り返ろう

1 めあて
 ①九州地方の自然環境や産業について調べ学習をする。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

2 学習の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

3 学習の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

4 学習の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

5 学習の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

6 学習の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

7 学習の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

8 学習の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

9 学習の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

10 学習の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分のめあて
 ①九州地方の自然環境や産業について調べ学習をする。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

自分の振り返り
 ①調べた内容を交流し、考察する。
 ②調べた内容を交流し、考察する。

資料 28 振り返りシート（実践例：2年社会科）

(2) 集団づくりについて

本校では、生徒が社会的自立に向かうために必要な非認知能力を育成する上で、集団づくりの活動を、年間通して計画的に位置付けている。以下にその計画を示す。

活動	実施期間
・朝学活 ・数学に特化した取組 ・学校行事（体育会、合唱コンクール）	・原則2週間でワンサイクル（年間16回） ・毎月ワンサイクル（年間10回） ・約3週間（年間2回）

そして、上記の活動に川崎中 OSR の視点を取り入れ、各分掌の係長を中心として取組づくりを行った。以下に、川崎中 OSR に基づく集団づくりの視点を示す。

川崎中 OSR に基づく集団づくりの視点

ア 生徒が、目的や課題、活動の見通しをもつことができるようにする（Outlook）

イ 生徒が、目的や課題を達成するために支援を求めることができるようにする（Support）

ウ 生徒が、活動の過程や結果を振り返ることができるようにする（Reflection）

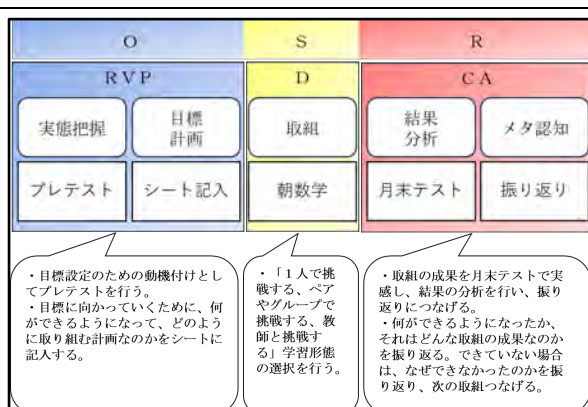
さらに、ここでは非認知能力を「自分に向き合う力」、「他者とつながる力」、「自分を高める力」とし、それらをそれぞれ3つに細分化し整理した。

自分に向き合う力	目標達成力 困難な状況でも、目標を達成するために計画を立て、努力を続ける力
	自己制御力 自分の感情や行動をコントロールし、目標達成のために衝動を抑える力
	成長志向 失敗を恐れず、努力すれば成長できると信じ、前向きに挑戦する力
他者とつながる力	共感力 相手の感情や立場を想像し、理解しようとする力
	協働力 共通の目標に向かって、自分の役割を果たしながら仲間と協力する力
	コミュニケーション力 自分の考えを適切に伝え、相手の意見を正確に受け取る力
自分を高める力	探究心 「なぜだろう？」という疑問から、自ら深く調べ、新しい発見をしようとする力
	粘り強さ 困難に直面しても、諦めずに最後までやり抜く力
	創造力 これまでにないアイデアを生み出したり、未来の出来事を予測したりする力

これらの中から生徒の実態を踏まえて、特に表の太線の3つの非認知能力（目標達成力、コミュニケーション力、粘り強さ）を育成することに重点を置いて実践した。

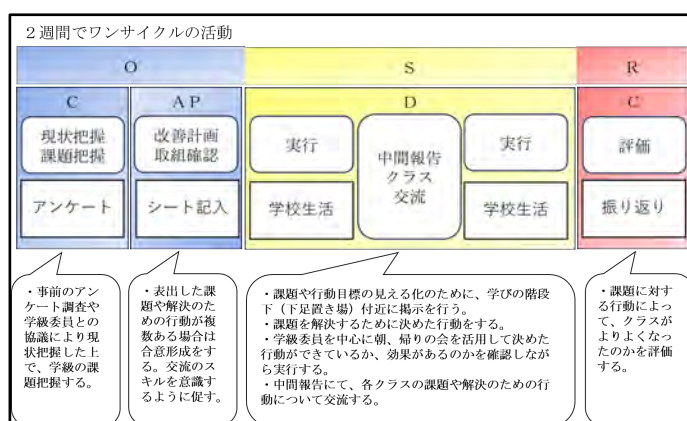
① 朝数学について

RV-PDCA サイクル(資料29)のRVPとCAの過程については、補充学習(50分)を活用して実施した。Dの朝数学では、入試問題大問1を解くことができる基礎学力を高めることと、前述した3つの非認知能力の育成を図ることを目的として実践した。学習支援ソフトによるプレテストの点数、目標、計画、結果、振り返りを教師全員で共有し、見通しをもって活動に取り組むことができるようにした。実践では、生徒が学習形態を選択しながら、自己の課題を解決するために、友だちや教師に関わる姿を見ることができた。また、C・D層の生徒も学習を重ねる中で、今までできなかったことができるようになり、実践当初よりも意欲的に行動する姿が見られた。



② 朝学活について

朝の10分間で、生徒が学級や学校での生活をよりよくするために、課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成する。決まったことについて役割を分担し、協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意志決定して、実践したりする。これらの活動(資料30)を通して、生徒が自主的、実践的



資料 30 朝学活のサイクル

に取り組む力を身につけることを目的としている。朝数学と同様に重点化した3つの非認知能力の育成を図ることを意識して実践した。はじめは、課題を解決する行動を決めることで終わっていたが、実践を重ねることで行動に対するチェック機能の必要性を実感し、学級委員を中心として、課題解決に向かう姿を見ることができた。

③ 学校行事

川崎中学校の2大行事は縦割りで行う体育会と合唱コンクールである。川崎中 OSR に基づき各行事の担当長と特活主任を中心としてリーフレット(資料31)を作成した。このリーフレットにより教師の具体的な支援方法や身につけさせたい非認知能力が見える化することで、全職員で支援の方向性を揃えることをねらいとした。リーフレットに基づく実践を通して、生徒が立案した取組を教師が支援し、PDCA サイクルを回す姿を見ることができた。



資料 31 学校行事における川崎中 OSR を位置付けたリーフレット

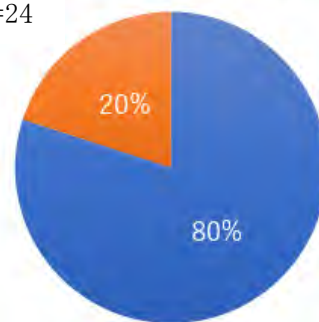
研究の実際Ⅲ 「発達支持的生徒指導の取組づくり」に関して

成果① 授業づくりについて

川崎中学校授業スタンダードによって、生徒が主語になる授業づくりが進んだと実感している教師が増えたことが教師アンケートより分かった（資料32）。このことから生徒が主語になる授業づくりを進める上で、授業をスタンダード化し、授業改善の方向性を示したことは効果的だったと考えられる。また、川崎中学校授業スタンダードに基づく生徒授業アンケートでは、肯定的回答をしている生徒の割合が高く、生徒が教師の授業改善の価値を感じているという点で大きな成果である。以下は実際の教師と生徒の声である。

生徒が主語になる授業づくりは進んだか？

N=24



■ 肯定的回答 ■ 否定的回答

資料 32 教師アンケート

【教師A】

川崎中学校授業スタンダードに基づいた授業づくりを行い、はじめに単元を貫く問いの設定を生徒と一緒に行うことで、生徒が単元の見通しをもって授業に臨むことができたと感じた。また、今までは指示待ちだった生徒が、自ら考えた学び方や順番を選択する姿を見ることができ、生徒が主語になる授業づくりを進めることの効果を実感した。

【教師B】

本校はC・D層が多く、学習形態を選択することを提示しても、学習に取り組むことが難しいのではないかと思っていた。しかし、教師側が適切な支援を準備しておくことで、個人やペア、班などで課題の解決に向けて取り組む姿を見ることができた。さらに授業改善を進め、生徒が主語になる授業の在り方を究明したい。

【生徒A】

1年生の1学期の頃は、先生の話聞いて、資料をもとに調べて考える授業だった。途中から、学習全体（単元）の流れを示してくれるようになり、学習の流れが分かるようになった。単元の目標を確認し、どのようなことが分かれば良いのかまとめの具体例を示してくれるので、何を身につけることが大切なのか考えながら授業に参加するようになった。

【生徒B】

何を学習したか確認できる振り返りプリントを使って、学習の見直しができるようになったのはよいと思った。自分たちで、単元の目標や授業のめあてを達成するために協力して調べたり、考えたりすることは、とても楽しい。また、自分たちで学習の形態を選べることも、自分たちで学習できるからやる気がでる。

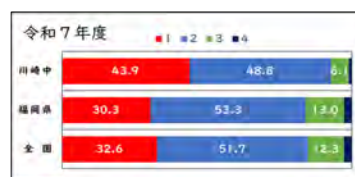
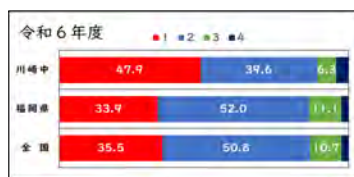
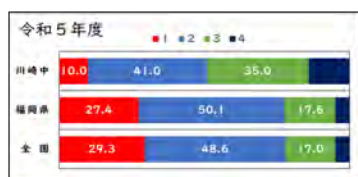
成果② 集団づくりについて

集団づくりの目的や川崎中 OSR の位置付けを明確にすることで、教師が各取組の見通しをもって実践することができた。さらに、各実践が生徒への支援につながることで全国学力学習状況調査生徒質問紙(資料33)の結果から明らかになった。

授業や学校生活では、友だちや周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか



あなたの学級では、学校生活をよりするために学級活動で話し合い、互いのよさを生かして解決方法を決めていますか



学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか



資料 33 全国学力学習状況調査生徒質問紙

令和5年度時点は、上記の集団づくりに取り組む前である。同一集団ではないが、年度を重ねるにつれ肯定的回答の割合が増加傾向にある。これは教師が実践を確実に積み重ねていることで、生徒主体の活動が推進され、非認知的能力が向上していることが要因であると考えられる。以下は実際の教師と生徒の声である。

【教師A】

4月に各取組を進める方法を1回やってみせ、それ以降は生徒がほとんどの計画を立てて取組を進めている。生徒が主体になれるように、適切な場面での支援のみしかしなくなった。

【教師B】

体育会のブロック練習を全て生徒に任せてみた。はじめはぎこちなかったが、授業を重ねるごとに、PDCAサイクルを生徒たちで回す姿を見ることができた。生徒が主体で活動しているところに教師がいて、見守ることも支援だと感じた。

【生徒A】

数学は本当にわからない問題ばかりだけど、班の人が分かるまで丁寧に教えてくれるから少しずつ分かるようになった。数学の力は上がっていると思う。分からなくても嫌な顔とかされないから安心する。

【生徒B】

4月当初は意見が出なかったり、気まずかったりしたけど、今ではコミュニケーションがとれるようになったから意見も出て、話しやすくなった。これまでは、話し合い活動とか苦手だったけど、中学校で自分が変わることができた。

課題① 授業づくりについて

研究の実際Ⅱ（P23）で述べたように、川崎中 OSR を軸にした川崎中学校授業スタンダードによる授業づくりの推進については、生徒の授業アンケートや聞き取り調査結果でも肯定的に受け止めている割合が多いことが分かる。しかしながら、教師の授業アンケート結果（資料34）では、生徒に比べると全体的に数値が低くなっており、教師集団の授業改善に対する2極化が見られる。これは教師が川崎中学校授業スタンダードによる授業づくりを行う上で、必要な知識やスキルが身につけていないことや、生徒が主語になる授業づくりに対しての有効性を感じていないことが考えられる。

このことから、授業改善を推進することで有効性を感じている教師や生徒もいる一方で、教師にとって、授業改善の必要性や有効性を感じることができる「相互に学び合う校内研修の充実」や「生徒のリアルな声を共有する仕組み」が必要であると考え。今後は、研究推進委員会と学力向上委員会で連携を図り、教師が自ら授業改善を推進していく仕組みづくりを構築していかなければならない。

質問項目	4	3	2	1	平均
① 授業導入時に、既習事項や生徒の振り返りから、生徒に「問い」を持たせるような場面を設定した。	4	13	8	2	2.7
② 生徒の言葉で「何を、どのように、どうするか」を記したためあてを設定し、黒板に示した。	5	11	4	7	2.5
③ 個人の考えをつくる際に、学習形態（個人で、少人数で、教師と）を自己選択させた。	9	5	8	5	2.7
④ 個人の考えをつくる際に、学習方法や学習内容を自己選択させた。	4	6	11	6	2.3
⑤ 授業中にタブレットを活用して、生徒の考えを共有する場面を設定した。	5	7	9	6	2.4
⑥ 交流のスキルを使って交流する場面を設定した。	3	10	10	4	2.4
⑦ 授業終末時に、まとめを生徒の言葉で書く（共有する）場面を設定した。	7	8	9	3	2.7
⑧ 学習の振り返り（わかったこと、わからなかったこと、疑問点）を生徒の言葉で書く場面を設定した。	15	5	6	1	3.3
⑨ 授業終末時に、次（今後）の授業の見通しを確認する場面を設定した。	11	10	5	1	3.1

資料 34 教師授業アンケート N=27

課題② 集団づくりについて

川崎中 OSR の視点をもって教師が集団づくりの実践を行うことは、生徒にとって効果的であることが全国学力学習状況調査や生徒インビュー調査の結果から分かった。その一方で、教師側にとって、取組の型を示すだけでは、全ての教師が同様の実践をすることができなかったことや、生徒が集団づくりの活動の中で、人間関係をつくることに課題を抱えている姿が見受けられた。これは、教師自身のマインドチェンジがまだまだ進んでいないことや、具体的な支援として手立てを見いだせていないこと、そして生徒はコロナ禍で小学校時に発達段階に応じた集団づくりの活動を十分にできていないことが要因だと考えられる。

このことから、集団づくりの活動は生徒にとって、有効である一方で、教師側においては「マインドチェンジの推進」や「集団づくりの好事例の共有」、そして生徒側には「構成的グループエンカウンター」や「ソーシャルスキルトレーニング」の取組が必要であると考え。今後は、上記について、研究推進委員会と学力向上委員会で連携を図り、生徒の人間関係づくりの取組と集団づくりの取組を両輪として教育活動を進めていかなければならない。

MEMO

川崎東小学校

○ 本校の生徒指導上の課題

(1) 授業づくりにおける課題

本校では、以前、生徒指導上の課題が多く、教職員は、問題行動への事後対応となる消極的な生徒指導に追われた。そのため学習においても、「じっと座って静かに授業を受けること」に価値を置く授業観（教師主体・教え込み中心）が根付き、現在もなおその価値観が授業づくりに影響を与えていた。

その結果、学力 AB 層においては、基礎基本の力はある程度定着するが、習得した知識技能を活用する力に課題がみられた。また、CD 層においては、授業が「おもしろくない」と感じて学習に集中できず、学校への登校意欲が低下する様子が見られた。

(2) 学校組織における課題

生徒指導をはじめとする様々な教育活動が、個々の教職員に任せがちであり、組織的・協働的に取組を推進していく体制が十分に構築されていなかった。

また、学校の取組を検証・改善していく評価サイクルが十分に機能しておらず、一人一人が一生懸命取り組んではいるが、教育活動の質的向上や実効性へとつながりにくく、負担感だけが増す状況にあった。

○ 本校における発達支持的生徒指導の捉え

生徒指導提要において、「発達支持的生徒指導」とは、「児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくこと」が尊重され、その発達の過程を「チーム学校としていかに支えていくか」という視点に立って行われるものである。また、教科の学びを社会で充実して生きることにつながる「学習指導における児童生徒の成長・発達を支援する」生徒指導が求められている。これを踏まえ『発達支持的生徒指導』を以下のように推進する。

(1) 学習指導と生徒指導の一体化

児童の学校生活の約 6 割を「授業」が占めている。「発達支持的生徒指導」は、生徒指導の基盤であり、授業の中にもその視点を意識して組み込んでいく必要がある。

本校では、「わかる授業」が児童の安心感と学びへの意欲につながるものであるという共通理解のもと、児童の自発性や主体性を大切にしながら、全職員が連携・協働して児童の「自立的な学び」を「支える」という基本姿勢で授業づくりを行うことにした（資料35）。

	令和 5 年度	令和 6 年度	令和 7 年度
授業づくり目標	「わかる・できる」 喜びを味わわせる	自ら学ぶ児童の育成	
目標達成の手立て	・問いづくり ・書く活動	・問いづくり ・自己選択	・東小マイプラン学習 ・3 部会との一体的推進

資料35 授業づくり（主題研究）のテーマと着眼（R5～R7）

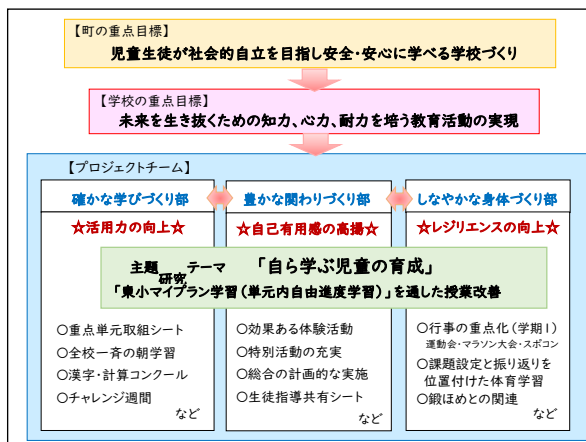
(2) 「チーム学校」として機能するための組織体制づくり

(3) 校内推進委員会の機能化について

○ 町生徒指導担当者会を受けて、校内生徒指導委員会を開催（毎月第 2 月曜日）し、生活アンケートの結果や生徒指導情報共有シートをもとに、気になる児童の支援の在り方について交流したり、評価・改善を行ったりした。

○ 町学力向上担当者会を受けて、校内学力向上推進委員会を開催（毎月第 4 月曜日）し、FF 調査の結果や重点単元取組シートをもとに、学校全体の取組や個別の学習支援について交流したり、評価・改善を行ったりした。

○ 授業づくりの目標達成に向けて、校内研究と上記３部会を一体的に推進することで、教職員の共有化と協働化を促進し、児童が自立的に学べるように、教育活動の質的向上を図った(資料36)。



そこで、資料37に示す「重点単元取組シート」の活用を通して、各学年で評価サイクルが効果的に循環できるようにした。また、重点単元においては、学校全体で組織的・計画的に習熟度別少人数（分割）学習を実施し、実態に応じて学習方法や内容等を工夫し、個に応じた指導・支援を行った。

[illegible]

(R) 前年度末の学力テストの結果から各学年の課題領域・内容等を分析する。

(P) 今年度末の学力テストの目標標準化得点を成果指標として設定する。

(D) (P) 各学年で、重点単元を設定する。(単元名・単元テスト目標点・手立て)

(D) 目標達成に向けて実践する。(授業スタンダード・自己選択・少人数学習等)

(C) 単元テストの結果をもとに授業評価(形成的評価)を行う。

(A) 改善策を策定し、次の重点単元の計画を立てる。

× 2

(C) 今年度末学力テストの結果をもとに授業評価(総括的評価)を行う。

(A) 今年度授業改善の取組の有効性を検証し、次年度に向けた改善策を立てる。

学習後は、単元テストやFF調査の結果、遅刻・欠席日数等から総合的に判断し、個別の支援に

[illegible]

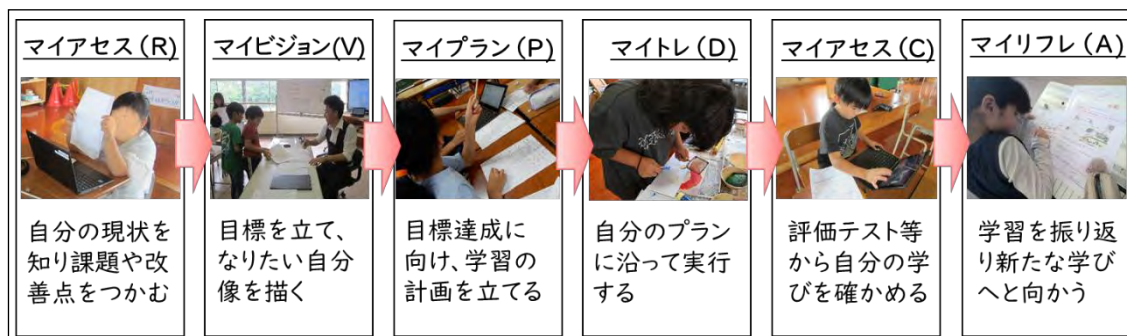
(2) 「東小マイプラン学習（単元内自由進度学習）」による授業改善

① 「東小マイプラン学習（単元内自由進度学習）」とは

児童が主体となり「自立的に学ぶ」授業づくりへの転換を図るために、「東小マイプラン学習（単元内自由進度学習）」に取り組むことにした。

これは、児童の興味・関心、学習進度や理解度等に応じて、学習内容や方法の工夫・選択を可能にし、児童が自分に合った方法で学びを深める自己調整学習のことである。

「東小マイプラン学習」の進め方は資料39のとおりである。



資料39 「東小マイプラン学習」の一単元におけるスタンダード

② 「東小マイプラン学習」の実際

本校では、校務分掌の3つの部会との関連を図ることによって、東小マイプラン学習（主題研究）を組織的・効果的に推進できるようにした。

- ・各部で研究教科を定める。(学び：算数等 関わり：学活・生活 身体：保健・体育)
- ・部長は全体公開授業研を担い、他教員は部会公開授業研で授業を磨く。
- ・各部に、部長(若年)、副部長(中堅)、スペシャルアドバイザー(ベテラン)を配置し、OJL（オンザジョブラーニング）を通して、自律的に相互に学習をしている。以下に、2つの実践例における教師の支援を示す（資料40）。

実践例 ①	自立的な学びを促す教師の支援
3年算数「長さ」 	○単元を貫く問いを設定する。 ○学習前に「めあてをたてる」、学習後に「ふりかえる」時間を設定する。(教師が確認・把握) ○単元の学習内容を提示し、児童に「学ぶ順序」「学ぶ方法」「学ぶ形態」等を自己選択させる。 ○量感を育てるために、様々な測定機器や実測するコーナーを準備する。(学びたくなる環境の充実) ○児童が回答や説明動画等を共有できるようにする。
実践例 ②	自立的な学びを促す教師の支援
4年保健「体の成長と私」 	○養護教諭(睡眠)、栄養教諭(食事)、体育主任(運動)と専門性の高い教師でチームを組み授業づくりを行う。 ○ICTを活用したマイプランシート(P82資料41)で学びの地図が描けるようにする。(進捗状況に応じた付加修正が容易) ○必修課題だけでなく、発展課題を準備し、自己の関心や実態等に応じ選択して取り組めるようにする。 ○個々の課題解決に向けて、目的を明確にした環境(学習シート・コーナー等)を準備する。

資料40 「東小マイプラン学習」の実践例

「東小マイプラン学習」を通して、自分の理解度やペースに応じて学習を進める姿や新たな課題を見つけて進んで課題解決に取り組む姿などが見られるようになった。

また、学習計画は個々で異なっても学習内容（必須）は同じであるため、友達と協力して作業をしたり、友達の説明動画を参考にして考えを深めたりするなど、協働的に学ぶ姿も多く見られた。

懸念していた学習内容の理解についても、単元テストの結果を見ると通常の一斉授業より高いことがわかった。学習後のアンケートにおいても、児童全員が「またマイプラン学習をやりたい」と回答し、学習を楽しんでいることが分かった。

○ 成果と課題

(1) 重点単元の取組から

	令和6年2学期	令和6年3学期	令和7年1学期
目標点達成率	50%	67%	83%
目標点通過率	17%	33%	67%

重点単元を設定し、授業改善の評価サイクルを機能させることによって、単元テストの目標点達成率や通過率は上昇した。また、担任任せではなく、学校がワンチームとなり、児童の学習上及び生活上の課題を共有し、協働的に授業改善に取り組むことができた。さらに、「他者理解」や「家庭生活」など、FF調査の視点から、学力の阻害要因を多面的に考察し、学習指導に生かすことができた。

今後は、FF調査を活用した個別の支援をさらに充実させていく。

(2) 「東小マイプラン学習」の児童による授業評価の結果から

<4件法>	R7・4月	R7・7月
学習への意欲	3.2	↑3.3
課題解決の見通し	3.2	↑3.4
学習の計画	2.9	↑3.3
自己選択・決定	3.2	↑3.5
友達との協働	3.1	↑3.6
自己調査・追求	3.1	↑3.6
振り返り・活用	2.8	↑3.1

「東小マイプラン学習」の取組を通して、児童が「自立的に学ぶ」授業づくりについて、一定の成果が見られた。

また教師の指導観も、理解できるように「教え込む」から児童の自立的な学びを「支える」という意識に変わってきた。

今後は、複線型・合科型の授業づくりや家庭学習へのつなぎ等について模索していく。

(3) 長期欠席・不登校兆候児童数の変容から

	R5		R6		R7 ※推測値	
	8月末	3月末	8月末	3月末	8月末	3月末
長期欠席	7人	18人	3人	17人	4人	9人
不登校兆候	17人	23人	20人	19人	9人	15人
出現率	13.3%	22.7%	13.5%	21.2%	8.2%	15.2%

本校の長期欠席・不登校兆候の出現率は、概ね減少傾向にある。欠席日数を個別に見ても、約8割の児童に改善が見られた。

今後は、関係機関等との連携をより密にし、改善が難しい家庭への効果的な働きかけを検討していく。

生徒指導の視点を持ち、学校がチームとして協働的に児童の「自立的な学び」を「支える」という姿勢で授業づくりを行ったことで、「学校が楽しい」と回答する児童の割合が増えた（R7:99.8%）。その理由として「授業が楽しいから」等の記述も見られ、児童にとって学校が安全・安心な居場所となり、長期欠席・不登校兆候の減少につながったと考える。今後も取組の効果を検証し、ブラッシュアップしながら取組を継続させていきたい。

真崎小学校

○ 本校の生徒指導上の課題

(1) 児童の課題

本校は他校に比べ、全校児童数に対する長期欠席・長期欠席兆候児童数が少ない実態がある。その一方で、本校ならではの課題も浮かび上がっている。それは、川崎町内4小学校の児童が集まる川崎中学校へ進学した後に、本校卒業生の中から新たに不登校や不登校兆候になる生徒が一定数いるということである。

本校児童の課題は「児童の自己肯定感の低さ」(資料42)と「他者と関係を築いたり保ったりする力の弱さ(つながる力の不足)」であると考えられる。その要因として、日々の授業の中で、児童が自己選択・自己決定する機会や仲間と協働して学び合い・認め合う場面を十分に保障できていなかったことが挙げられる。

こうした課題を踏まえ、本校では児童一人ひとりが「自分はここにいてよい」と実感できるような安全・安心な居場所づくりや他者とのつながりを感じられる関係性の構築を教育活動全体を通して推進する必要があると考えた。

設問	令和4年4月全校平均値
自分にはよいところがあると思いますか。	2. 8点(4点満点)

資料42 令和4年度児童アンケート

(2) 教師の課題

本校は全学年単学級であるため、教師間の授業づくりや児童の関わり方にばらつきが生じやすい状況にある。したがって、本校における教師の課題は、日常の指導や授業についての考え方を揃えることである。

授業においては、特に、学習の進め方が統一されておらず、児童が進級に伴って学び方そのものを一から捉え直さなければならない状況が生じている。また、教師による児童への関わり方や声かけのスタンス、指導上のルールに齟齬が生じるという状況があり、集団生活の中での安心感や一体感を実感しにくくなっている。

教師が共通の視点に立ち、授業や児童との関わり方に一貫性をもたせていくことが、児童の安心感のある学びや豊かな人間関係づくりにつながると考えた。

○ 本校における発達支持的生徒指導のとらえ

児童の安全・安心な居場所づくり・絆づくりの充実をめざす学校づくり

本校では、発達支持的生徒指導を柱として、児童一人ひとりが「安心して学ぶことができる」「大切にされている」と実感できるような「安全・安心な居場所づくり」と他者とながら「絆づくり」の充実をめざす学校づくりを推進している。

本校がめざす「安全・安心な居場所づくり・絆づくり」とは、すべての児童が個性を発揮しながら自分らしく過ごせる環境の中で、互いの存在や考え方を認め合い、学び合い、つながりを実感できる関係性を築くことであると定義する。これは、児童が自分の思いや考えを気兼ねなく表現できること、そして他者の考えに耳を傾けながら共に学ぶ体験が積み重ねられることを土台としている。

このような「安全で安心できる場」と「豊かな人間関係」こそが児童の内面的な力を伸ばし、将来につながる社会的自立の基礎となると本校では考えている。

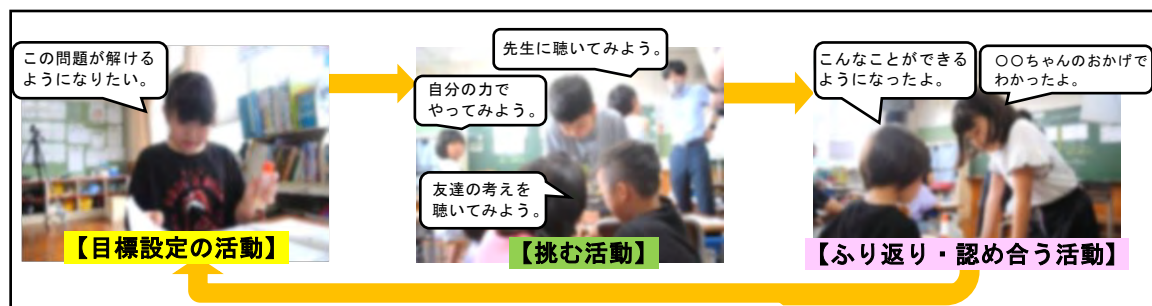
○ 取組の実際

(1) 教師のふり回りポイントを関連付けた「真崎小鍛ほめメソッド」の推進(教育活動)

本校では、「安全・安心な居場所づくり・絆づくり」の実現に向けた具体的な手立ての中心に「真崎小鍛ほめメソッド」を据えて取組を進めている。これは児童が「目標をもち、挑戦し、自分や他者の成長を認め合う」という学びのプロセスを、日常の授業の中で積み重ねることを通して、安心感と達成感を獲得することをねらうものである。

「真崎小鍛ほめメソッド」は単元や一単位時間において「①目標設定の活動、②挑む活動、③ふり回り・認め合う活動」の3つの流れから構成しており、児童が「できた」「わかった」「がんばれた」と感じる瞬間を意図的に生み出す授業構成をめざしている(資料43)。これにより、自己肯定感の育成や他者とのつながりの実感をすべての児童が日常的に獲得できるようにしている。

【資料43 真崎小鍛ほめメソッドのサイクル】



このメソッドをより確実に実践に落とし込むための具体として、本校では「教師のふり回りポイント」を活用している。これは、川崎町全体で進められている「川崎町アクション3.0」に基づいて作成されたものであり、特に本校ではその中の「授業中のポイント」に焦点を当て、取り組んでいる(資料44)。「児童の多様な考えを引き出しているか」「自己選択・自己決定の場があるか」「学習に遅れがちな児童も活躍できているか」「誤答を価値あるものとして扱っているか」といった具体的な視点を授業の中に取り入れることで、児童が「安心して自分らしく学べる場」を日常的に確保することをめざしている。

さらに、本校では、こうした実践を全教職員で共通理解し、一貫性をもって取り組むために「真崎小授業スタンダード」を作成した(資料45)。これは「鍛ほめメソッド」の流れと「授業中のポイ

【授業中のポイント！】

- 児童生徒の多様な考えが発揮できる場、自己決定できる場を意図的に設けていますか。
- 学習の遅れがちな児童生徒も、学習中に活躍できる場を保障していますか。
- 誤答を大切に学習にしていますか。

資料44 教師のふり回りポイント(授業中のポイント)

(真崎小授業スタンダード)

段階	学習過程	本研究を具現化した本時の授業展開例
目標設定の活動	1. 本時学習における自分の目標(ゴール)を設定する。 ・既習事項との違いから ・日常的な体験から ・単元計画から 「この計算ができるようになりたい。」 「この文章の要旨をまとめてみたい。」	指導上の留意点 (目的のための方法を示す「～するために、～する。」) ○ 「やってみたい」「解決したい」という「問い」をもたせるために、児童の興味・関心を引き出す問題や、ちょっと難しい問題を提示する。
挑む活動	2. 問題解決に挑む。 「今日は自分の力でやってみよう。」 「図を使って考えてみたい。」 「友達の考えを聞いてみよう。」 「先生にヒントをもらおう。」	○ 児童の多様な考え・意見が発揮できるように、自己決定・自己選択できる場の設定を行う。【教師のふりかえりポイント①】 ○ 学習に遅れがちな児童も学習中に活躍できる場づくりや見取りと支援を行う。【教師のふりかえりポイント②】 ⇒ 座席表を使って個別に評価・支援する。
ふり回り・認め合う活動	3. 学習内容をまとめる。 【まとめ】(例)かけ算では、かけられる数を分けて計算しても答えは同じになる。 4. 本時学習のふり回りをするとともに、次時学習への見通しをもつ。 ・自分の目標の達成度 ・どうすれば解決できたか ・自分の成長 ・友達の学び方、考え方のよさ ・次にやってみよう 「わたしは、○○ができるようになった。」 「○○さんの考えがよかったな。」 「○君のおかげで解決できたな。」 「次は、もっと○○したいな。」	○ 【まとめ】は、内容知について表記する。 ○ 学びの変容や学習の定着を自覚できるように「できるようになったこと、次にやってみよう」とや「成長したこと、新しい気づき、友達のよかったところ」をノートに書いたり、発表したりする場を設定する。【方法知】 ○ 「わかった」「できた」「がんばれた」という達成感を実感できるように、児童の姿や考え(誤答も含む)を稱賛したり、価値付け(意味付け、方向付け含む)したりする。【教師のふりかえりポイント③】

資料45 真崎小授業スタンダード

ント」の視点を具体的に位置付け、全学年・全教科で児童が同様の安心感と達成感を得られるように取り組んでいる。

このように「真崎小鍛ほめメソッド」は、本校の発達支持的生徒指導を具体化する柱であり、授業スタンダードと併せた実践により、単学級編成でも統一した一貫性のある学びの基盤を築いている。

(2) 「児童×教師視点对応学校生活アンケート」の活用(教育活動)

本校では「安全・安心な居場所づくり・絆づくり」を軸とした学校づくりを進めるにあたり、児童の実感と教師の実践を対応させて把握することを重視している。そのための具体的な手立てとして「児童×教師視点对応学校生活アンケート」を作成・活用している。

番号	分類	児童アンケート項目	児童	教師	教師アンケート項目
1	A 安心・居場所	学校に「自分の居場所がある」と感じていますか？	3.6	3.8	教室が児童にとって安心して過ごせる居場所となるよう意識していますか？
2	A 安心・居場所	教室で自分の気持ちや考えを安心して言えていますか？	3.4	3.3	児童が自分の意見を安心して発言できる場づくりを意識していますか？
3	A 安心・居場所	学級に「安心して話せる友だち」がいますか？	3.8	3.3	児童が安心して話し合える関係性づくりを意識していますか？
4	B 関わり・絆	学級の友だちと助け合っていますか？	3.5	3.3	協働的な学びを意識した授業づくりを行っていますか？
5	B 関わり・絆	困ったときに相談できる友だちや先生がいますか？	3.6	3.8	日頃から児童に寄り添い、相談しやすい雰囲気をつくっていますか？
6	B 関わり・絆	学級の中で自分のやるべきこと・役割を果たしていますか？	3.4	3.1	児童が役割を自覚し、果たするような学級づくりを意識していますか？
7	B 関わり・絆	人の役に立つ人間になりたいと思いますか？	3.8	3.3	「人の役に立つ喜び」を感じられるような場面を意図的に設定していますか？
8	C 挑戦・学び	授業の始めに自分なりの目標(できるようになりたいこと)を考えていますか？	3.3	3.6	授業で「目標設定の活動」を取り入れていますか？
9	C 挑戦・学び	授業中に自分で考えたり選んだりする場面がありますか？	3.6	3.1	自己選択・自己決定の場面を意図的に設定していますか？
10	C 挑戦・学び	授業の終わりに自分のがんばりを振り返ることができていますか？	3.0	3.0	授業の終末に「振り返り・認め合う活動」を設定していますか？
11	C 挑戦・学び	授業の中で、友だちのよさに気づくことがありますか？	3.5	3.3	他者の考えに価値付けする場面を授業内に設定していますか？
12	C 挑戦・学び	難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか？	3.4	3.8	「失敗を恐れず挑戦できる雰囲気づくり」を意識していますか？ (誤答の価値づけ、挑戦の称賛等)
13	D 自己認知・承認	先生はあなたのよいところを認めてくれていますか？	3.7	3.8	児童のよさや成長に気づき、意図的に言葉で伝えていますか？
14	D 自己認知・承認	自分にはよいところがあると思いますか？	3.4	3.8	児童の自己肯定感を高める声かけや支援を意識していますか？
15	D 自己認知・承認	授業などで「わかった」「できた」「がんばれた」と感じて、うれしく思ったことがありますか？	3.7	3.6	児童が達成感を感じられるような声かけや価値付けを意識していますか？
16	D 自己認知・承認	学校に来るのは楽しいですか？	3.6	3.6	児童が「学校に来るのが楽しみ」と感じられるような環境をつくっていますか？

資料46 児童×教師視点对応学校生活アンケート項目一覧表(1学期集計結果)

このアンケートは A, B, C, D の4つのカテゴリに分類され、児童アンケート項目と教師アンケート項目の内容がリンクするように作成している(資料46)。児童には自分の実感を、教師にはそれに対応する日々の実践を問う形をとり、児童と教師の認識のズレや共通点を関連的に分析できる設計となっている。アンケートは年間3回実施し、以下のようなPDCA サイクルで活用することとしている(資料47)。

Plan (計画)	アンケート項目から見えた課題を基に、授業改善案を考える。
Do (実行)	授業スタンダードや鍛ほめメソッドの各活動に改善案を反映し、具体的な授業実践を行う。
Check (評価)	次回アンケートで変容を確認し、数値や自由記述から成果と課題を整理。
Action (改善)	成果が見られた実践は学校全体で共有し、課題が残る部分は授業方法や児童への関わり方を再検討して次の計画に反映。

【資料47：実態把握のサイクル】

このように、「児童×教師視点对応学校生活アンケート」は、本研究における実践の検証と振り返りを行う上での重要な評価ツールとしての役割を果たしている。

(3) 検証改善協議シートを活用した校内検証会議の日常化(経営活動)

今年度より、学力向上コーディネーターを中心に、全学級の算数単元テストの結果をもとに期待正答率の通過率を算出し、データに基づいた授業改善の協議を定期的に行っている(資料45)。数値化された学習状況は、単に学力の達成度を測るだけでなく「どの児童が、どの場面で、どのような支援を必要としているか」を明らかにし、授業スタンダードの視点や実施状況を改めて振り返り、児童が安心して挑戦できる授業づくりへとつなげている。

これによって、単元や一単位時間での授業改善や習熟度別学習に向けた T T の効果的な活用にも生かすことができている。

また、定期的な交流の場(検証会議)をもつことで、教師間での授業改善アイデアの共有

検証改善協議シート										年	I 組	I 学期	
教科	単元名	期待正答率 (%)	テスト1回目				テスト2回目				未通過者数		所見 (未通過者数、点數、効果的な取組・手立て等)
			通過者数		未通過者数	未通過率 (%)	通過者数		未通過者数	未通過率 (%)			
			平均正答率 (%)	最低正答率 (%)			平均正答率 (%)	最低正答率 (%)					
1	算数	80%			30%			100%	OK		未達宣言(0)		
2	算数	80%			63%			80%	NO				
3	算数	80%			44%			63%	NO				

【資料48：検証改善協議シート】

【資料48：検証改善協議シート】

や好事例の広がり生まれ、単学級編成であっても学校全体として一貫性のある学びの場を保障できる体制が整いつつある。

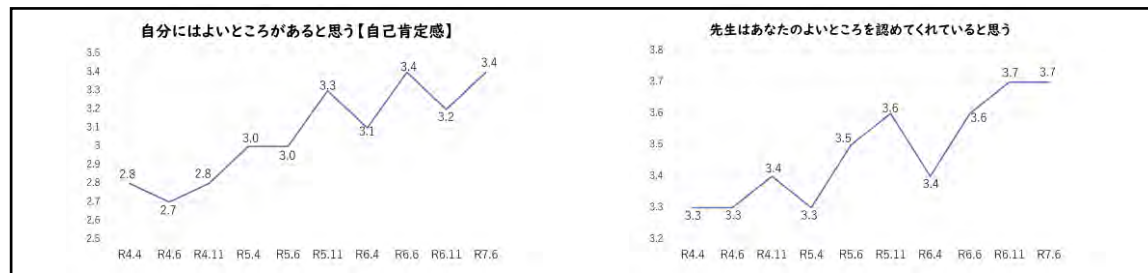
このような検証改善シートを活用した校内検証会議は、児童の学力向上とともに安心感のある学びの基盤づくりを支える重要な経営活動として、本研究の推進に欠かせない役割を果たしている。

○ 成果と課題

(1) 「児童アンケート」と「単元テストの通過率」から

本研究を開始する以前から取り続けている「児童アンケート」の結果からは、継続的な取組の効果が表れている(資料49)。

資料49 児童アンケート結果の推移



「真崎小鍛ほめメソッド」を軸とした授業の実践により、児童が「自分に自信がもてる」「安心して学べる」学びの場を実感できていることがわかる(資料46)。それに加えて「誰一人取り残さない」ことをめざした教師の丁寧な授業改善と支援の積み重ねが、算数単元テストにおける期待正答率の通過率の向上にも結び付いている。

本研究を通して、児童の学力の認知的側面と非認知的側面の双方において成長が見られたことがわかった。今後も、児童の実感と教師の実践を対応的に見取りながら児童が自己肯定感を高め、仲間とつながり合いながら安心して挑戦できる学校づくりを推進していく。

(2) 本校教師の授業観・教育観の転換(マインドチェンジ)

従来の「教える中心」の授業観から、児童の変容を見取り、価値付け、挑戦を支える伴走者としての姿勢へと教師の授業観がシフトしつつある。また「教師のふり返りポイント」や「検証改善シート」を活用した日常的な授業改善により、教師同士がデータや実践を共有し合い、学校全体で一貫性をもった授業づくりが進められるようになってきている。

(3) 課題と今後に向けて

本校の取組が日常化し、形になってきているものの、さらなる浸透・徹底の余地がある。今後も研修の充実を図ったり、年度が変わっても継続的に実践できる持続可能な体制を整えたりする必要がある。児童が安心して学び、達成感を実感できる学びの場を引き続き保障していきたい。

川崎小学校

○ 本校の生徒指導上の課題

(1) 授業づくりにおける課題

教師は誰もが「児童全員に学習内容を分かってほしい。」と願うものである。本校は学力C・D層の児童の割合の高さから、授業者はその思いが一層強いと考えられる。そのため、授業では「分かる人いますか。発表してください。」「分かる人が分からない人を教えましょう。」のように「分かる子」「できる子」中心の授業展開が多かった。

また「問題を①から順番に自分の力でします。」と授業者が常に学習内容・方法を決め、困っている児童の間を行き来する姿があった。「分からない」「できない」ことが一部の児童に不安を感じさせ、不登校率の高さの要因の一つになっていたと考える。

(2) その他の取組における課題

授業以外の取組でも児童に不安を感じさせていたと考える取組がある。基礎的な学力（読み・書き・計算等）を身に付けさせる「学習コンクール」と廊下の歩き方など規範意識の向上を図る「レベルアップ週間」など学習・生活の基盤をつくる取組である。授業同様「できるようになりたいがうまくいかない」児童の内面を教師がしっかりと受け止め、安全・安心な風土の中で自分の困難を乗り越えることができるようにするため、教師にどんな働きかけができるかを考える必要があった。

○ 本校における発達支持的生徒指導の捉え

(1) 発達支持的生徒指導を推進するために私たちが目指した「教師のマインドチェンジ」

児童の「安全・安心」につながる教師の働きかけについて考える校内研修を行った(資料50)。「分からない児童を肯定的に受け止めて『一緒に考えよう』と声をかける」や「児童の分からないことを学級全体の学習展開の中心にする」等の意見が出され、「できる人はいますか」の発問をやめることを共通理解した。この研修は教師一人一人が自分のマインドを振り返って自覚し、私たちが目指すマインドを行動レベルで方向付ける機会となった。



資料 50 校内研修の様子

そして、児童の「分からない」「できない」などの困難について3つの局面における教師の姿を整理し、「安全・安心の風土を醸成する」働きかけモデルを作成した(資料51)。

【困難を自覚させる働きかけ】	【困難を表出させる働きかけ】	【困難に関わらせる働きかけ】
・「解決できるか不安な人はいますか？」 ・「この問題はやはり難しくありませんか？」	・『『分からない』を見つけることができた人はいますか？』 ・『『分からない』ことを詳しく言えますか？』	・「Aさんは何に悩んでいるか分かりますか？」 ・「Bさんの悩みの解決方法はないですか？」

資料 51 「安全・安心な風土を醸成する」ための働きかけモデル

(2) 発達支持的生徒指導における教師の具体的支援「3つの『つなぐ』」

多くの困難を抱える本校児童にとって教師の「つなぐ」働きかけの果たす役割は大きいと考え、次のモデルを作成して意図的な「つなぐ」を推奨した(資料52)。

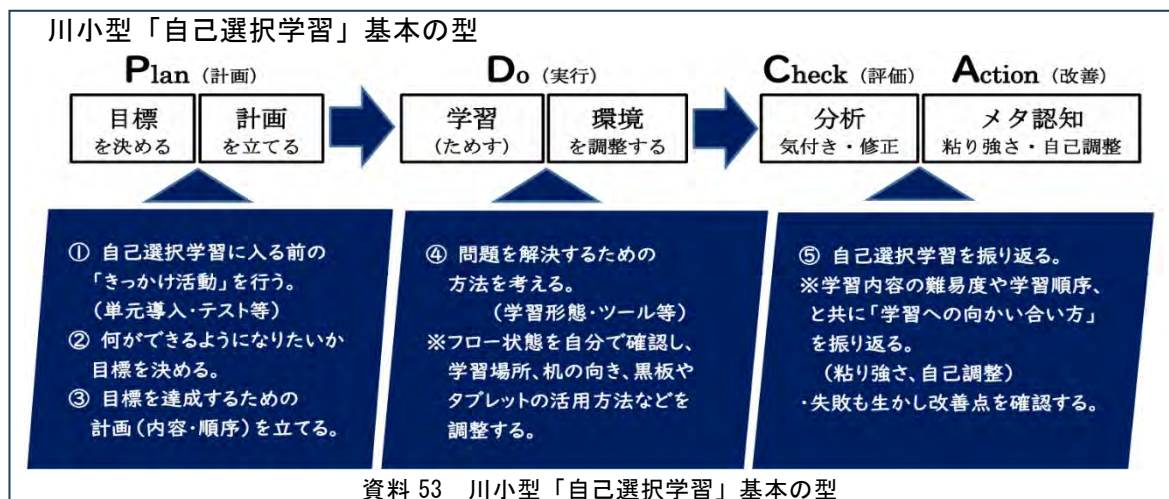
【自分と「つなぐ」働きかけ】	【他者と「つなぐ」働きかけ】	【教材と「つなぐ」働きかけ】
・「前の学習との違いは何ですか？」 ・「今までの学習の中でどの学習が使えるのですか？」 ・「今までにこのような経験をしていませんか？」	・「Aさんの発言についてどう思いますか？」 ・「BさんとCさんのどちらの考えに近いのですか？」 ・「Dさんが言いたいことを応援できませんか？」	・「どの言葉から人物の気持ちが分かりますか？」 ・「この場面でどうしてたし算と考えたのですか？」 ・「今日学べたことは何ですか？」

資料 52 児童の「分からない」「できない」を乗り越えさせるための働きかけモデル ※一部を抜粋して示す

○ 取組の実際

(1) 「3つの『つなぐ』」により困難を乗り越えさせる川小型「自己選択学習」の推進

先に述べた本校の授業づくりの課題を克服し、児童が安全・安心な風土の中で主体的に学ぶことができるようにするため、昨年度から児童が学習内容や学習方法を自己選択する川小型「自己選択学習」(資料53)を推進している。その基本の型は、次のとおりである。



実践例 (実践例：3年 国語科)

単 元	あなたにぴったりのこまの楽しみ方を紹介します (『こまを楽しむ』光村図書)				
単元計画	時	学習内容 (計8時間)	主な評価基準		
			知	思	態
	1～3	『文様』『他の説明文』から段落構成等を捉える。	○		
	4	『こまを楽しむ』から読みの課題をもち、学習計画を立てる。	○		○
	⑤・6	自分の読みの課題をもち、段落構成等をまとめ、内容を捉える。		○	
	7	自分の読みの課題を解決し、筆者の考えをまとめる。		○	
主 眼 (第5時)	8・9	こまの紹介文を書き、読み合う。		○	○
	A「文様」を整理した表やB他の説明文を整理した表、C全文掲示の各コーナーを活用し、教材文の各段落(文)の内容や役割を付箋を使って表に整理する活動を通して、各事例から問いの答えを見出したり、筆者の伝えたいことを捉えたりすることができる。				
予想した 児童の困難	・各事例の中から問いの答え(こまの種類+その楽しみ方)を見出すこと ・各事例の中から問いの答え以外の文の意味を捉えること				
本時の 具体的な 「つなぐ」 働きかけ	【自分とつなぐ】『文様』で問いの文と答えは、どんな言葉でつながっていましたか。(資料54) 【他者とつなぐ】同じ事例を整理しているのは誰ですか。誰と一緒に考えたいですか。(資料55) 【教材とつなぐ】筆者の各事例の書き方で似ているところはありますか。それはどこですか。(資料56)				



資料 54 自分とつながる児童



資料 55 他者とつながる児童



資料 56 教材とつながる児童

この授業改善に取り組み始めた昨年度は「児童が自分の学習計画を立てること」を重点とし、各学級で川小型「自己選択学習」に学期に一回以上取り組むことを共通理解して実践を重ねた。その結果、学年末の教師アンケートからみえた①②の課題について教職員全体で共通理解し、今年度の重点と位置付けて授業改善を推進している。

R6 川小型「自己選択学習」実践上の課題	R7 川小型「自己選択学習」を見直した点
① 児童が自己選択する場面はふえたが、次のような方法に偏っていた。 - 誰と課題解決をするのか (教師と・友だちと・自分で) ② 教師が児童の姿を通して自己選択学習のよさを実感するまでには至っていない。 「粘り強く」取り組む姿に課題 「自己調整」しながら取り組む姿に課題	① 誰と解決を目指すのかは柔軟に児童が選択するものとし、教師は児童が選択できる解決ツールを環境中心に複数設定する。 - 教材・教具や掲示物、情報端末、他者 ② 3つの視点での振り返りを日常化する。 - できたのはどうしてか - できなかったことは何か - 次回にしたいことは何か

(2) 「3つの『つなぐ』」により困難を乗り越えさせる「周辺活動」の推進

本校では、各学年に児童が困難を乗り越えるように意図的・計画的に重点単元を位置付けている。その重点単元を整理した「オアシス※カリキュラム」は、本校の発達支持的生徒指導の根幹である。周辺活動は、そのカリキュラムで児童が困難を乗り越えるための基盤となる力を育む活動である。具体的な活動を以下に示す。

※「おいでよ、安心して。心配ないよ、素敵な学校つくろうよ。」

活動内容	実施	ねらい
- 学習コンクール - 家学 - レベルアップ週間	年間6回実施 年間6回実施 年間12回実施	基礎学力の定着を図る。 家庭学習の習慣と基礎学力の定着を図る。 よりよい学校生活づくりの習慣化を図る。

「周辺活動」においても児童に「分からない」「できない」困難が予想されるため、これらの取組の提案から取組後まで「生徒指導」の視点を貫くシステムを構築した(資料57)。

従来の「周辺活動」の流れ	取組を「生徒指導」の視点で貫くための3つの工夫
① 前年度の課題を確認	○ 「周辺活動」担当と一緒に提案を作成 ・ ねらいに「生徒指導の視点」を加える ・ 児童の「予想される困難」を明記 ・ 乗り越えるための「つなぐ」を明記
② 提案内容を見直し	
③ 提案	○ FF調査結果をもとに見出した要支援児童を確認 ○ 要支援児童への支援の仕方を確認
④ 実際の取組	○ 活動中に児童の困難状況の共有(ボード活用)
⑤ 取組後に振り返り	○ 活動後に児童の困難状況の共有(ボード活用)

資料57 周辺活動において「生徒指導」の視点を貫くためのシステム

従来の提案よりも「生徒指導の視点」が入った提案ができたことで、実際の取組中に困っている児童を見出し、困難を乗り越えさせようと「つなぐ」教師の姿が見られた。また、以前は活動後に活動全体を振り返っていたが、困難を乗り越えさせるまでには至らない場合があったため、活動中間にも振り返りを入れた。その結果、教職員が児童の困難状況に応じた具体策をもって活動終盤にのぞむ体制が整うようになった(資料58)。



資料58 オアカリボードをもとに振り返る教師

(3) 児童の困難を可視化する「オアカリ（オアシスカリキュラム）ボード」の活用

本校では、児童の欠席が増加する月を見出し、その前月に重点単元を位置付けている。例えば1学期末に行う「ピチパチャイベント」（資料59）では、梅雨の時期に5・6年生が委員会活動のグループ毎にイベントを企画し、全校児童が参加する。イベント内容やその準備の仕方を考えたり、実際に準備を進めたりする際に、児童は数々の困難に出会う。その児童の内面を可視化するのが「オアカリボード」（資料60）である。次のように2色の付箋を使い分けている。

青付箋・・・「自分の困っていること」 桃付箋・・・「困難を乗り越えた方法」

教師は、このボードから児童の困難を見出し、その子に応じた「つなぐ」支援を行う。活動前半は、青付箋を書く子がほとんどで困難の多さが窺えるが、次第に桃付箋が増えていく。児童が自分の困難を見出し、教師の「つなぐ」働きかけにより困難を乗り越えたことを実感させるシステムができた。



資料59 ピチパチャイベントでの児童の様子



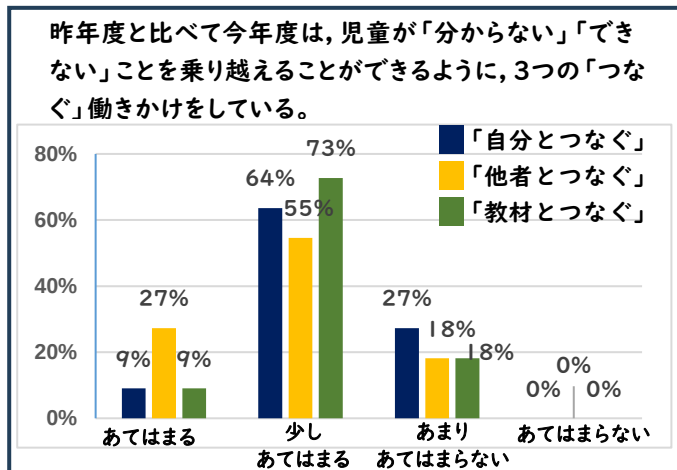
資料60 オアカリボード

○ 成果と課題

(1) 3つの「つなぐ」の日常

1学期末に実施した教師対象のアンケート（資料61）から教師の「つなぐ」働きかけに対する意識が、昨年度よりも高まっており、日常化が進んでいるといえる。

3つの「つなぐ」の中で最も肯定的な回答が得られたのが「他者をつなぐ」であり、日常的に働きかけやすいことが分かる。今後は「自分をつなぐ」「教材をつなぐ」の働きかけ方も含め、研修や交流を通して、授業や周辺活動における更なる児童支援のあり方を模索していきたい。



資料61 3つの「つなぐ」に関するアンケート

(2) 不登校・不登校兆候の実態の改善と課題

本校の不登校率等変容を資料62に示す。本研究に取り組み始めたR5から不登校

	R 4	R 5	R 6
不登校	45人/246人 18. 3%	3 6 人/2 4 6 人 14. 6% 継続 2 3 人, 新規 8 人	2 7 人/2 4 8 人 11. 1% 継続 1 8 人, 新規 7 人
不登校兆候	26人	12人	6人

率が改善しており、大きな成果といえる。 資料 62 本校の不登校率等の変容

しかし、依然として新規不登校児童が複数名いることは課題である。F F 調査の活用の仕方や不登校兆候の児童への働きかけのあり方を見直すなど本校の発達支持的生徒指導の取組がよりよいものとなるように検討を重ねていく必要がある。

池尻小学校

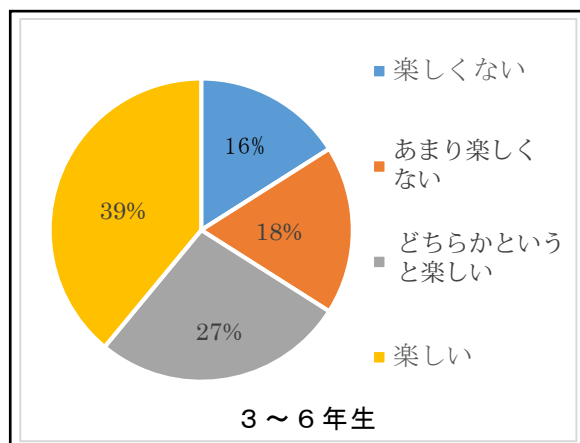
○ 本校の生徒指導上の課題

本校の課題として学習意欲、登校意欲の向上が挙げられる。その要因の1つとして、今まで本校の授業が教師主導の授業になっており、児童が学ぶ意義や意味を感じることができていなかったことが考えられる(資料63)。

FF 調査の結果でも、学校での学習の必要性を感じられていない児童の割合が多かった。

そのため、長期欠席やグレーゾーンの割合も多い傾向であった。一時的な登校は望めても、継続することが難しい状況が続き、学習の遅れによって、授業に対する意欲がさらに低下していくという負のサイクルに陥る児童も見受けられた(資料 64)。

また、教職員のマインドも、「登校したときにどれだけ学習をすすめるか」に重きを置いていたため、児童が主体となる授業への転換を図っていく必要があると考えた。



資料 63 学校で勉強することは楽しい (R6 7月)

不登校兆候	一人あたりの平均日数	長期欠席	一人あたりの平均日数
9.9%	28.5 日	6.6%	49.7 日

資料 64 不登校兆候及び長期欠席について (R6 7月)

○ 本校における発達支持的生徒指導の捉え

発達支持的生徒指導とは、児童自身が、自発的・主体的に自らを成長・発達させる過程を支える生徒指導であり、児童の個性や可能性を伸ばし、社会的自立を目指す生徒指導の基盤である。そのことを踏まえ、本校では以下の2点に重点を置いた。

I 「安全・安心な居場所づくり」

「児童が安心して授業に参加できる」「自分の意見を素直に述べるができる」「自分を認めてくれる相手がいる」「きまりやルールの中で生活することができる」等、児童が落ち着くことのできる環境が整えられている状態を保つ。

II 「魅力ある学校づくり」とは

「授業が分かる」「勉強ができるようになる」「先生や友達と活動することが楽しい」等、自分に自信がもてる・学校や授業が楽しいとすることができる取組を位置付ける。

本校の重点である I 「安全・安心な居場所づくり」 II 「魅力ある学校づくり」の具現化を目指し、本校では「学習に興味をもち、意欲を高める体験活動」を全学年の授業で積極的に取り入れることとした。

体験活動により、実際に見て、触れて、感じ、考えることで、知識の深化や定着、コミュニケーション能力などの非認知能力の育成、学習意欲の向上、自己肯定感や自己有用感の醸成などが期待できると考える。

(1) 池尻小学校の体験活動のとりえ

池尻小学校における体験活動とは、五感を使った教育活動であり、児童が教科書だけでは得られない学びを、実際に体験したり経験したり、人と関わったりしながら学んでいく活動のことである。以下は各教科における体験活動の一例である。

算数	長さ・重さ・広さを様々な道具、場所を用いてはかる等 例：ブロックを使って数を数える 1 m ³ のブロックを使って立体を作って学習する
国語	書籍や辞典を使って調べる・教科書の内容を体験し理解を深める 例：「おもちゃの作り方」で実際に同じものを作ってみる
理科	色々な物や生物を観察、実験する・実験のために栽培をする 例：ひまわりやホウセンカを育て、その種や茎を観察する
社会	フィールドワークを行い調べる 地域教材を活用する 例：地域の方にインタビューを行い、調べる

(2) 体験活動における5つの視点

体験活動を効果的なものにするための視点として、以下の5つを挙げる。

① 目的が明確であること

活動を始める前に、「なぜこの活動をするのか」「この活動を通して何を学ぶのか」という目的を児童と共有することが重要である。単に楽しいだけで終わらせず、学びと結びつけることで活動の意義を高めるようにする。

② 児童が他者と関わりながら、主体的に参加できること

活動の中で友達や地域の人などに関わる時間や場、機会を設けることで、多様な他者とつながることにより、自己肯定感や自己有用感をもてるようにすることが重要である。また、児童が自ら考え、選択し、失敗を恐れずに挑戦できる環境を整えることで、主体性や問題解決能力を育むことができるようにする。

③ 五感をフル活用できること

「見る」「聞く」だけでなく、「触る」「嗅ぐ」「味わう」といった五感を使うことで児童の知的好奇心を刺激することが重要である。各教科で学んだ知識が体感的な理解へと結びついていくことで、深い学びを実現できるようにする。

④ 振り返りの時間を設定すること

「何ができたか」「難しかったことは何か」「次に活かせることは何か」などを考え、自覚させることで、学びの意義を実感させたり、実生活とのつながりを意識させたりすることが重要である。体験したことや学んだことが次の活動への意欲や目標設定につながるようにする。

⑤ 安全に配慮すること

児童が安全に活動するために、事前に体験活動に適切な道具や場所を選定することが重要である。安全な環境をつくり、児童が安心して活動に取り組むことができるようにする。

○ 取組の実際

3年国語科「すがたをかえる大豆」 総合的な学習の時間「大豆博士になろう」

3年国語科「すがたをかえる大豆」の学習は、文の構成や接続詞の重要性に気づかせることをねらいとしている。そこで、総合的な学習の時間の「大豆博士になろう」の単元とつなげ、教科横断的に学習を進めていく計画を立てた。具体的には、実際に地域のボランティアの方々に教えてもらったきな粉づくり・豆腐づくりの手順をもとに、国語科の授業で取り扱った教材を振り返った。教科書の叙述とそれぞれの手順が一致したことで、文の構成や接続詞についての理解を促すことができた。

また、地域のボランティアの方々に教えてもらうことで、人間関係をつくる力や地域を大事にする心を育むとともに、自分たちできな粉や豆腐を作ることができたという達成感も味わわせることができた（資料 65）。



資料 65 活動する3年生の姿

6年社会科『「国づくりへの歩み」(田原遺跡発掘および出土品の見学『全国統一への動き』(添田町岩石城址見学))』

6年社会科においては、教科書や資料集の情報を読み取りながら考え、表現する学習だけではなく、それらの学習に加えて実際に実物を見たり触ったり、感じたりすることを取り入れた学習を計画した。具体的には、教科書に載っている土器等の道具や古墳、戦の跡などについて体験的に捉えることができる活動を仕組んでいった。なかなか身近に感じることができない歴史学習でも、そうすることで興味・関心をもって学習できると考えたためである。

遺跡発掘では、教科書で学習した土器の欠片や黒曜石の破片を見つけることができ、児童は大いに喜んだ。また、以前に町で発掘された物が展示されている資料館に行き、自由に本物の土器に触れる体験も行った。町内の戸山原古墳では、学芸員の方の説明から、昔の人々の生活について体感的な理解を促すことができた。

さらに、豊臣秀吉の天下統一についての学習の際には、秀吉と秋月氏の戦いに焦点を当て、実際に戦の行われた添田町の岩石城址の見学に行った。そこでは、学芸員の方の話を聞いたり当時の甲冑を見たり、岩石城址の登山をしてみたりした（資料 66）。

見学を行ったことで、その後の授業で手を挙げて発表する児童が増えたり、郷土資料に興味をもち進んで読む児童が現れたり、児童の学習に臨む姿に大きな変化が感じられた。また、活動の度に感想やまとめを書いていたため、児童の書く文章の質が向上した。



資料 66 活動する6年生の姿

○ 成果と課題

(1) 日常の授業と標準学力調査の結果から

体験活動を行うことによって、児童の学習に対する興味・関心は明らかに高まっていた。授業では児童の「なぜ」「どうして」を大切にし、「児童が考える」学習を多く取り入れた。その結果、児童からは自分たちの体験をもとに、積極的に考え、表現しようとしている姿が見られ、授業が活性化されたと言える。また、それに伴い学力テストの「書くこと」や「記述問題」の正答率の伸びが見られた（資料 67）。さらに、アンケートにおいて社会科が楽しいと答えた児童の割合が 9 割を超えており、これは体験活動の成果と言える。

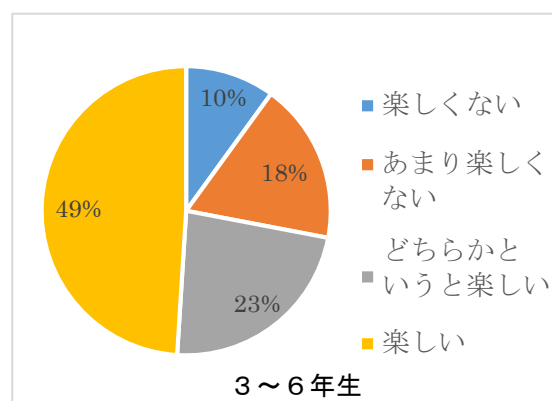
	令和 6 年 4 月実施	令和 6 年 12 月実施
国語	39.86	57.7
算数	21.06	29.38

資料 67 標準学力調査 平均正答率（2～6 年生）

(2) 「FF 調査」から

FF 調査の「学校で勉強することは楽しい」の設問を分析すると、体験活動を取り入れたことで、児童が学校を楽しい場所だと捉えられていることが分かり、効果があったと考えられる（資料 68）。

実際に、体験活動を取り入れる前と取り入れた後と比較すると、本校のグレーゾーンの児童は減少傾向にある。また、長期欠席児童の一人あたりの欠席数も減少していた（資料 69）。これは、体験活動をきっかけに学校への登校や授業に対する意欲が高まった成果だと考える。



資料 68 学校で勉強することは楽しい（R7 6 月）

不登校兆候	一人あたりの平均日数	長期欠席	一人あたりの平均日数
10.0%	24.8 日	6.0%	41.7 日

資料 68 不登校兆候及び長期欠席について（R7 6 月）

(3) これからに向けて

教師のマインドに目を向けると、知識だけでなく、「学ぶことの楽しさを味わわせたい」という願いをもって先生方が積極的に体験学習を取り入れるようになった。担任はもちろん、その他の教職員も巻き込み、率先してゲストティーチャーとの打ち合わせや事前学習を進めている。

総合的な学習の時間と絡めた体験学習を効果的に位置付けることや、PDCA サイクルを活用した教育課程における体験活動の精選と柔軟な対応の必要性が課題となっている。この課題改善が、児童の「学習の必要性」を高め、長期欠席の減少に繋がることを願い、今後も体験活動を取り入れていく必要がある。

3. 研究の 総括

川崎町 教育委員会

- あらゆる角度から児童生徒の現状の把握の大切さ
- 教職員の「共通理解」と「一貫した支援」の必要性
- 教師のたゆまぬセルフチェックとマインドチェンジ

川崎町のすべての学校が、子どもの育ちを支援する体制づくりの取組から見えた成果と課題について川崎町の研究を総括します。

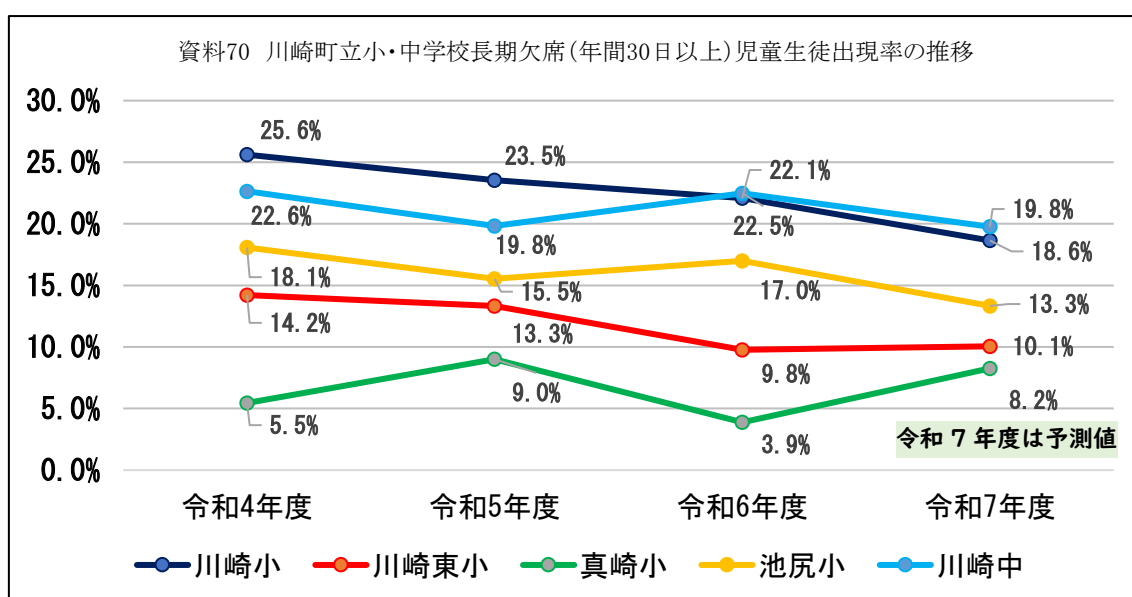
1 はじめに

本研究では、「川崎町全体の児童生徒支援体制づくりを行い、学校と関係機関が児童生徒の状況を共通理解し、生徒指導の機能を生かした教育活動を展開することで、安全・安心な風土のもと、新たな不登校を生まない、児童生徒が社会的自立を目指す教育活動が展開できるであろう」との仮説を立て、「5 研究の実際」で示したとおり、各校において児童生徒の実態に応じた取組が展開されてきた。

ここでは、川崎町の各学校が取り組んできたことについて、福岡県の示す3つの視点に基づいて総括していく。

2 研究の成果と課題

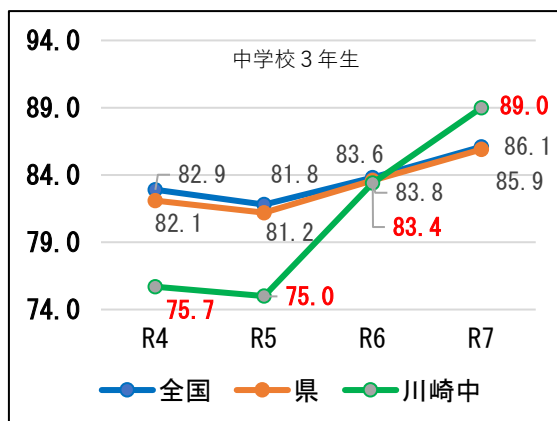
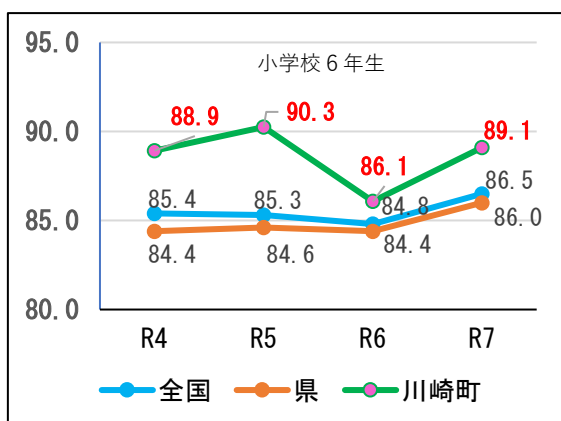
下の資料70は、川崎町立小・中学校における長期欠席（年間30日以上）児童生徒出現率の推移を示している。学校が関係機関と連携して児童生徒の状況を共通理解し、生徒指導の機能を生かした教育活動を展開したことにより安全・安心な風土が醸成されたことでわずかではあるが、長期欠席の児童生徒は全体的に減少してきている。以下、視点に沿って成果と課題について示していく。



視点1 安全・安心な風土の醸成（居場所づくり・絆づくり）

成果

- 全校で授業スタンダードを基に、自己有用感や自己が他者から尊重されていることを実感できる自己決定の場のある授業づくりと学びに向かう力を育む体験活動を実施したことは、「仲間との絆づくり」が進み、集団への所属感を持つ児童生徒が増加した。
- 「川崎アクション 3.0」の実施は、すべての小・中学校で実施されている生徒指導委員会や川崎中学校のコア会議を通じて、児童生徒に関わる教職員の「共通理解」と「一貫した支援姿勢」が強まり、児童生徒に安心感を与えた（資料71）。



資料 71 学校に行くのは楽しいと思いますか (R4～R7 年度全国学力・学習状況調査質問紙より)

- 小・中学校ともに学校は楽しいと感じている児童生徒は県平均を上回っている。これは、学習・生活の両面において生徒指導の視点を生かした支援により安全・安心な風土の醸成が進んだことで児童生徒にとって学校が魅力ある場になっている。

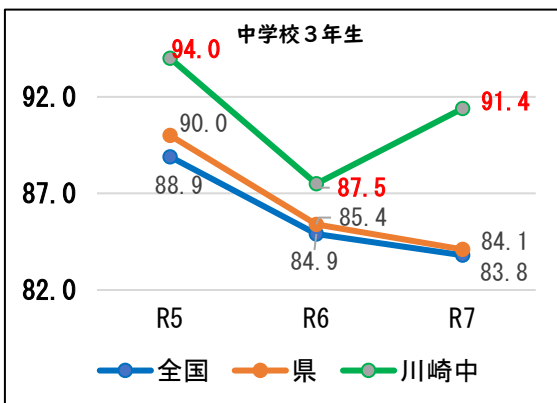
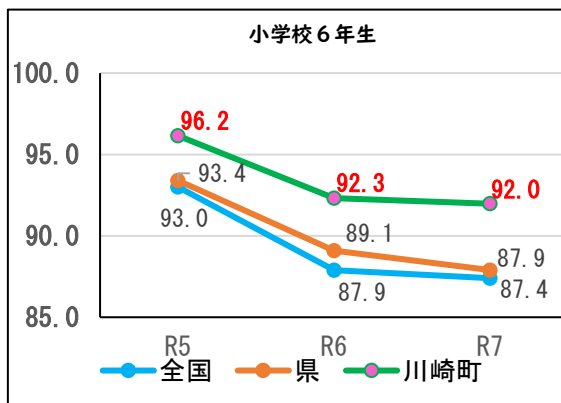
課題

- 居場所づくりは一定の成果が見られるが、児童生徒の「心の声」を日常的に拾い上げる仕組みを整え、教職員の対応にばらつきをなくし、児童生徒の安心感をさらに高めていく必要がある。

視点 2 ICT や FF 調査等を活用した個々の状況把握とその状況に応じた支援

成果

- FF 調査、欠席状況や学習状況の記録などを ICT で可視化したことで、学習面・生活面双方で支援が必要な児童生徒を早期に特定でき、「チームでの早期支援」が可能になった。
- 児童生徒情報共有シートを作成したことで、教職員・関係機関の共通理解のもと「未然防止・早期発見・適切対応」の一貫した支援体制が整いつつある。



資料 72 先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか (R5～R7 年度全国学力・学習状況調査より)

- ICTを活用して児童生徒の情報収集・分析を行った内容に基づき、学校生活全般において個の課題に応じた支援を行ったことにより、資料 72 に示すように教師の支援に対する児童生徒の満足度は高まっている。

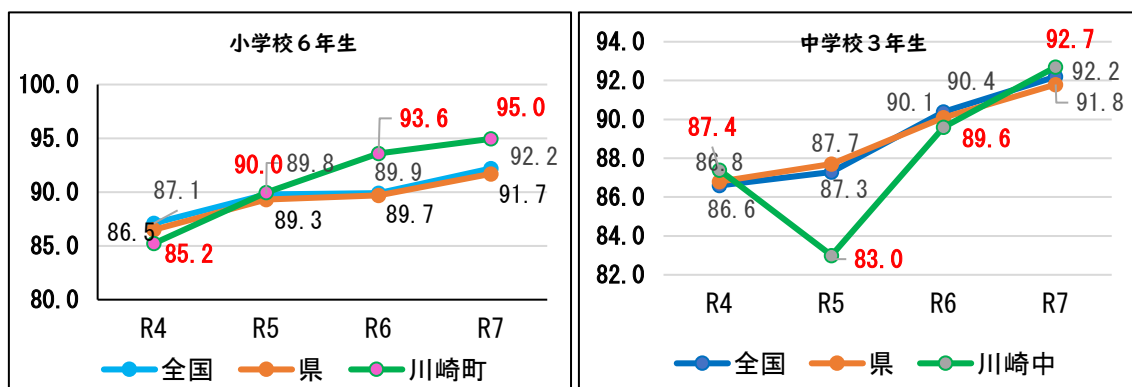
課題

- 各種調査等から得られる客観的情報と日常の観察や関係性から得られる主観的情報を関連付けた支援の充実が求められる。

視点 3 発達支持的生徒指導を推進する生徒指導体制の構築

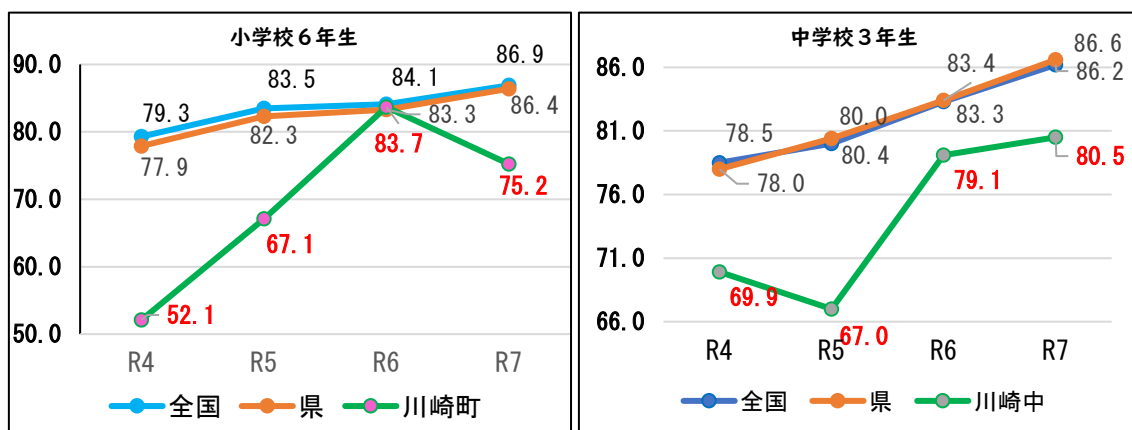
成果

- 教師の振り返りポイントを基にした教師用アンケートの結果を生徒指導委員会等において分析することで、教師の姿勢や態度の在り方を整理することができ、児童生徒理解に基づいた自発的・主体的な発達を組織的に支援することができた(資料 73)。
- 自己選択学習等、児童生徒の主体的な教育活動を工夫できたことで、これまでの「させる・指導する」から「支える・伴走する」への意識転換が教職員間で進み、児童生徒の自己肯定感を高める指導へと発展させることができた(資料 74)。



資料 73 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか

(R4～R7 年度全国学力・学習状況調査児童質問紙)



資料 74 自分には、よいところがあると思いますか (R4～R7 年度全国学力・学習状況調査質問紙より)

- 教師の振り返りポイントを活用し、教師主導から児童生徒主体の支援へ転換したことで、「支える・伴走する」という教師の意識の変容とともに教職員と児童生徒の信頼関係が築かれ、児童生徒の自己存在感・自己肯定感を高めることにつながった(資料 73, 資料 74)。特に資料 74 に示す小学校 6 年生 R4(51.7)と中学校 3 年生 R7(86.2)は同一の集団であり、自己肯定感が 3 年間で 34.5 ポイント向上している。このことから発達支持的生徒指導の視点を踏まえた諸活動を通して児童生徒の自発的・主体的な活動を展開することができたと考える

課題

- 発達支持的生徒指導の理念は共有されつつあるが、具体的な授業・行事・日常指導に落とし込む取組は学校間・学級間で差がある。

3 まとめ

本研究を通じて、各校の「学力向上」「生徒指導」「情報教育」「校内研修」のコアとなる人材を組織した各担当者会の取組は、「安全・安心な学校風土」「ICT を活用した状況把握と支援」「発達支持的生徒指導体制の構築」という 3 つの視点から下に示すような効果を生むことができ、児童生徒が社会的自立を目指して安心して学べる学校づくりの基盤を整えることができた。

- **視点 1** では、児童生徒が「ここにいてよい」と感じられる風土が醸成され、居場所感と絆を基盤とした学校文化が芽生えた。
- **視点 2** では、ICT と FF 調査を中心にした「見える化」によって、児童生徒の状況を根拠に基づいて理解・支援する仕組みが整った。
- **視点 3** では、発達支持的生徒指導の理念に基づいた「川崎アクション 3.0」により、組織的・日常的な支援の在り方が機能し始めた。

一方で、児童生徒の状況を的確に捉えた実効性のある支援体制や発達支持的生徒指導の理念を踏まえた教職員の指導力の向上などの課題も明らかになった。これらの課題解決に向けて実践を充実させることが、不登校を生まない教育活動の確立、そして児童生徒の社会的自立に直結すると考える。

4. 学習 指導案

1年1組 数学科

4章 比例と反比例
「比例と反比例の利用」

1年2組 社会科

3章 世界の諸地域
「アフリカ州」

1年3組 外国語科

Unit 7
「An Online Tour of the U.K.」

2年1組 数学科

4章 平行と合同
「平行線と角」

2年2組 道徳科

B-(6) 思いやり、感謝
「夜のくだもの屋」

2年3組 学級活動

学級活動 (3) -ウ
「私のキャリアプラン」

3年1組 国語科

いにしえの心を受け継ぐ
「君待つと」-万葉・古今・新古今-

3年2組 学級活動

学級活動 (3) -ウ
「主体的な進路の選択と将来設計」

3年3組 家庭科

消費生活・環境
「購入・支払いと
生活情報」

1. 単元名「比例・反比例」

2. 単元目標

- 関数関係・比例・反比例・座標の意味を理解し、表・式・グラフに表す事ができる。（知識及び技能）
- 二つの数量の関係を表・式・グラフを用いて表し、その関係が比例や反比例であることを理解した上で、数量の変化や対応について多面的に考察し、特徴を見いだすことができる。（思考力、判断力、表現力等）
- 日常の事象を比例・反比例とみなして考えることの意義を理解し、数量の関係に主体的に着目しながら、問題解決に意欲的に取り組もうとする姿勢をもつ。（学びに向かう力、人間性等）

3. 本単元における川崎中 OSR の視点

Outlook（見通し）	Support（支援）	Reflection（振り返り）
・単元を貫く問いを一次の1時間目に設定し、単元の目標を明確にする。 ・単元内で得る知識（比例・反比例の式、グラフの特徴）をまとめるためのプリントを単元の導入時に配布する。 ・前時や既習事項との違いを明確にする。	・主体的に学習に取り組むために、学習形態（個人で、ペア・グループで、教師と）を自己決定する。 ・学習した内容を級友と交流し、自分の考えを数学的な表現を用いて付加修正できるように、ICT 機器を効果的に活用する。	・毎時間の振り返りで、既習事項とのつながりや新たに分かったことなどを振り返り、次時に行う内容をつかむ。 ・単元末に単元全体の振り返りを行い、単元目標を達成できたかどうかの自己評価をする。

4. 単元指導計画

次	時間	学習活動	評価の観点	評価規準〔評価方法〕
一	1	・身のまわりの問題を関数の考えを利用して解決する。	主	具体的に時間がどれだけかかるかを計算で求めようとしている。〔様相観察〕
	1	・ともなって変わる 2 つの数量の間の関係について考える。	知	関数の意味及び変域の意味と表し方を理解し、変域を不等号を使って表すことができる。〔学習プリント〕
	1	・比例・反比例の問題を表を作成し、式で表す。	知	比例・反比例の意味を理解し、比例・反比例の関係を式に表すことができる。〔学習プリント〕
二	1	・ x の変域や比例定数を負の数にひろげて比例の関係を表や式で表す。	知	数の範囲を負の数にひろげても比例の性質が成り立つことを理解し、比例の式を求めることができる。〔授業支援ソフト提出物〕
	1	・作成した表から座標平面上に点をうちグラフをかく。	知	変域を負の数にひろげた比例のグラフを書くことができる。〔学習プリント〕
	1	・比例のグラフの変化の特徴を、負の数にまでひろげて考えてグラフをかく。	知	比例のグラフの変化の特徴を理解し、その特徴をもとにグラフをかくことができる。〔学習プリント〕
	1	・比例の表・式・グラフを見比べ比例定数について考える。	思	比例の表・式・グラフを関連付けて理解し、特徴を見いだすことができる。〔学習プリント〕
三	1	・ x の変域や比例定数を負の数にひろげて反比例の関係を表や式で表す	知	数の範囲を負の数にひろげても反比例の性質が成り立つことを理解し、反比例の式を求めることができる。〔授業支援ソフト提出物〕
	1	・作成した表から座標平面上に点をうちグラフをかく。	知	変域を負の数にひろげた反比例のグラフを書くことができる。〔学習プリント〕
	1	・反比例のグラフの変化の特徴を、負の数にまでひろげて考えてグラフをかく。	知	反比例のグラフの変化の特徴を理解し、その特徴をもとにグラフをかくことができる。〔学習プリント〕
	1	・反比例の表・式・グラフを見比べ比例定数について考える。	思	比例の表・式・グラフを関連付けて理解し、特徴を見いだすことができる。〔学習プリント〕
四	1	・導入で考えた身のまわりの問題を、表・式・グラフで表し、考える。	思	日常の問題を比例・反比例とみなして捉え、表・式・グラフを用いて状況を予測し説明することができる。〔学習プリント〕
	1	・導入で扱った問題の発展的な内容について、表・式・グラフで表す。	思	表・式・グラフを用いて数量の関係を的確に表し、自分の考えを根拠をもとに説明することができる。〔学習プリント〕
	1	・章の問題を解く。	知思	

5. 本時 令和7年 11月5日 水曜日 第5校時 1年1組教室に於いて

(1) 主眼 並んでいる人数と時間の問題を表・式・グラフのいずれかを自己選択して解決し、その考えを交流する活動を通してどちらの売り場を選ぶべきかを数学的な表現を用いて説明することができる。

(2) 準備 授業プリント、電子黒板、生徒用タブレット端末

(3) 展開

過程	学習活動	指導上の留意点◇評価規準【観点】	形態	配時
導入	1. 本時の学習内容を確認する。 (1)既習事項を振り返る。 (2)本時の課題を確認する。 【課題】ひなのさんは遊園地で遊んだあと、15:30 発のバスに乗らなければなりません。現在の時刻は 15:10 で、バス停までは徒歩で 5 分かかります。帰りにポップコーンを買ってから帰ろうと思っていますが、売り場には行列ができており、バスに間に合うかどうか分からず、並ぶか迷っています。ひなのさんが列に並ぶとき、前に並んでいる人数は最大で何人までなら、並んで買ってもバスに間に合いますか？ 売り場の情報：1 人あたり 55 秒かかる (3)本時のめあてを確認する。 めあて 行列に並んでいるのが何人までだとポップコーンを買うことができるかを表・式・グラフを使って説明しよう。	○ 生徒が意欲的に問題に取り組めるように、単元の導入で行った授業プリントで単元を貫く問いを確認する。(Outlook) ○ 見通しをもつことができるように、カードを使って既習事項を確認する。	全体	5
	2. どちらの売り場を選ぶべきかを色々な方法で求める。 (1)表・式・グラフのいずれかを活用し、どちらの売り場を選ぶべきかを考える。 (2)考えたことをもとに、相手に伝わるように説明文をつくる。 3. 解法を比較する。 (1)他者の解法を見て、自分の考えを付加、修正、深化する。 (2)異なる方法で解いた相手と考えを交流し、自分も別の方法で考え直してみる。 4. 評価問題を解く。 【評価課題】 かなさんは遊園地で遊んだあと、16:00 発の特急列車に乗らなければなりません。現在の時刻は 15:50 で、駅までは徒歩で 6 分かかります。出口付近に人気キャラクターとの写真撮影コーナーがあり、かなさんは記念に写真を撮ろうか迷っています。撮影は 1 組ずつ行われ、1 組あたり 45 秒かかります。すでに何組か並んでおり、列に並んだ場合に列車に間に合うかどうか心配です。かなさんが列に並ぶとき、前に並んでいる組数は最大で何組までなら、写真を撮って列車に間に合うでしょうか。	○ 生徒が考えを持つことができるように、解法に使用するカードを授業支援ソフトを使って配布し、自分が取り組む解き方を自己選択する場面を設定する。(Support) ○ 解法を比較しやすくするために、授業支援ソフトの共有機能を使って他者の考えに触れさせる。 ○ 互いの考えを理解し、自分の考えを付加、修正、深化することができるように、交流場面を設定する。(Support) ◇ 行列に並んでいるのが何組までだと写真を撮って列車に間に合うことができるかを表・式・グラフを使って説明することができる。【思考力・判断力・表現力】	個人 個人 個人 ↓ 自己選択	15 15 5
終末	5. 本時のまとめをする。 まとめ 表・式・グラフを用いることで、前に並んでいる人数は最大で何人までなら並んで買ってもバスに間に合うかを判断し、説明することができる。		全体	5
	6. 本時の振り返りをする。	○ 考えの変容や、わかったこと・難しかったことなどを確認するため、振り返りを行う場を設定する。(Reflection)	個人	5

1. 単元名「アフリカ州」

2. 単元目標

- アフリカ州に暮らす人々の生活を基に、アフリカ州の地域的特色を大観し理解することができる。

(知識及び技能)

- アフリカ州が抱える諸問題の要因や影響を、地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、解決に向けた自分の考えや意見を表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- アフリカ州について、持続可能な社会の実現を視野に、そこで見られる課題や原因、対策などを主体的に追究しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

3. 本単元における川崎中 OSR の視点

Outlook (見通し)	Support (支援)	Reflection (振り返り)
・アフリカ州の単元の問いを追究するために何を学習するか明確にし、見通しをもつことができるように、各自で学習計画を立てる時間を設ける。 ・本時のめあてを生徒が設定することができるように、アフリカ州の各課題についての前時までの学習状況を振り返る時間を設ける。 ・本時での学習を進めるために、どのような方法で調べるのか確認する。	・学習の自己調整をできるように、追究の視点や資料の難易度によって学習形態を選択する場面を設定する。 ・学習中は、教科書等以外にもアフリカ地域の統計資料や映像資料等を活用できるように ICT 機材を準備する。 ・アフリカ州について調べた内容を級友と交流する際、地理的な見方・考え方が働くように、川崎中学校の交流のスキルをアレンジする。	・学習の振り返りでは、SDGs の視点に沿って、アフリカでみられる事象や地域的特色について振り返る場面を設定する。 ・アフリカ州の単元の問いを追究するために、次時の学習で学ぶ内容を確認する。

4. 単元指導計画 (5 時間)

次	時間	学習活動	評価の観点	評価規準 [評価方法]
一	1	・アフリカ州に関する資料から、アフリカのイメージを話しあう。 ・アフリカ州に関する課題をもとに学習計画を作成する。 【生徒への課題】 ①食料 ②モノカルチャー経済 ③生活・医療 ④工業 ⑤植民地支配 ⑥紛争 ⑦自然環境	主	資料から気づいたことをもとにアフリカ州の課題の要因や影響を予想しようとしている。[様相観察]
単元の問い：アフリカの課題を追求し、SDGs について考えよう！！				
二	2	・学習計画に沿って、アフリカ州に関する課題について自ら選択して調べる。 【生徒への課題】 ①食料 ②モノカルチャー経済 ③生活・医療 ④工業 ⑤植民地支配 ⑥紛争 ⑦自然環境	知	生徒が設定しためあてに沿って、アフリカの現状や課題について、それぞれの課題の要因や影響に必要なキーワードを使ってまとめている。[学習プリント]
三	1	・調べた内容を班で交流し、アフリカの課題について考察する。 ・自分が調べた課題と班員が調べた課題を比較し、ランキング付けをする。	思	これまで学習した内容とアフリカの課題の関係について班で話し合い、考えや理解を深め、比較し、順位付けることができる。[学習プリント]
四	1	課題発表をもとに、アフリカの SDGs について考える。	思	これまで学習した内容を SDGs に関連させながらまとめることができる。[学習プリント]

5. 本時 令和7年 11月5日 水曜日 第5校時 1年2組教室に於いて

(1) 主眼 アフリカ州の現状や課題について調べる活動を通して、それぞれの課題の要因や影響について必要なキーワードを使ってまとめることができる。

(2) 準備 学習プリント 電子黒板 生徒用タブレット端末（資料や映像等） 教科書 ノート

(3) 展開

過程	学習活動	指導上の留意点◇評価規準【観点】	形態	配時
導入	1 前時に学習した内容を振り返る。 2 学習計画をもとに、個人ごとの本時のめあてを確認する。	○ 生徒が本時の学習をスムーズに進めることができるように、学習計画や学習の進捗を確認する時間を設定する。 ○ 学習の見通しをもつことができるように、アフリカ州の課題に対して、今日の学習で何を調べるのか、どのような方法で調べるのか班で確認する場を設定する。(Outlook)	全体 ↓ 個	5
	めあて 生徒が設定する。 めあての例：アフリカ州の食料問題の原因について調べる。など			
展開	3 各班それぞれのアフリカ州の各課題について調べる。 アフリカの課題 ① 食料 ⑤ 工業 ② モノカルチャー経済 ⑥ 植民地支配 ③ 生活・医療 ⑦ 紛争 ④ 自然環境 (※ 項目から2～3つ調べる)	○ 主体的に学習に取り組むことができるように、生徒が1人で学習に取り組むか、ペアやグループ、教師と学習に取り組むのか選択する。 ○ 前時の学習内容と比較したり、関連付けたりできるように、前時で調べた内容についての必須キーワードを各班に配布する。(Support) ○ 個々の生徒が自分の特性に合った学習を進めていけるように、クラウド上で見ることができる資料や映像資料等を準備する。また、調べ学習中は、机間指導をしながら、アフリカ州の課題と調べたことの関連付けを促す発問によって支援をする。(Support)	自己 選択	35
終末	4 本時の学習についてまとめ、ふり返しを行う。 5 個人でふり返しを行い、次時の学習内容を確認する。	○ 学習内容を要約しながら言語化できるように、本時で学習した内容についてキーワードを挙げるよう促す。(Reflection) ◇ アフリカ州の課題の要因や影響について必要なキーワードを使ってまとめることができる。(学習プリントより) ○ 次時の学習につなげるために班で確認を行う場を設定する。(Outlook) ○ 自分の学習の深まりを実感するとともに、次時学習の見通しをもつことができるように、振り返りの視点を提示する。(Reflection)	自己 選択 ↓ 個人	10

1. 単元名 Unit 7 An Online Tour of the U.K. (NEW HORIZON English course)

2. 単元目標

- 現在進行形を用いた文や感嘆文の理解をもとに、人が今、していることについて話したり、感動や驚きの気持ちを伝えたりする技能を身につけることができる。(知識及び技能)
- 川崎町に住む外国の人に学校や町のよりよい雰囲気を知ってもらうために、生活の一場面で行っていることや感動の気持ちを写真や動画を通して、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や表現を用いて表現することができる。(思考力、判断力、表現力)
- 川崎町民に学校や町の雰囲気を知ってもらうために、生活の一場面で行っていることや感動や驚きの気持ちを、写真や動画で撮影したものを、相手に伝わるように事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、正しい表現や発音になるように練習し、簡単な語句や表現を用いてまとまりのある内容を話そうとしている。(学びに向かう力、人間性等)

3. 単元における川崎中 OSR の視点

Outlook (見通し)	Support (支援)	Reflection (振り返り)
- 単元のゴール(目的:川崎町に住む外国の人に町や学校について知ってもらう、場面:英語の授業、状況:動画の撮影) 単元導入時に単元全体の学習計画表を提示し、各時間の学習内容・目標を明示する。 - 現在進行形と現在形の違いを考える場を設定する。	- 主体的に学習に取り組むために、実況文や動画を作る時は、学習形態(個人で、ペア・グループで、教師と)を自己決定する場を設定する。 - 学びが止まらないように、授業支援ソフトの資料箱に現在進行形を使ったヒントや評価ごとに分けた参考資料、動画などを準備する。	- 分からないことや大事なことを共有させるために、毎時間授業の最後に振り返りを記入し、共有ノートに書く時間を設定する。 - 現在進行形を使った表現をすることができたという達成感を感じられるように、単元の振り返りで、できるようになったこと・分からなかったこと・もっと調べたいと思ったことなど自己評価する場を設定する。

4. 単元指導計画

次	時間	学習活動	評価の観点	評価規準 [評価方法]
一次	1	単元計画や課題をつかみ、学習の見通しをもつ。川崎町(学校)を紹介するために必要なことを考える。現在形と現在進行形の違いを考え、説明する。	主	現在形と現在進行形の文を見比べて、違いを見つけようとしている。[様相観察]
	1	現在進行形の肯定文を理解し、動画の一部のジェスチャーゲームをする。	知	今していることを伝え合うために、現在の動作について説明することができる。[学習プリント]
	1	現在進行形の否定文・疑問文を理解し、動画の一部の内容で、相手のしていることを尋ね合う。	知	相手が何をしているかを知るために、現在の動作についてたずねたり答えたりすることができる。[学習プリント]
	1	感嘆文を理解し、町や学校のすごいところを表現する。 例 What a wonderful town!	知	町や学校のすごいところを相手に伝えるために、感嘆文を使って驚いたことを書くことができる。[学習プリント]
二次	1	選択した動画・写真を元に文章を書く。 例 They are eating rice ball. Wow. I can't do that.	思	相手に分かりやすく、画像や動画を説明するための文章を書くことができる。[学習支援ソフト提出物]
	1	書いた文章を元に動画を作成する。	思	相手にわかりやすく伝えるために、イントネーションに気をつけて録音することができる。[学習支援ソフト提出]
	本時	相手に伝わるように書いた内容を加筆・訂正する。 本文の内容や友だちの意見を参考にする。	思	自分の表現で解決したい場所を自己選択し、改善することができる。[学習支援ソフト提出]
	1	動画もしくは画像を見ながら、録画する。	思	川崎町や学校について、現在進行形を使って、事実や自分の営み、気持ちなどを話すことができる。[学習支援ソフト提出]

(1) 主眼 川崎町に住む外国人の人たちに川崎町や川崎中学校を知ってもらうために、発音や内容など改善する活動を通して、現在進行形や感嘆文を用いて、より相手に明確に動画や写真の説明することができるようにする。

(3) 展開

-64-

1. 単元名「平行と合同」

2. 単元目標

- 平行線と角の関係や様々な角の性質を使って、角の大きさを求めることができる。(知識及び技能)
- 基本的な図形の性質を見だし、平行線や角の性質をもとにしてそれらを確認説明できる。
(思考力、判断力、表現力)
- 図形の性質や合同を証明する事の良さを実感して粘り強く考え、解決の過程を振り返って評価・改善しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

3. 本単元における川崎中 OSR の視点

Outlook (見通し)	Support (支援)	Reflection (振り返り)
・「平行と合同」の単元を貫く問いを一次の1時間目に設定し、単元の目標を明確にする。 ・その時間の課題からめあてを生徒と共に考え、その時間の目標を共通認識し明確にする。	・主体的に学習に取り組むために、学習形態(個人で、ペア・グループで、教員と)を自己決定する。 ・学習した内容を交流し、自分の考えを付加修正できるように、ICT機器を活用する。	・単元全時間の振り返りをシートにまとめ、次の時間の内容をつかむ。 ・その時間に学習した角の性質や合同条件を授業支援ソフトでまとめ、単元を貫く問いの解決に向けたサポートカードを作っていく。

4. 単元指導計画

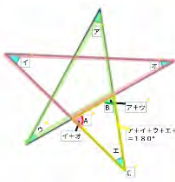
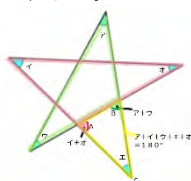
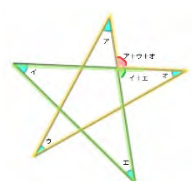
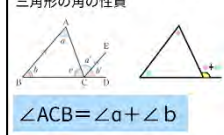
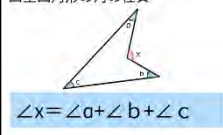
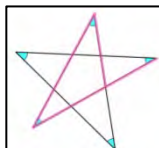
次	時間	学習活動	評価の観点	評価規準 [評価方法]
一	1	・星型五角形の5つの角度の和が 180° であることを確かめる。	主	具体的に図形を操作して、予想が正しいことを確かめようとしている。[様相観察]
	1	・多角形の内角の和について、外角や三角形の和など様々な方法で考え、説明する。	思	外角と内角について理解し、多角形の内角の和の求め方を説明することができる。[授業支援ソフト]
二	1	・三角形の内角の和を利用し、角の性質について考える。	知	対頂角の性質を利用して、角の大きさを求めることができる。[授業支援ソフト]
	1	・平行線と角の関係から、平行線の性質について考える。	知	平行線と角の関係を理解し、錯角や同位角を求めることができる。[授業支援ソフト]
	1	・内角、外角の性質をもとに角の大きさを求める。	知	内角の和や外角の性質を利用して、角を求めることができる。[授業支援ソフト]
	1	・サポートカードを整理し、様々な場合の角の大きさの求め方(補助線等)を考える。	知	補助線などの工夫をして、角の大きさを求めることができる。[授業支援ソフト]
	1	・凹型四角形の角の特性を説明する。	思	凹型四角形の角の法則を、図形を用いて説明できる。[授業支援ソフト]
	1	・星型五角形の5つの角度の和が 180° になることを説明する。	思	星型七角形の角の法則を、既習事項を基に説明することができる。[授業支援ソフト]
三	1	・図形の合同について考え、調べる。	思	合同な図形を見つけ、合同な図形がどのようなものか説明できる。[授業支援ソフト]
	1	・三角形の合同条件について考える。	知	合同条件を理解し、サポートカードを作ることができる。[授業支援ソフト]
	1	・合同な図形を見つけ、合同条件を使って説明する。	思	合同な図形を見つけ、その図形に合う合同条件を指摘できる。[授業支援ソフト]
	1	・仮定と結論の意味を理解し、証明の進め方を考える。	主	合同を証明する上での仮定と結論を理解し、合同な図形に合わせて仮定と結論を説明できる。[授業支援ソフト]
	1	・根拠を明らかにし、図形の性質を証明する。	知	合同となる根拠を、角の性質などを利用し説明することができる。[授業支援ソフト]
	1	・既習事項を活用し、合同な図形の証明をする。	主思	サポートカードを活用し、合同な図形の証明ができる。[授業支援ソフト]

5. 本時 令和7年 11月5日 水曜日 第5校時 2年1組教室に於いて

(1) 主眼 星型五角形の5つの角の和が 180° であることについて、サポートカードや共有機能をもとに考え、互いに説明する活動を通して、既習の図形の性質等根拠を明確にして説明することができる。

(2) 準備 授業プリント、電子黒板、生徒用タブレット端末

(3) 展開

過程	学習活動	指導上の留意点◇評価規準【観点】	形態	配時
導入	1. 本時の学習内容について話し合う。 (1) 前時学習内容を想起する。 (2) 本時のめあてについて話し合う。 めあて 星型五角形の5つの角の和が180°になることを、学習したことを使って説明しよう。	○ 本時学習のめあてをつかむことができるように、単元の導入で行った授業を振り返る (Outlook)	全体	5
展開	2. 星型五角形の5つの角度の和が180°になることを色々な方法で説明する。 (1) どのように 180° であることを説明するか証明の方針を立てる。 ・180° は「三角形の内角の和」か「一直線の角」のどちらかで言えるよね。 ・私は「くさび形に着目したSCと三角形と見たSCを組み合わせて外角の位置が一直線になること」で証明していこう。※SC=サポートカード (2) 確かめた方法を説明文にする。  【使ったカード ①と⑦】 説明 三角形ABCにおいて 三角形の角の性質より $\angle B = \angle A + \angle U$ $\angle A = \angle E + \angle O$ となる。 よって三角形ABCの内角の和は $\angle A + \angle E + \angle U + \angle E + \angle O$ となる 三角形の内角の和は180°なので、 $\angle A + \angle E + \angle U + \angle E + \angle O = 180^\circ$である。 3. 解法を比較し、それぞれの解法のプロセスの相違点について話し合う。 ・他者の解法を見て、自分の考えを付加、修正、深化する。   三角形の内角の和を用いるパターン 一直線の角度を用いるパターン	○ 証明の根拠を見つけることができるように、学びの足跡カードを活用する。(Support) ⑧ 三角形の角の性質 【見本】  $\angle ACB = \angle a + \angle b$ ⑨ 凹型四角形の角の性質 【見本】  $\angle x = \angle a + \angle b + \angle c$ ○ 進んでいない生徒がきっかけをつかむために、考えの手掛かりとなるサポートカードを用意する。(Support)   ○ 学習調整力を働かせるために、学ぶ相手を自己選択できるようにする。 ○ 交流の際に自分と同じ方法で説明しようとしている生徒を見つけることができるように、使用したサポートカードの番号を示すよう伝える。(Support) ○ 自分の解法と友達の解法を比較しやすくするために、授業支援ソフトの共有機能を使う。 ○ 互いの考えを理解し、自分の考えを付加、修正、深化するために、交流の時間を設定する。(Support)	自己選択	15
		○ 学習調整力を働かせるために、学ぶ相手を自己選択できるようにする。 ○ 交流の際に自分と同じ方法で説明しようとしている生徒を見つけることができるように、使用したサポートカードの番号を示すよう伝える。(Support) ○ 自分の解法と友達の解法を比較しやすくするために、授業支援ソフトの共有機能を使う。 ○ 互いの考えを理解し、自分の考えを付加、修正、深化するために、交流の時間を設定する。(Support)	個人 ↓ 自己選択	15
終末	4. 本時のまとめをする。 ・本時の学習した内容を自分の言葉でまとめる。 まとめ (例)図形の性質を利用することで、星型五角形の角度の和を色々な方法で説明することができる。 5. 本時の振り返りをする。	◇既習の図形の性質等根拠を明確にして説明することができる。【思考・判断・表現】 ○ 今後の課題等を整理するために、振り返る時間を設け、分かったことや考えたことをまとめる。(Reflection)	全体	10
		○ 今後の課題等を整理するために、振り返る時間を設け、分かったことや考えたことをまとめる。(Reflection)	個人	5

1 主題名 思いやりと感謝 内容項目 B(6)思いやり、感謝

2 教材名 「夜のくだもの屋」

3 ねらい

くだもの屋のお婆さんのさりげない思いやりにつれた主人公の気づきや心の変化を通して、人間は他者の善意や深い思いやりによって支えられていること、そしてそれらに気づくことや素直に感謝の気持ちを伝えることの難しさを自覚し、お互いを尊重し合う思いやりと感謝の心を大事にする心情と実践意欲を育む。

4 主題設定の理由

- AI の技術革新や社会の発展に伴い、私たちの生活は急速に豊かに、便利になっている。その一方で、地域の互助的な関わりが薄れたり、人と人がつながりあって生活していることが実感しにくくなったりしている。私たちは、多くの人の様々な思いやりや善意、支えによって生活できているが、その関係を支えているのは、互いの感謝の心である。さりげない、自分に対する思いやりの温かさに気づき、感謝の気持ちをもったりあらわしたりすることは、相手を気遣い、支えようとする思いやりの態度につながる。多様な人々が生活するこの社会において、思いやりと感謝、その感謝から生まれる思いやりの心が求められている。
- 指導にあたっては、くだもの屋のお婆さんが少女に対して行った思いやりが決してわかりやすいものではなく、さりげない思いやりであることに気づくことができるようにするため、「少女がくだもの屋の前をどのくらい通り過ぎてから明かりを消したか」と問いかけ、紙人形を使って実演する場を設定する。少女が暗い夜道を安心して帰れるようにするための温かな思いやりであることに気づくことができるようにするとともに、少女がこのさりげない思いやりに気づくことは難しかったであろうことへの気づきを促す。そのうえで、お婆さんの思いやりにつれた少女の生き方や考え方に変化があったか問いかけ、自分に向けられた善意に気づき感謝し、自分自身も誰かを支える思いやりをもとうとする主人公の姿に注目する。自分との関わりで道徳的価値をとらえる段階においては、自分がこれまでに気づけなかった善意や思いやりがあったのではないかということに思いをめぐらせることで、自分を支えてくれている存在に気づこうとする態度や積極的に感謝の思いを伝えたり自分もそういった関わりをもとうとしたりする意欲につなげたい。

5 教材における川崎中 OSR の視点

Outlook（見通し）	Support（支援）	Reflection（振り返り）
・ 思いやりと感謝について考えていく見通しがもてるよう、教師の「さりげない思いやりを受けたエピソード」を話し、「思いやりは相手に伝わらないと意味がないのでは？」と問い掛ける。	・ 少女が抱いた感謝や思いやりをもとうとする気持ちに目を向けることができるよう、お婆さんの思いやりにつれた少女の生き方や考え方の変化について、「ある」「ない」という二択を提示する。 ・ 個人内対話、他者との対話を選択できるようにする。自分の考えを深めたり新たな気づきを得たりできるよう、授業支援ソフトで考えを共有する。	・ 思い返してみると自分に対する思いやりだったのではないかという経験を想起することで、思いやりと感謝について大切だと思うことをまとめる時間をとる。

6 本時 令和7年度11月5日 水曜日 第5校時 2年2組教室に於いて

(1) 準備書、ワークシート、タブレット、電子黒板、場面絵、紙人形

(2) 展開

過程	学習活動・内容	主な発問と予想される生徒の反応	指導上の留意点	形態	配時
導入	1 教師のエピソードを聞き、「それは相手の思いやりか否か」考える。	さりげない思いやりであったが故に感謝の気持ちを伝えにくかったというエピソード ・さりげない思いやりだ ・たまたまだろうし、思いやりだとしてもわかりにくい	○思いやりのあり方とそれに対する感謝の気持ちについて考えていく見通しをもてるよう、「思いやりは相手にそうと伝わらなければ意味がないのでは？」と投げかける。 (Outlook/見通し)	全	5
展開前段	2 教材の範読を聞き、登場人物とその設定を把握する。	少女…合唱部の練習で帰りが遅い。くだもの屋の明かりに助けられている。 くだもの屋…店じまいが早いはずなのに遅くまで少女のために明かりをつけていた。		全	10
	3 くだもの屋のおばさんが明かりを消すタイミングを班ごとに実演する。	少女がくだもの屋の前をどのくらい通り過ぎてから明かりを消したのだろうか。そう考えるのはなぜか。 ・完全に通り過ぎたあと ・少女の姿が見えなくなってから *急に明かりが消えたら驚く *少女が気まずく思わなくていいように、気づかないようにしていたことだから	○おばさんの行動の意味を想像しやすくするため、実演する場を設定する。 ○(迫)「電気を消すのがもっと遅い班はないか」と問う。 ○(補)「気づかれなくてもしていた」ことを悟った少女の感動に気付けるように、「この思いやりに気づくことは簡単だろうか」と問う。 (Support/支援)	班 ↓ 全	10
	4 おばさんの思いやりにつれた少女の変化について考える。	「少女はもういちど頭をさげた」とあるが、おばさんの思いやりにつれた少女の生き方や考え方に変化はあっただろうか ある ・気づかれなくても誰かのためになる行動をしたい ・周りへの感謝の気持ちをもちたい ない ・感謝の気持ちでくだものを買いに来ている。その気持ちをこれからももち続ける	○自分の考えを深められるよう、個人内対話、他者との対話を選択したり、授業支援ソフトで「ある」「ない」で色分けしたカードを用い、考えを共有したりする場を設ける (Support/支援) ○「変化」には「深まり」も含むことを確認し、少女が覚えた深い感動に迫るよう促す。	自由 ↓ 全	15
	5 自分の経験をふり返り、思いやりと感謝について大切にしたいことを考える。	「自分に対する思いやりだったのではないか」という経験はないか。この感謝の気持ちをどこに(何に)つなげたいか。 ・自分を支えてくれている存在に気づいて感謝の気持ちをもちたい。 ・自分もどんな相手でも大切にしたい気持ちで思いやりの気持ちをもちたい。	○自分の経験を振り返り、素直に感謝の気持ちを表すことの大切さに気づき、お互いを尊重し合う思いやりと感謝の心をもとうとする意欲につなげたい。 (Reflection/ふり返り)	全 ↓ 個	8
終末	6 授業の感想を書く。	「これまで」と「これから」の自分について、思いやりや感謝について気づいたことをまとめる。	○自分の考えの変容に気づくことができるように、感想を書く時間を設定する。		2

1. 単元名 学級活動(3)ウ「私のキャリアプラン」

2. 単元目標

- 将来の社会的・職業的な自立と現在の学習とのつながりを理解し、自己の生活をよりよくするために個性を生かす方法を身につけることができる。(知識及び技能)
- 集団の中で、個々人が共通して直面する現在及び将来に関わる課題を発見するとともに、必要な情報を収集・整理して考察し、解決に向けて意思決定することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- 日常生活や自己の在り方を自主的に改善するとともに、将来を思い描き、自分らしい生き方を主体的に選択しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

3. 単元における川崎中 OSR の視点

Outlook (見通し)	Support (支援)	Reflection (振り返り)
・将来の社会、職業生活や現在の自己の目標について見通しをもつことができるように、「私のキャリアプランシート」を提示し、「〇歳の私」と「中学生の今、身につけたい能力」を書く活動を設定する。 ・将来の社会、職業生活を見通した上で、現在の自己の課題を見いだすことができるように、アンケートを実施する。	・生徒が自己の興味、関心や適性について考えを広げたり、深めたりすることができるように、今身につけたい能力についてのキーワードを提示した上で、授業支援ソフトの共有機能を活用したり、学習形態を自己選択できるようにしたりする。 ・安心して意見交流ができるために、交流のスキルの提示をする。	・実践したい具体的な行動について意思決定することができるように、次回の朝学活までに取り組みたいことを書く活動を設定する。 ・考えの変容を自覚することができるように、友達との交流を通して、自分の考えが変わったり深まったりしたことを確認する。

4. 単元指導計画

次	時間	学習活動	評価の観点	評価規準 [評価方法]
事前1	朝学活	「自分自身の将来に関するアンケート」の実施		
事前2	朝学活	「私のキャリアプランシート」の「〇歳の私」を作成	主	将来の自分について主体的に考えている。 [ワークシート]
本時	1	「私のキャリアプランシート」の「中学生の今、身につけたい能力」を作成	思 判 表	今身につけたい能力について考察し具体的な行動の意思決定をしている。[ワークシート]
事後	朝学活	達成度合いの振り返りの実施	思 判 表	・意思決定した内容を振り返り、付加・修正している。[ワークシート] [様相観察]

5. 本時 令和7年度 11月5日 水曜日 第5校時 2年3組教室に於いて

- (1) 主眼 自己の興味、関心や適性、今身につけたい能力について、自他の考えを交流する活動を通して、将来の社会、職業生活を見通した上で実践したい具体的な行動について意思決定することができるようにする。
- (2) 準備 【生徒】タブレット 【教員】デジタル黒板、タブレット、プレゼンテーション資料、

(3) 展開

令和7年 11月5日 水曜日 第5校時 2年3組教室
【課題】将来に向けて、今（中学生）の私が身につけたい能力を考え、その達成に向けた取組を決定する活動が必要である。 【めあて】「私のキャリアプランシートをつくろう！」 【めあての設定理由】将来の夢や目標に対してまだ見通しがもてていない生徒が多い状況がある。最上級学年になることやキャリア教育、進路学習に取り組んでいる状況の中で、将来の夢や目標を設定し、それに向かって自分が身につけたい能力の獲得を目指して中学校生活を送ることが重要である。そこで、将来の理想とする私に向けて、今（中学生）の私が身につけたい能力を考え、そのためにどのような行動をとるべきか行動目標を決める。

過程	学習活動・内容	指導上の留意点◇評価規準【観点】（方法）	形態	配時
導入	1 前時の振り返り ・前時に作成した「私のキャリアプランシート」の「〇歳の私」を発表する。 2 めあてを設定する めあて 「私のキャリアプランシートをつくろう！」	・将来に向けて、今（中学生）の私が身につけたい能力を考える意欲を高めるために、「私のキャリアプランシート」の「〇歳の私」を発表し、自分や友達の課題を共有する。【Outlook】	一斉	5分
	3 「私のキャリアプランシート」の「中学生の今、身につけたい能力」を考える。 ・学習形態を選択する。 一人で考える、ペア・グループで考える 教師と考える 黒板 教師と エリア ひとりで エリア ペア・グループで エリア	・今身につけたい能力について焦点が絞れるよう、キーワードをカードにして用意する。【Support】 例：礼儀、チャレンジ精神、コミュニケーション力、責任感、気配り、行動力、積極性、基礎学力、忍耐力、リーダーシップ、判断力、協調性、素直、規範意識、思いやり、探究心、対応力 ・生徒が自分の考えをつくるために、自ら選択する学習形態で行う。【Support】 ・孤独な学びにならないようにするために机間指導をする。【Support】	個人 ペア ・ グループ	20分
展開	4 授業支援ソフトで提出する。 5 班で交流する。 ・授業支援ソフトの共有機能を使用する。 6 個人で再考し、仕上げる。	・生徒が考えを広げたり、深めたりするために、授業支援ソフトの共有機能を使う。【Support】 ・安心して意見交流ができるために、交流のスキルの提示をする。【Support】 ◇今身につけたい能力について考察し具体的な行動の意思決定をしている【思考、判断、表現】		10分 8分
	7 本時の振り返りを行う。 ・友達からアドバイスをもらったり、交流したりすることで、お互いの考えを知り、自分の考えが変わったり深まったりしたことを確認する。	・実践意欲を高めるために、自分がなりたい姿や身につけたい能力、そのために今何をするかについて振り返り、すぐに実践していくことを確認する。【Reflection】 ・自分自身の変容や成長を確認するために、定期的に振り返りをする。【Reflection】	一斉	7分

1. 単元名 いにしえの心を受け継ぐ 「君待つと」万葉・古今・新古今

2. 単元目標 「川崎中和歌集をつくろう ～ お気に入りの和歌を選んでそのよさを説明しよう。」

○ 長く親しまれている言葉や古典の一節を理解して、引用して使うことができる。(知識及び技能)

○ 和歌の表現の仕方の効果について根拠をもとに判断し、その意味を考えることができる。

(思考力、判断力、表現力)

○ 和歌の見方・考え方などその特徴を進んで捉え、根拠を明確にして考えを伝え合おうとする。

(学びに向かう力、人間性等)

3. 本単元における川崎中 OSR の視点

Outlook (見通し)	Support (支援)	Reflection (振り返り)
・学習内容から、「学習計画表」を作成し、「何を学ぶのか」を明確にして目標を設定する時間を設ける。 ・「学習計画表」をもとに前時の学習内容を振り返り、毎時間の学習の見通しをもち、めあての達成につなげる。	・ICT 機器(タブレット)を活用して、和歌の意味や背景、表現技法などについて自分で調べられるようにする。 ・学習で得た知識を整理することで、次の学習に利用する場を設定する。 ・授業支援ソフトからヒントをそれぞれ取り出せるようにして、思考の支援を行う。	・「学習計画表」でこの学習で「何を学んだのか」「次に何をするのか」等を確認する場を設定する。 ・自分が何をできるようになったかを客観的に判断する自己評価を行う場を設ける。

4. 単元指導計画 (9 時間)

次	時間	学習活動	評価の観点	評価規準 [評価方法]
一	1	・単元目標を達成するために必要な学習計画と各自の学習目標を立てる。	主	必要な学習について考え、計画を立て、自分の学習目標を主体的に設定することができる。
	1	・「和歌の世界」「古今和歌集仮名序」を読み、三歌集の特徴や歴史的背景を捉える。	知	三歌集の特徴や歴史的背景を理解し、まとめることができる。
二	2	・三歌集の和歌の情景や心情、特徴的な表現、効果、歌の意味について理解する。	知	「自然」「幸福」「家族愛」をうたう和歌の情景や心情、特徴的な表現、効果、意味について理解することができる。
	2	・学習した和歌の中から、それぞれの部門のお気に入りの一首を選択して、その和歌のよさを説明する。	思	お互いが選んだ理由を「交流のスキル」を参考に説明し、そのよさを発表して交流できる。
三	1	・三歌集の「恋愛」をうたう和歌の情景や心情、特徴的な表現、効果、歌の意味を調べる。	知	既習事項を参考に、「恋愛」部門の和歌の情景や心情、特徴的な表現、効果、歌の意味を調べることができる。
	1	・前時に調べた内容をもとに、各自が選んだ和歌のよさについて自分の考えをまとめ、交流する。	思	前時に調べた内容をもとに、自分が選んだ和歌の理由をまとめ、交流することができる。最終的な「恋愛」部門の投票を行う。
四	1	・川崎中和歌集を作る。 ・和歌の時代の人と現代人との共通点、相違点を考え、まとめる。 ・単元を通した「振り返り」を行う。	主	三歌集の「自然」「幸福」「家族愛」「恋愛」川崎中各部門第一位の和歌を確認し、歌集を作ることができる。和歌の時代に生きた人々と現代人との共通点、相違点を考え、まとめることができる。単元の振り返りができる。

5. 本時 令和7年 11月5日 水曜日 第5校時 3年1組教室に於いて

(1) 主眼 和歌を選択する活動を通して、その意味、表現の仕方、効果などの根拠に基づいてそのよさを説明することができる。

(2) 準備 電子黒板・生徒用タブレット端末・教科書・ワークシート

(3) 展開

過程	学習活動	指導上の留意点 ◇評価規準【観点】	形態	配時
導入	1. 本時の学習内容を確認する。 (1)「学習計画表」をもとに既習事項をふりかえり、本時の課題を確認する。 (2)本時のめあてを確認する。 めあて 選んだ和歌のよさを根拠に基づいて話し合い、3の1N0・1を決定しよう。	○ 電子黒板を使って「学習計画表」を見直して既習事項をふりかえる。 ○ 本時の課題を確認する。(Outlook)	全	3
展開	2. 選んだ和歌の理由をまとめる。 (1)選んだ和歌の色の付箋に、その理由を入力する。 ・(万葉集)君待つと我が恋ひ居れば～(緑) ・(万葉集)多摩川にさらす手作り(青) ・(古今)思ひつつ寝ればや人の～(ピンク) ・(新古今)玉の緒よ絶えなば絶えね～(黄)	○ 選んだ和歌の根拠を明確にして自分の考えをつくらることができるように、以下の支援を行う。 ○ 学習形態を自己決定する場を設定する。 ○ 交流原稿のサンプルを活用するように促す。 ○ 既習の学習事項をまとめたワークシートやヒントになる和歌中の表現技法を示したカードを「授業支援ソフト」に配信し、生徒の和歌の解釈を確認するようにすすめる。(Support)	自己決定	15
	(2)提出した交流原稿について話し合う。 ①同じ和歌を選んだ生徒と交流する。 ②自分が選んだ和歌以外の生徒と交流する。	○ 自分の根拠を明確にし、よりよい交流原稿にできるように、同じ和歌を選択した生徒と根拠を話し合う。 ○ 誰が何の和歌を選択したか理解するために、自分が選択した和歌以外の生徒と交流する。 ○ 交流後、選んだ和歌の根拠を明確にして自分の考えをつくらることができるように、「授業支援ソフト」に提出した各自の内容を見直してまとめられるように内容を再構築する。		15
	(3)自分の考えを改善する。期待する解答例 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶことの弱りもぞする ○意味 思いを秘めなければならない状況に「命すら捨ててしまえ」と言い放つほど恋心が高まっていることが伝わってくる。 ○表現 「絶えね」という命令形に激しい情熱が現れていると感じた。この歌の強い表現に人間の情熱の深さを感じ、心を打たれた。 ○効果 秘めた恋の切なさや苦しさには、現代人も共感するだろう。	◇ 各自が和歌を選んだ理由をその表現の仕方、効果、意味などを根拠に基づいてそのよさを説明することができる。【思考・判断・表現】	個	7
	(4)3の1N0・1(恋部門)決定のために最終投票する。	○ 交流した作品の中で、各自の視点や考え方の違いを確認して、根拠をきちんとかけている作品を選択する。		4
終末	3. 本時の学習をまとめる。 まとめ(例)和歌のよさを相手に伝えるためには、根拠に基づいてその表現技巧や意味に着目し、説明することが効果的である。		個	6
	4. 本日のふりかえりを行う。 ①はじめは～だったが、～に取り組んだので、～に変化した。 ②～に取り組んだので～ができた。 ③～することができなかった。次に～を行えば、～ができるかもしれない。	○ 自分が何をできるようになったかを客観的に判断する自己評価を行う場を設ける。(Reflection) ○ 生徒の考えの変容や、課題に対する態度を把握するために、「学習計画表」をもとに、この学習で「何を学んだのか」「次に何をするのか」等を確認する場を設定する。		

1. 単元名 学級活動(3)ウ「なりたい自分になるために」

2. 単元目標

- 学ぶことと将来の自分とのつながりを理解し、自己の生活をよりよくするために、個性を生かす方法を身につけることができる。(知識及び技能)
- 集団の中で、個々人が共通して直面する現在及び将来に関わる課題から、必要な情報を整理して考え、解決に向けて意思決定することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- 日常生活や自己の在り方を自主的に改善するとともに、将来を思い描き、自分らしい生き方を主体的に選択しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

3. 単元における川崎中 OSR の視点

Outlook (見通し)	Support (支援)	Reflection (振り返り)
・ 将来に向けて自分の課題を明確にし社会参画につなげていくために、アンケートを実施し、今後の見通しを持つ。 ・ 目標に向けての取組を定めることに一貫性をもてるようにするため、めあてを板書し、いつでも確認できるようにする。	・ 生徒が自分に合った取組シートを選択できるようにするために、2パターンの目標シートを準備する。 ・ 自己決定をしやすいするために、学習形態を選択する機会を与える。「1人で挑戦する」「ペアやグループで挑戦する」「教師と挑戦する」 ・ 相互評価をしやすいために、付箋を配布しアドバイスを記入する。	・ すぐに取り組めるよう、取組を付加・修正し、ワークシートに記入する。 ・ 実践していく意識を高めるために、学級の仲間の意思決定を授業支援ソフトで確認し人間関係形成を図る。 ・ 授業後に取組の進捗状況を確認するために、中間評価や最終評価を朝学活や学活でワークシートに記入し行う。

4. 単元指導計画

次	時間	学習活動	評価の観点	評価規準 [評価方法]
事前	朝学活	(1)進路実現に関するアンケートを実施する。 (2)ワークシートに記入する。	主	卒業後の姿や、将来実現したい目標について考えている。[授業支援ソフト]
本時	11月5日	(1)なりたい自分になるために、目標に対して今できることを話し合い、今後の行動について意思決定する。	思	なりたい自分の姿を見だし、具体的にどんな行動をするか、意思決定することができる。[ワークシート]
事後	11月21日 朝学活 12月9日 学活	(1)取組み1週間の中間評価をする。 (2)取り組んで良かった点や課題点を評価する。	思主	目標を振り返り、付加・修正している。[ワークシート] 目標を振り返ることにより、計画を修正し、これからの見通しをもとうとしている。[様相観察]

5. 本時 令和7年 11月5日 水曜日 第5校時 3年2組教室に於いて

- (1) 主眼 進路実現に向けて自分の将来の夢からなりたい姿を具体的にもち、今からできることについて考えを出し合って話し合ったり、決めたことをさらに班で相互評価したりすることを通して、目標達成に対する具体的な取組を意思決定することができる。
- (2) 準備 ワークシート、電子黒板、付箋、生徒用タブレット端末

(3) 展開

令和7年 11月5日 水曜日 第5校時 3年2組教室

【課題】 やりがいのある人生にするために目標を考え、その達成に向けた取り組みを決定する活動が必要である。

【めあて】 なりたい自分になることを目指し、今できる取組を決めよう。

【めあての設定理由】 3年生が主体となっていく学校行事を終え、進路実現のために進みだす今、夢や目標に向かって最後まで自分を信じて残りの中学校生活を送ることが重要である。そこでなりたい自分や自分の課題について再確認し、なりたい自分になるための取組を考え、相互評価を取り入れる活動を通して、生徒それぞれが目標達成の行動を決める。

過程	学習活動	指導上の留意点◇評価規準【観点】	形態	配時
導入	1. ここまでの学校生活や学校行事を振り返る。 ・中学校生活でできるようになったことや体育会や合唱コンクールの成果を振り返る。 2. 事前活動から本時のめあてを設定する。	○ やりがいのある人生についての見通しをもつために、目標を持って取り組むことの経験を振り返るようにする。 ○ 目標に向けての取組を定めるため、めあてを板書する。【Outlook】	一斉	5
	めあて 「なりたい自分になることを目指し、今できる取組を決めよう。」			
展開	3. なりたい自分になるために今からできることを話し合う。 (1)将来の夢(名詞)をなりたい自分(動詞)で言い換える。 (2)なりたい自分になるために、今からできることを考える。	○ なりたい自分と今できることを視覚的に分かりやすくするために、板書を工夫する。 ○ 具体的ななりたい自分をイメージするために将来の夢(名詞)をなりたい自分(動詞)で表現するようにする。 ○ 具体的な行動について考えるために、今できることを教師と考え、モデルをつくる。また、多様な行動について考え広げるように全体や班で交流する。	一斉	15
	4. 目標シートを作成する。 (1)つくる。	○ 生徒が自分に合った取組シートを選択できるようにするために、2パターンの目標シートを準備する。【Support】	自己決定	15
	(2)交流する。	○ 自己決定をしやすいするために、学習形態を選択する機会を与える。「1人で挑戦する」「ペアやグループで挑戦する」「教師と挑戦する」【Support】 ○ 意思決定したことに自信をもち、実践意欲を高めるために、その人ならではの行動を価値付ける等、相互評価し合う。	班	5
		○ 相互評価をしやすいするために、付箋を配布しアドバイスを入力する。【Support】 ○ すぐに取り組めるよう、取組を付加・修正し、ワークシートに記入する。【Reflection】 ○ 実践していく意識を高めるために、学級の仲間の意思決定を授業支援ソフトの共有機能で確認する。【Reflection】 ◇ なりたい自分の姿を見だし、具体的にどんな行動をするか、意思決定することができる。【思考・判断・表現】[ワークシート]		
終末	5. 本時をまとめる。 (1)振り返りを書く。	○ めあてに対して取り組んだ内容や方法を実感し、意思決定したことについて書くために、考えたことや今後の行動について記入する。	個人	5
	〈期待する振り返り〉 ・高校進学だけでなく、社会人としての目標など見通しをもつことができたから、今日決めた〇〇をこれから続けていきたい。 ・将来の夢をなりたい人として深く考えることで、自分がどんな人になりたかったのか、改めて分かったので、なれるように自分で作ったシートを使っていきたい。 (2)本時のまとめを教師が行う。			5

1. 単元名「消費生活・環境」 購入・支払いと生活情報

2. 単元目標

- 購入方法や支払い方法の特徴がわかり、計画的な金銭管理の必要性について理解する。(知識及び技能)
- 売買契約の仕組み、消費者被害の背景とその対応について理解するとともに、物資・サービスの選択に必要な情報の収集・整理が適切にできる。(知識及び技能)
- 物資・サービスの購入について問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを論理的に表現するなどして課題を解決する力を身に付ける。(思考力、判断力、表現力等)
- よりよい消費生活の実現に向けて、金銭の管理と購入について、課題の解決に主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして、実践しようとする。(学びに向かう力、人間性等)

3. 単元における川崎中 OSR の視点

Outlook (見通し)	Support (支援)	Reflection (振り返り)
・本時のめあてを生徒が設定するために、消費生活における自己の課題を確認し、前時の学習内容を振り返る時間を設定する。 ・本時の学習内容を示し、生徒がOUTLOOKカードに自らめあてを設定する。 ・学習の見通しを持たせるために、本時の学習内容や方法をホワイトボードで確認する。	・学習中は、商品(物資やサービス)を適切に選択、購入できるように授業支援ソフトを使って提示する。 ・主体的に学習に取り組むために、生徒1人で学習に挑戦するのか、ペアやグループ、教師と挑戦するのか学ぶ形態を選択する。 ・購入した製品を理由とともに級友と交流し、自分の考えに付加修正をかける場面を設定する。その際、交流の視点や交流のスキルを提示する。	・学習の振り返りでは、学習を振り返る場面を設定する。 ・家庭生活の中でどのような場面で活かしていくか具体的に記入する。

4. 単元指導計画(6時間)

次	時間	学習活動	評価の観点	評価規準 [評価方法]
一	1	1. 消費生活のしくみ・契約 ・自分の家族の消費生活を想起し、適切な消費行動について考え、課題を設定し、解決に向けて学習の見通しを持つ。	思 主	・物資・サービスの選択・購入、自立した消費者としての消費行動について、問題を見いだして課題を設定している。 [様相観察・アンケート] ・自分の消費生活の課題に向けて、計画的な金銭管理の必要性について、課題の解決に主体的に取り組もうとしている。 [振り返りシート]
	1	2. 家庭生活における収入と支出、購入方法と支払い方法 ・計画的な金銭管理の必要性や三者間契約の仕組みについて理解する。 ・自分に合った金銭管理の方法を考えてまとめる。 ・具体的な買い物場面を取り上げ、購入方法や支払い方法について考える。	知	・計画的に金銭管理の必要性について、売買契約の仕組み(三者間契約)について理解している。[学習プリント] ・購入方法や支払い方法の特徴を理解している。[ワーク]
	1	3. 消費者トラブルとその対策 ・消費者に関わるトラブルなどの実際の例を取り上げ、その解決方法について考える。 ・消費者トラブルの解決方法をグループで話し合い、発表する。	知	・消費者被害の背景とその対応について理解している。 [学習プリント・ワーク]
二	2 (2/2)	4. 情報を活用した上手な購入 ・商品(物資やサービス)を適切に選択、購入する方法について考える。 ・商品の選択、購入をするときに必要な情報を収集し、整理する。 ・商品の活用方法について考える。	知 思	・物資・サービスの選択に必要な情報の収集・整理が適切にできる。[学習プリント] ・物資・サービスの選択・購入について問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを論理的に表現するなどして課題を解決する力を身につけている。[様相観察・授業支援ソフト提出・授業中の発言]
三	1	5. よりよい消費生活に向けて ・これからの生活の中で、自分ができていることを考える。	主	・よりよい消費生活の実現に向けて、金銭の管理と購入について、課題の解決に主体的に取り組んだり、課題解決に向けた一連の活動を振り返って改善したりして、工夫し創造し、実践しようとしている。[振り返りシート]

5. 本時 令和7年 11月5日 水曜日 第5校時 3年3組教室に於いて

(1) 主眼 冷蔵庫を購入する際の選び方について、必要な情報をもとに選択し、その理由を交流する活動を通して、商品を購入する際の適切な解決策について、比較・検討しながら考察することができる。

(2) 準備 【教師】 学習プリント、資料カード 【生徒】 生徒用タブレット端末、教科書

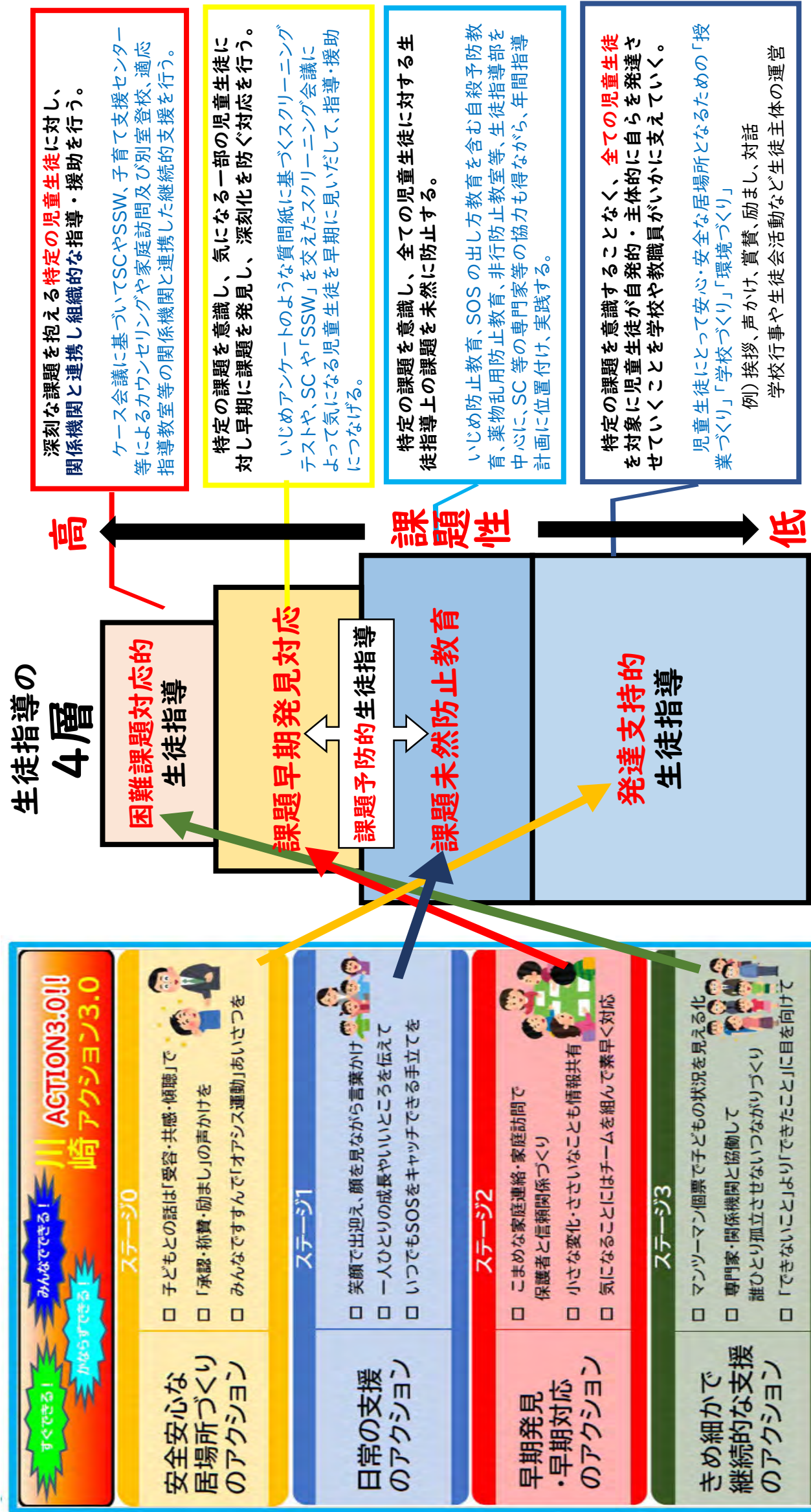
(3) 展開

過程	学習活動	指導上の留意点◇評価規準【観点】	形態	配時
導入	1. 前時の学習内容を振り返る。 ・意思決定のプロセスを確認する。 ①目的・課題 ②情報収集・方法の検討 ③決定 ④実行 ⑤評価・改善	○ 授業の流れを確認する。 ○ 前時に行ったお茶の購入を例にした、意思決定のプロセスを確認するように促す。 ○ 本時の学習内容を知り、めあてを考え、記入するように促す。 ○ 前時に行ったお茶の購入を例にした、意思決定のプロセスを確認するように促す。 (Outlook)	一斉	5
	2. 本時の学習内容を知り、めあてを決定する。 ・本時の学習内容を知り、OUTLOOK カードにめあてを記入する。 めあて 自分や家族の生活に必要な商品を購入するときに大切にすることを考えよう		個	2
展開	3. 架空の家族の生活に必要な冷蔵庫の購入をシミュレーションする。 【架空の家族】 父、母、中学3年(私)、兄(高校2年)、妹(小学5年) (1) 黒板に提示した商品情報を参考にしながら、自分自身が購入したい商品のシミュレーションをする。 (2) 生徒が、1人、またはペアやグループ、教師と一緒に挑戦するなど、学ぶ形態を選択する。 (3) 授業支援ソフトを使って、考えをまとめる。	○ 前時に学習した商品を選ぶときのポイントを参考にしよう伝える。 ・安全性 ・価格 ・利便性 ・表示(内容量等) (Support)	個	5
	4. 交流のスキルを使って、意見の交流をする。 (1) 授業支援ソフトで考えの共有を行う。 (2) 決定の見直しの観点を基に意見の交流をする。 ○安全性・機能 ○価格 ○保証・アフターサービス ○環境への配慮	○ 意思決定のプロセス③の「決定」した意思について、班で多面的・批判的に見直しをするよう促す。 ○ インターネットの情報は多岐にわたるため、情報収集では信頼できる Web ページを選択するよう伝える。 (Support) ◇商品を購入する際の適切な解決策について、比較・検討しながら考察している。【思考・判断・表現】	自己選択	15
	5. 買い物計画の付加・修正し、どの商品を購入するか決定する。 商品の決定の例 (理由 省エネを考えた商品で、家から行きやすい場所にお店があること、無料保証期間が4年間ある)だから (どこ 家電量販店)で(商品 冷蔵庫)を (支払い方法 クレジットカード(ボーナス一括払い))で購入することに決めました。		一斉	13
終末			個	5
	6. 今日の学習を通して、商品を購入するときに大切にすることを記入する。 記入例 よりよい商品を選択・購入するために、情報収集し、価格だけでなく保証や環境への配慮について考え購入する。 (Reflection)		個	5

MEMO

5. 資料





資料5 児童生徒情報共有シート

1	所属学級	氏 名		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	学校外関係機関
	不登校・不登校兆候の要因	現在の状況	今週の様子	欠席	遅刻	早退											
	マンツーマン対応教員	最終安否確認	今後の対応	主な対応・内容													
																	その他の情報(補足等)
2	所属学級	氏 名		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	学校外関係機関
	不登校・不登校兆候の要因	現在の状況	今週の様子	欠席	遅刻	早退										0日	
	マンツーマン対応教員	最終安否確認	今後の対応	主な対応・内容													
																	その他の情報(補足等)

資料6 川崎アクション3.0を基にした 教師の“振り返りポイント”



【学校生活全般を通してのポイント！】

- ☞ 連絡帳や作品等に、自己存在感や共感的人間関係につながるコメントを入れていますか。
- ☞ 校内や教室に、落書きや損壊箇所がないか確認していますか。
- ☞ 児童生徒が、遊び仲間を作って遊びに行く様子を観察していますか。
- ☞ 教室にいる児童生徒と話したり、気になる児童生徒への声かけをしたりしていますか。
- ☞ 「これは遊びです。」という児童生徒の言葉を鵜呑みにしていませんか。
- ☞ 児童生徒に任せている場合でも、分担等の方法を把握し、適切な指導・助言をしていますか。
- ☞ 常日ごろから、児童生徒と一緒に清掃する機会を持っていますか。
- ☞ 清掃中、児童生徒に「頑張っているね」や「ありがとう」等の声かけをしていますか。



【朝のポイント！】

- ☞ 教師の側から「おはよう」の声かけをし、児童生徒の心理状態を把握していますか。
- ☞ 健康観察で、一人一人を視診するとともに、気になる子への声かけをしていますか。



【授業中のポイント！】

- ☞ 児童生徒の多様な考えが発揮できる場、自己決定できる場を意図的に設けていますか。
- ☞ 学習の遅れがちな児童生徒も、学習中に活躍できる場を保障していますか。
- ☞ 誤答を大切に学習にしていますか。



【帰りのポイント！】

- ☞ 良かったこと、うれしかったことなどを称賛し合う場を確保していますか。
- ☞ 児童生徒の表情を観察し、普段の表情と変化がないか確認していますか。



ビジョン			1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
	東書テスト 課題領域		活用	活用	活用	活用	活用	活用
	令和6年度 標準化得点			70点	63点	61点	45点	50点
	令和7年度目標 標準化得点		75点	75点	70点	65点	50点	55点
評価検証サイクル1周目	重点① 単元名		たしざん ひきざん	100より大きい数を しらべよう	長さ	わり算の筆算	小数のかけ算・ わり算	分数のわり算
	実施月		6～7月	6月～7月	6月	5月～6月	6月	6～7月
	目標点		80点	80点	80点	80点	80点・75点	75点
	目標点 達成に 向けた 取組	各学 年	・具体的な操作を通し て加法や減法の意味 を具体的に捉えさせ る。 ・単元の習熟場面で は、順序や学習方法 を選択・決定できる ようにする。 ・練習問題に何度も 取り組みせ、定着さ せる。	・10のかたまりがいく つ、100のかたまりが いくつと置き換えさ せたり、もどしたりし ながら位取りについて 理解させる。 ・習熟場面では、教科 書問題、ドリル問題、 タブレット問題などを 自己選択・決定の場 を設定する。	・単元の5時間を自由 進度学習として自立的 に学べるようにする。 ・測定機器の選択・使 用や測定など体験的 な活動を多く設定し、 量感を育てる。 ・振り返りの時間を設 定することで、次の学 びに向かう意欲を高 め、見通しがもてる ようにする。	・わり算の筆算のパ ターンを徹底する。(た →か→ひ→る) ・わる数が2けたにな る時間から、習熟度別 少人数学習(5分割)を 設定し、問題の内容や 学習方法などを自己 選択させ、個の実態 に応じた学びを支援 する。	・レディネスをそろえ るため、単元に入る前 に前学年までの復習問 題に取り組む。 ・単元に入ってから は、当日の学習をふり 返ったり、定着を見取 ったりするために宿題 の内容を工夫する。 ・単元末習熟学習で 個人の課題に合わせ たドリル学習・プリ ント学習を行う。	・分数でわることの 意味について丁寧に指 導する。(TT) ・計算の仕方を考え る場合は、面積図や数 直線図などを使って具 体的に数量の関係を 調べて解決させたり、 除法のきまりを利用し て解決させたりする。 ・習熟場面では、少 人数学習を行い、計算 の徹底を図る。
	重点①単元 テスト結果		94.8点	92.1点	91点	78.7点	90点・82点	77.3点
	通過率		95%	83.9%	73.7%	71.0%	84%・67.7%	61.5%
	評価検証サイクル2周目	重点② 単元名		かたちあそび	かけざん九九	かけ算の筆算(1)	わり算の筆算 (2)	分数のたし算・ ひき算
実施月		11月	10月～12月	8月～9月	8月～9月	10月	10月～11月	
目標点		85点	80点	85点	80点	75点・70点	80点	
目標点 達成に 向けた 取組		各学 年	・個と協働的な学びを 取り入れた複線型の 自由進度学習を設定 する。 ・色々な形の機能や特 徴を調べたり、分類し たりする活動を体験 するコーナーをつく る。 ・個の実態に応じて、 ペアやグループで学 習を進めていけるよ うにする。	・かけざんの構成を理 解させるために導入 場面で操作活動が多 く取り入れる。 ・タブレットを利用し てフラッシュレーニ ングをする。 ・習熟場面では、学 習のツールや内容を 自己選択・自己決定 させる。	・学習内容の定着を 図るために、25分 は一斉授業をし、残 り20分はドンドン コースとじっくり コースに分割して 練習問題に取り組 ませる。 ・活用力を高める ためにICTを活用 し、基礎と活用を 組み合わせた練習 問題に取り組ませ る。	・習熟度別少人数 学習を行い、学習 内容や方法を提示 し、児童にコース 選択させる。 ・A層のグループ には、習熟場面で マイプラン学習を 実施し、自己の 課題に応じた学習 を自立的に進めら れるように支援す る。	・面積図や数直線に 表す活動を積極的 に取り入れ、自分の 考え方を整理したり 、友達に効果的に 説明したりして、 単位分数のいくつ 分という見方を養 う。 ・単元末では自己 課題に応じてプリ ントを自己選択し 、習熟に取り組 めるようにする。	・単元の後半に自由 進度学習を行い、 学びが深められ るようにする。 ・角柱や円柱を準 備して、体積を求 めるために必要 な構成要素に着 目できるように する。 ・既習の面積や 体積と関連づけ たり、共通点 を見つけて統 合的に捉えさせ たりする。
重点②単元 テスト結果		93.1点	87.4点	85.8点	80.5点	82点・86点	89.2点	
通過率		91%	81.2%	75.7%	71.8%	69.5%・73%	80.2%	
評価検証サイクル		東書テスト 課題領域 標準化得点		81点	72点	71.8点	67.2点	68点
	今年度 取組の 検証	各学 年	○習熟場面における学 習方法や順序の選 択によって、個に 応じた学習をす ることができた。 ●一斉学習による基 礎基本の徹底と自 己選択・決定学習 の設定の両立。	○学習方法の自己選 択・決定は活用力 を高める上で有 効だった。 ●学習方法だけで なく、自己課題に 応じた内容の選 択もできるように 準備する。	○学習環境を工夫 することで、自 立的な学びが促 され、活用力の 向上につなが った。 ●習得した学び をアウトプット する環境(コー ナー・教材など) を充実させる。	○習熟度別少人数 学習により各層 に応じた学習支 援ができ、理解 力が高まった。 ●児童が課題に 応じてコースを 自己選択でき るようにする。	○レディネスを揃 えることで自力 解決がスムーズ にできたり、学 び合いが活性化 したりした。 ●通過率を高 めることが課 題。CD層への 支援をさらに充 実させる必要 がある。	○式を図で表し たり、構成要素 を明確にし たりすること で、見方や考 え方が高まった。 ●単元を通した 自由進度(マイ プラン)学習を 設定し、自 立的に学ぶ力 と活用力を高 める。
	○成果 ●課題							
	来年度 に向けて		○習熟度別分割学習は、効果を検証し、改善を図って組織的・計画的に継続する。 ○単元内自由進度学習の時間設定・ガイダンスの在り方・マイプランの立て方(ICTの活用)などを検討し、児童の自立的な学びを支える「東小のスタンダード」を更新する。					

○単元の目標

--

○学習計画

時	学習内容	ページ	字数	予定	今日	めあて	ふりかえり(できたこと、できなかったこと、次回すること)	評価
①	「長さ」の学習を振り返ろう。	56	1	①	①			
②	巻尺の使い方を知ろう！	57 58	2					
③	長さをはかる道具を使って、長さを はかろう！	59	3					
④	新しい単位(たんい)や言葉を覚え て、計算しよう！	60 61	4					
5	いろいろな長さを体感しよう！	63	5					
			6					
			7					
			8					
			9					
⑥	力試しプリントにチャレンジ！	62	10	⑥	⑥			

児童生徒が自己存在感を甘受し、安心して学ぶためには、教師が一方的に説明する授業から、授業のねらいにふさわしい自己決定できる場をとり入れた「児童主体の授業」づくりに転換することが大切です。授業の土台となる言語環境（教師の言葉づかい、板書、掲示物、ICTの活用等）を整備し、各教科・領域の活動の充実を図りましょう。※教師は伴走者（ファシリテーター）

支援のポイント

- ・「何が難しいのか」という困難の原因となる「かべ」を分析して、それを乗り越えるために必要な自分（たち）の目標を定める。
- ・既習の活動や体験を基に見通しや困難を乗り越える計画を考える。
- ・誤行錯誤や練習を繰り返して、困難を乗り越えようとする。
- ・困難を乗り越えようとした過程を振り返るとともに改善案を考える。

どんな見方・考え方を高めるのか。「思考方法・表現」を基に、児童の発言をキーワードで想定し、児童の言葉を**ほめて**育てる。

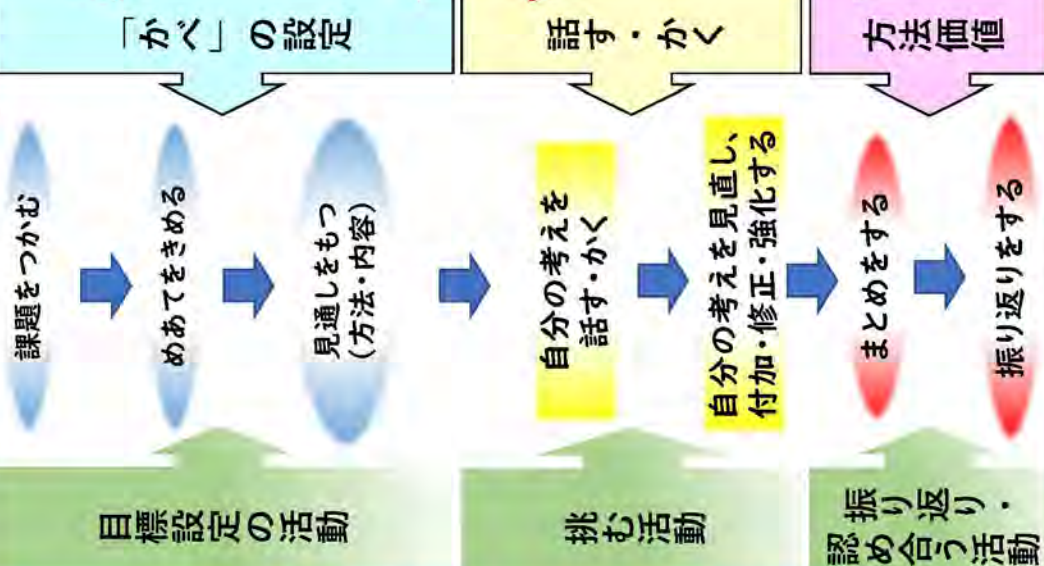
思考方法 「話す・かく」における思考表現

着目	～に目をつける、～の点から、観点を決めると
順序	まず、次に、〇つは、そして、さらに、最後に
比較	くらべると、同じ（ちがう）ところは、相違点
関係付け	あわせると、つなげると、くっつけると
具体	たとえば、例を挙げると
共通	同じ、似ている、きまり、まとめると、つまり、共通点
類推	だったら、前は～だったから（ので）、今回は～
理由	だから、理由は、なぜかという、ただ、だって
発展	じゃあ、さらに、付け加えると
仮定	もしも、～だったら、かりに、あえて
よさ	はやい、かんたん、せいかく（な方は～）日常的に使用
審美	うつくしい、きれいな、すっきり、すてき
多面的	事象を別の側面から ～の面から見ると
多角的	時間軸、立場 昔は～だったけど、～の立場で考えると
単位	～のいくつ分、～をもとにすると、まとまりで見ると

【学ぶことに挑み続ける子どもを育てる指標】
最も育てたいターゲット指標

- 【項目1】授業では、課題の解決に向けて、自分で考え進んで取り組んでいる。
- 【項目8】自分にはよいところがあると思う。
- 【項目16】自分で、目標や計画を立てて勉強している。
- 【項目17】難しい問題でも、いろいろなやり方を考えて取り組んでいる。
- 【項目18】いろいろなことが知りたいので、学校の勉強だけでなく家でも勉強している。

学習過程



支援

教師の支援

- 教科書の問題を生活に根ざした問題にアレンジして提示する。
- 生活科や総合的な学習の時間、特別活動で取り組んでいる教材
- 教科書の問題を生活に根ざした問題にアレンジして提示する。
- 日常生活との関連、身近な話題を少し紹介
- 教材の部分を提示（編）して提示、少しずつ提示
- 比較の問題を提示（似て非なるもの）
- 条件不足・条件過多（口）を使った問題提示
- 教材を徐々に提示。瞬間提示。見せる時間・部分を限定する
- お話にするなどストーリー性のある問題状況の設定の工夫
- インターネット画像やタブレットカメラを使った問題提示（ICT）
- デジタル教科書の活用（ICT）
- 実物・画像・動画で提示する（ICT活用）
- 問題をゲーム形式で提示（ゲーム化）
- ちょっとがんばれば解決できる課題に挑戦しよう！
- 全員で「めあて」をきめる
- スプレッドシートでグラフ作成し、実態や傾向をスライドで提示
- 見通しについて話し合う場を設定する。（解決への見通し・共有）
- 教科の特質に応じた内容や方法を自己選択・自己決定させる。
- 例：図表に描く、タブレット端末で調べる、具体物を使う等
- 教科の特質に応じた根拠、理由、自分の考えの3点セット
- 見方・考え方を発揮された姿を具体で想定しておく。
- 教師とのやりとりだけでなく、子ども同士のかかわり合いの中で、一人ひとりの見方や考え方を広げ深められるよう意識する。
- 机間巡視で学力層（C・D層）に応じた支援する。
- 意図的指名で子ども達（C・D層）の考えを黒板に書き、ほめる。
- 粘り強く取り組む姿をほめる。（考えを見直す時間の確保）
- 一人ひとりが自己決定し個に応じた内容・方法・道具で追究する。
- 子どもを見取り、状況に応じて適切に支援する。（指導と評価）
- 問い返しの発問（状況・明確化・情報提供・客観視・共に追究）
- ペア、グループ等でタブレットを囲みながら考えをつくる（ICT）
- 写真をとって、ペアで説明。（ICT）
- ホワイトボードで個々の考えを把握し意図的指名や友達同士の考えを説明（ICT）
- デジタル教科書の拡大機能をヒントカードとして活用（ICT）
- 振り返りの視点を提示し、子ども達が自己決定し、かく活動。
- ・わかったこと、できるようになったこと、気づいたこと
- ・友だちの考えでよかったこと、アドバイス
- ・これから考えてみたいこと、解決に役立ったアイデア
- ・成長した点やうまくいかなかった点
- 失敗から学ぶ。
- ふりかえり文を書く。その場で集め、即時評価する。
- タブレットカメラで写真を撮って蓄積（ICT）
- ロイノートにふりかえり文を入力する。（ICT）

【川崎町アクション3.0を基にした授業中の「振り返りポイント」より】

- ①多様な考えが発揮できる場、自己決定できる場の意図的な設定
- ②学習が遅れがちな児童の活躍できる場の保障
- ③思考等、児童の言動を大切にしたい学習の実践

3つの振り返りポイントは、学習展開のどこに位置付けても構いません。しっかりとこの視点を意識しながら、授業を行っていきましょう！！

研究授業の際も、指導案にこの3つの視点を明記すると、教師の支援がより明確になります。

(目的)

児童の実感と教師の実践を対比的に把握し、本研究の成果と課題を見つめ直す機会とするため。

(アンケート項目一覧表)

番号	分類	児童アンケート項目	教師アンケート項目
1	A 安心・居場所	学校に「自分の居場所がある」と感じていますか？	教室が児童にとって安心して過ごせる居場所となっているよう意識していますか？
2	A 安心・居場所	教室で自分の気持ちや考えを安心して言えていますか？	児童が自分の意見を安心して発言できる場づくりを意識していますか？
3	A 安心・居場所	学級に「安心して話せる友だち」がいますか？	児童が安心して話し合える関係性づくりを意識していますか？
4	B 関わり・絆	学級の友だちと助け合っていますか？	協働的な学びを意識した授業づくりを行っていますか？
5	B 関わり・絆	困ったときに相談できる友だちや先生がいますか？	日頃から児童に寄り添い、相談しやすい雰囲気をつくっていますか？
6	B 関わり・絆	学級の中で自分のやるべきこと・役割を果たしていますか？	児童が役割を自覚し、果たせるような学級づくりを意識していますか？
7	B 関わり・絆	人の役に立つ人間になりたいと思いますか？	「人の役に立つ喜び」を感じられるような場面を意図的に設定していますか？
8	C 挑戦・学び	授業のはじめに自分なりの目標(できるようなりたいこと)を考えていますか？	授業で「目標設定の活動」を取り入れていますか？
9	C 挑戦・学び	授業中に自分で考えたり選んだりする場面がありますか？	自己選択・自己決定の場面を意図的に設定していますか？
10	C 挑戦・学び	授業の終わりに自分のがんばりを振り返ることができていますか？	授業の終末に「ふり返し・認め合う活動」を設定していますか？
11	C 挑戦・学び	授業の中で、友だちのよさに気づくことがありますか？	他者の考えに価値付けする場面を授業内に設定していますか？
12	C 挑戦・学び	難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか？	「失敗を恐れず挑戦できる雰囲気づくり」を意識していますか？ (誤答の価値づけ、挑戦の称賛等)
13	D 自己認知・承認	先生はあなたのよいところを認めてくれますか？	児童のよさや成長に気づき、意図的に言葉で伝えていきますか？
14	D 自己認知・承認	自分にはよいところがあると思いますか？	児童の自己肯定感を高める声かけや支援を意識していますか？
15	D 自己認知・承認	授業などで「わかった」「できた」「がんばれた」と感じて、うれしく思ったことがありますか？	児童が達成感を感じられるような声かけや価値付けを意識していますか？
16	D 自己認知・承認	学校に来るのは楽しいですか？	児童が「学校に来るのが楽しみ」と感じられるような環境をつくっていますか？

【カテゴリ別の説明】

- ・ A 安心・居場所: 心理的安全性の土台に関する問い
- ・ B 関わり・絆: 人とのつながりや責任感、社会性
- ・ C 挑戦・学び: 学習活動を通じた自己決定・挑戦・成長
- ・ D 自己認知・承認: 自分のよさ・達成感・承認に関する内面的実感

検証改善協議シート

年

組（真崎小学校）

1学期

教科	単元名	期待 正答 率 (%)	通過率及び未通過者数						通過率及び未通過者数						未通過者数			所見 (未通過者名、点数、効果的な取組・手立て等)
			テスト1回目			通過率 (%)	所見 (未通過者名、点数、効果的な取組・手立て等)	テスト2回目			通過率 (%)	通過率		1回目 2回目	増減			
			受検者数 (人)	通過者 数(人)	未通過者 数(人)			受検者数 (人)	通過者数 (人)	未通過者 数(人)		達成	達成					
1	算数	80%				#DIV/0!								#DIV/0!	0	0		
2	算数	80%				#DIV/0!								#DIV/0!	0	0		
3	算数	80%				#DIV/0!								#DIV/0!	0	0		
4	算数	80%				#DIV/0!								#DIV/0!	0	0		
5	算数	80%				#DIV/0!								#DIV/0!	0	0		
6	算数	80%				#DIV/0!								#DIV/0!	0	0		
7	算数	80%				#DIV/0!								#DIV/0!	0	0		
8	算数	80%				#DIV/0!								#DIV/0!	0	0		

資料45 検証改善協議シート

6. 全体会

全体会Ⅰ

開会行事

あいさつ

福岡県教育委員会

主任指導主事 河島 健治 氏

川崎町立川崎中学校

校長 安部 博智

研究の概要説明

○川崎町教育委員会

○川崎町立川崎中学校

全体会Ⅱ

質疑・応答

研究のまとめ

福岡教育大学

教授 友清 由希子 氏

閉会行事

あいさつ

川崎町教育委員会

教育長 森 秀二

全体会Ⅰ

1 開会行事

○ あいさつ

- ・ 福岡県教育委員会 主幹指導主事 佐藤 円 氏

- ・ 川崎町立川崎中学校 校長 安部 博智

2 研究の概要説明

○ 研究報告1

- ・ 川崎町教育委員会 指導主事 金高 智典

○ 研究報告 2

- ・ 川崎町立川崎中学校 教 諭 平林 大

全体会Ⅱ

1 質疑・応答

2 研究のまとめ

福岡教育大学教育学部心理学ユニット 教授 友清 由希子 氏

3 閉会行事

○ あいさつ

- ・ 川崎町教育委員会 教育長 森 秀二

MEMO

7. 分科会

A分科会

「生徒が主語になる川崎中OSR及び新たな不登校を生まないグレーゾーン会議の取組」

1階多目的ホール

B分科会

「児童が主体的に学ぶ自己選択を取り入れた授業改善の取組」

2階多目的ホール

C分科会

「児童が自己調整しながら主体的に学びに向かう諸活動の取組」

3階多目的ホール

A 分科会：1 階多目的ホール

【生徒が主語になる川崎中 OSR 及び新たな不登校を生まないグレイゾーン会議の取組】

○川崎中学校

B 分科会：2 階多目的ホール

【児童が主体的に学ぶ自己選択を取り入れた授業改善の取組】

○川崎東小学校

○真崎小学校の取組

分科会 C：3 階多目的ホール

【児童が主体的学びの質を高める諸活動の取組】

○川崎小学校

○池尻小学校の取組

研究同人【令和7年度】

川崎中学校

安部 博智	秋山 菜々美
重野 年宏	辰嶋 杏音
犬丸 成美	古川 風我
中野 純孝	相緒 美由紀
武田 真由美	永野 周平
前田 雅仁	安永 克生
加留部 伸二	小峠 由美
花崎 智晴	兼行 佐織
柳本 卓夫	堀尾 侑希
渡邊 雅美	伊藤 敬之
大谷 洋介	山根 美咲
園山 勝	森元 道代
上田 苑加	西田 佳那子
平林 大	大場 綾沙美
井上 誠	梶原 孝幸
田島 のりこ	蓮井 宗道
谷川 佑太	工藤 眞奈美
江口 悦正	中田 千夏
佐藤 貴子	松鶴 竜生
西 勇哉	
高水間 聡	
藤川 梨紗	

川崎小学校

永田 雅士	馬原 伸司
西畑 いせ	橋本 勉
角谷 朋恵	野澤 雅弘
今井 悦子	中川 美香
佐藤 綾	中瀬 勇希
小田 悠	白石 哲一人
高瀬 大輔	田中 直美
平賀 愛乃	岸本 清香
小西 美音良	工藤 眞奈美
丸山 泰平	ヒックス浩子
牛尾 啓成	西田 佳那子
永原 愛弓	梶原 孝幸
原田 圭	
安藤 静司	
檜皮 真一郎	
西部 百恵	
友永 宗興	
神宮 史朗	
盛坪 桂子	
奥 佳子	
渡邊 美月	
奥永 秀美	

研究同人【令和7年度】

川崎東小学校

上原 誠司
宮村 歩
太田 美穂
山内 淑子
上村 勇広
春藤 明日香
柳井 文陽
松尾 知佳子
安藤 真
仲野 早紀
平井 武道
原田 大誠
立石 三優
戸野本 寧葉
塚本 涼香
橋詰 真莉奈
小島 誠治
栗林 由美
松隈 均
平良 愛子
船原 ゆかり
星出 智絵

真崎小学校

小西 良平
中山 茂
中村 真悟
渡邊 広宣
野村 由季
松岡 綾
岡野 敏之
伊藤 匠
平澤 翔菜
大石 莉乃
廣田 菜々美
福本 菜摘
法花 武男
齊藤 ますみ
五郎丸 敦美
水津 真二
平良 愛子
山崎 英美
有田 真理子
小田 麻友

池尻小学校

高上 克也
山口 大介
早瀬 展肖
木牟礼さやか
萩尾 あづさ
神田 智美
末吉 寛行
鳥越 健太
松田 和音
四郎丸 華有
井村 昂
平島 未裕
緒方 航輝
黒川 時定
奥 奈保子
古賀 久美
福原 華代
金光美由紀
中村 裕子
縣 秀晴
久原 琢磨
渡邊 裕子
坂田 理枝

筑豊教育事務所

主任指導主事
都積 友紀

指導主事
山口 由一郎

指導主事
石川 直也

指導主事
塩川 睦美
(R5-6年度)